

雷霆の祖父へ英雄の誓 いを

自墮落無力

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは雷霆の如き、祖父へ英雄になるといふ誓いを掲げた男の話である。

目次

九話	八話	七話	六話	五話	四話	三話	二話	一話	時系列 原作一卷&ソード一卷	序章
84	75	67	59	50	39	27	18	7		1

二十一話	二十話	十九話	十八話	十七話	時系列 原作二卷&ソード二卷	十六話	十五話	十四話	十三話	十二話	十一話	十話
178	171	164	153	145		136	127	119	111	102	97	90

序章

その少年はとある田舎の村で生を受けたが、しかし少年が物心つく前には彼の両親は亡くなっていた。

普通はその時点で孤児となるのだが、幸いにも少年には祖父となる老人が居た。

「良いか、ベル……男ならば英雄を目指すべきじゃ」

祖父は少年に様々な英雄譚を読み聞かせながら、育てていき……少年も祖父から読み聞かせられる英雄譚を楽しみ、英雄という存在にも憧れを持っていく。

そんな日々のある日、ベルは好奇心から村を飛び出したのだが……。

『グオオオオツ!!』

この世界において一番の凶悪であり、狂暴にしてこの下界においてはあらゆる生命体の天敵でもある異形の怪物である『モンスター』の群れと不幸にも遭遇してしまった。

「わ、わああああっ!!」

少年は必死に逃げたが、追い詰められてしまい、もう駄目かと思った時……。

「ベルツ!!」

祖父が間一髪、間に合うと今まで見た事が無い凄まじい武勇を持つてモンスターを蹴散らしてしまった。

「(す、凄い…………)」

少年は祖父の武勇にまるで雷霆の如き、威風を感じながら魅せられる。

「う…………痛たた…………まったく、慣れない事をするもんじやないのう」

多少、攻撃を受けて損傷してしまつたが祖父は苦笑して、ベルへと近づく。

「このわんぱく小僧め…………村の外に出るなど言うたじやろう」

「…………ご、ごめ…………ごめんなさいお祖父ちゃん」

軽く小突かれた少年は苦笑する祖父へと謝りながら、抱き着く。

「おうつ、い、いたた…………もつと優しく抱き締めてくれ」

「ごめんなさい…………ねえ、お祖父ちゃん」

「なんじや、ベル?」

「僕、お祖父ちゃんみたいに強くなつて、英雄みたいに皆を助けられるようになりたい」

ベルは祖父にそう、告げた。

「わしを目標にするようじや駄目じや。もつとでかいものを目指せ。例えば世界一強く

て、誰より優しい英雄とかのう」

「なれるかな……」

「諦めない限り、なんにでもなれるさ」

「じゃあ、頑張る」

「ああ、頑張れ」

少年はこの日、英雄となる事を祖父に誓った。

この誓いこそは彼にとって絶対にやり遂げるべき『不変』の誓いであった……。

2

下界のとある場所にモンスターが生まれ続ける場所が、正しく魔窟と呼ぶべき場所がある。

その場所の名は『ダンジョン』であり……。

「(不意を突かれたか……まだまだ未熟だな)」

彼自身だけじゃない血に塗れ、ズタボロな状態で倒れた短い白髪に赤い瞳の少年が倒れ伏していた。

「ヴモオ……」

少年から少し離れた場所で牛頭人体であり、筋骨逞しいミノタウロスが少年を一瞥して去ろうとする。

このダンジョンで戦っていた少年の隙を衝いて、ミノタウロスが体当たりにより、吹っ飛ばしたのである。

「立たないとな」

少年は3日ほどだろうか……ダンジョンに籠り、モンスターと戦い続けていて消耗状態、更にはミノタウロスの強烈な体当たりで相当なダメージを受けてはいたがそんなものは問題ないばかりと意思を滾らせ、体に立ち上がる事を要求する。

「おい、まだだぞ……俺は死んでない」

少年は立ち上がりながら両手に長剣を持ち、構えて告げる。

「ヴムウっ!？」

ミノタウロスは少年から放たれる強烈な気迫に気圧されると体勢を低くし、次なる突撃のための構えを取る。

「(お祖父ちゃん……使うよ)」

少年は先ず、祖父へと内心で告げ……。

「轟^{ビート}け」

自らが有する魔法を使うための超短文詠唱をする。

「ケラウノス・エナジー」

そうして少年の内部に雷霆の燃料が生成、注がれると力を与える。

更に少年の体が雷霆の輝きを放つようになった。

「いくぞっ!!」

「ヴモオツ!!」

少年とミノタウロスはどちらも驀進し……。

「はあっ!!」

雷霆の剣閃がミノタウロスの頭部へと振り下ろされると凄まじい威力により、両断するままに消滅させた。

「…………う、げほ…………」

直後に少年の体から雷霆の輝きが消えると同時に片膝を地に付けながら、吐血する。

「あ、あのこれを…………高等回復薬です」

そんな少年の元へと長い金髪に金の瞳の美しい容姿の女剣士が近づき、液体の入った試験管のような容器を差し出す。

「助かる」

少年は剣士から容器を受け取ると飲み干した。すると外傷が治癒される事で消えていく。

「ごめんなさい……あのミノタウロスは……」

「そういう事なら、これで貸し借り無しだ。俺はそれで良い」

申し訳なさそうに女剣士が言うと、少年はそう返して女剣士から離れゆく。

「あの、私はアイズ・ヴァレンシユタインです」

「俺はベル・クラネルだ」

ベルはアイズに名乗り返すとダンジョンからの帰還のためにこの場を去り行くのであった……。

時系列 原作一卷&ソード一卷

一話

この下界にはヒューマンや犬シアンスロップキヤットビープル、人に猫、人などの獣人、エルフ、ドワーフにパルウム等の亜人が古代から暮らしている。

更に古代にてモンスター蔓延る絶体絶命の状況から、モンスターをダンジョンの中へと追いやってみせた奇跡を起こした英雄たちの可能性に惹かれて超常の世界である『天界』からこの下界に降臨した『超越存在デウスデア』の神々など様々この下界には様々な種族が暮らしている。

そしてこの下界において人と神が多く暮らしている場所は『迷宮都市』のオラリオである。

オラリオは『迷宮』の名を冠しているようにダンジョンを有している。

いつそこに出現したかは分からないが、モンスター発祥の『大穴』の中の地下世界こそがダンジョンだ。

古代においてそのダンジョンの入口である『大穴』にそのまま、長大で超高層の塔で

摩天楼施設である『バベル』で蓋をし、そこを中心にオラリオは発展していった。

『ダンジョン』は階層を下れば下るほど過酷な環境と化していくし、産出されるモンスターの強さに数も凄まじいものへとなっていくが、ダンジョンの中にある物質や下界において価値のあるもの。

更にモンスターも『魔石』という核を有していて、それはこの下界において重要な資源であり、『ドロップアイテム』という様々な武具や防具、薬品などの原材料となるものを倒しさえすれば獲得できるので。

しかし、当然モンスターを倒すのは簡単な事じゃない。

そこで『神々』は下界の人々と暮らすために自身の超常的な力を封じながら、下界の者に『神の恩恵』^{ファルナ}を与えて己の眷属とした。

『神の恩恵』は自分の経験した事象を〔経験値〕^{エクセリア}という糧にして、刻まれた者の能力を強化できる。

もつとも強化の程も、『器』を上昇させるのも刻まれた者自身の努力によるがしかし、それでも神の眷属になれば超人になれるのでダンジョンの探索も出来る。

故に何か野望や使命、果たすべき夢を抱える者たち、眷属を多く持たたい神々は『迷宮都市』であるオラリオに集まり、そして多くの神と眷属による集団こと〔ファミリア〕が居を有している。

他の「ファミリア」と勢力争いをしたり、同盟を築いたりしているのである。

そんなオラリオはバベルを中心地として放射状に八方位、メインストリートと呼ばれる大通りが八本存在する。

例えるならばホールケーキを八分割したような感じであり、それぞれの方角のメインストリートではそれぞれ、特色のある生活模様が築かれているのだ。

西のメインストリートでは一般市民が多く暮らしているというように……そして、西のメインストリートの路地裏深く、一軒家であり店舗を本拠とした「ファミリア」があった。

回復薬系の道具を取り扱っている商業系派閥の「ミアハ・ファミリア」である。

「ただいま」

そんな「ミアハ・ファミリア」の本拠、『青の薬舗』の扉を開けて団員であるベル・クラネルは挨拶をする。

「おお、戻ったか。いつもすまぬな、ベルよ」

ベルを喜んで出迎えたのは灰色のローブを着た長身でしなやかな体格を有し、長い群青色の髪で貴公子のような整った美貌を有する男神のミアハであり……。

「三日間、お疲れ様……良く頑張ったんだね」

ベルより先にミアハの眷属となっていて、更には実質的な団長である犬人の女性が優しく微笑み、近づいていく。

彼女はナアーザ・エリスイス——犬人のために頭部には犬の耳と臀部には犬の尻尾を有していて、髪はハーファップ、容姿は整っていて表情は常に眠たげ、左腕は半袖だが右腕は長袖という特徴的な上衣を着ていて、右手は革製の手袋で隠してもいる。

実はかつての「ミアハ・ファミリア」は今のような主神一人、眷属二人と言う零細派閥ではなく、中堅規模の派閥であった。

しかし、ナアーザがダンジョン探索中にモンスターによつて重傷を負わされたうえに右腕を完全に食われてしまった事で超高品質の義手こと『銀の腕』アガトラムの移植を多額の借金をしてまで対立派閥であった「デイアンケヒト・ファミリア」に依頼し、そうして「ミアハ・ファミリア」は団員も権威も失ってしまったのである。

更にナアーザもモンスターに重傷負わされ、右腕をも食われたとあつて精神にも深い傷を刻まれ、モンスターと接触するだけで体が震えて動けなくなつてしまったのでダンジョン探索は不可能となつた。

故にダンジョン探索が出来る眷属を求めていたが、貧乏な事やミアハが積極的に無料で回復薬を配つたりするので舐められ「ミアハ・ファミリア」に入団する者は中々現れなかつた。

しかし、ちょうど半月前に現れたのだ。

「ダンジョン探索出来る者を求めていると聞いた」

このオラリオの運営や【ファミリア】の管理、冒険者に対する支援など様々な事をやっている中枢組織である『ギルド』からこの派閥の事を知り、眷属になりに来たベル・クラネルが……。

「入っても良いが……条件が一つ」

そうして、ベル・クラネルは自分のやり方、ダンジョン探索の方針には一切の口出しをしない事を条件にミアハの眷属となった。

ベルにとつては零細や新しく設立された派閥の方が色々と自由が利くと判断したので【ミアハ・ファミリア】を選んだのである。

実際、ベルの加入と働きは【ミアハ・ファミリア】の大きな助けとなっていた。

「本当はもつと籠りたかったんだが、ミノタウロスが五階層に出てくるなんてイレギュラーがあつたから、戻る事にした」

ベルはナアアザにそう、少し不満げに答えた。

『ミノタウロスっ!?!』

「ああ、どうやら【ロキ・ファミリア】が取り逃がしたらしい……そいつは俺が倒したし、そいつとの闘いで負った傷と疲れはアイズ・ヴァレンシュタインとかいう人が高等回復

薬をくれたからそれでチャラって事にした」

驚くミアハとナーザにベルは淡々と報告した。

「そうなんだ……とにかく、無事で良かったよ。ベル」

ミアハは開いた口が塞がらず、辛うじてナーザがベルに声をかけた。

「どうも……これは三日分の稼ぎだ。先に使い物にならなくなった装備品とか戦闘衣は買い替えてるから残りは十万程だ」

「分かった、それでもいっぱい稼いでくれたんだね。ありがとう」

「……いっぱい稼いでくれと言われたからな」

ナーザはベルが差し出した包みを受け取りながら、ベルの頭を優しく撫でた。

ベルはナーザに色々と可愛がられており、そんな彼女に最初は止めるように言ったが、『私のベルに対する接し方にも、口出して欲しくないな』と言われてしまえば反論は出来ず、仕方がないので受け入れる事にした。

因みにベルは14才でナーザは18才である。

「ミアハ様、『ステイタス』更新お願いします」

「ああ、分かった」

そうしてベルはミアハと共に彼の部屋へと行き……。

ベル・クラネル

L V・2

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

幸運：1

《魔法》

【ケラウノス・エナジー】

・強化魔法

・『魔力』以外の能力強化

〇〇

《スキル》

イロアス・シンフォニア
【英雄誓約】

・早熟する

・意思が続く限り効果持続

・意思の丈により効果向上

【不倒不屈】
ネバー・サレンダー

・『耐久』のアビリティ超高補正。

・戦闘時における体力と精神力の自動回復（回復量は戦闘の質に応じて上昇）

ベル・クラネルはミノタウロスとの戦闘の結果もあつて「ランクアップ」し、レアの発展アビリティと強力な「スキル」を手にした。

「半月で「ランクアップ」とはな」

ミアハは半月で「ランクアップ」する程のベルの激闘ぶりや新しく発現したスキルの効果に何とも言えない顔をする。

ともかく、そうしてベルはダンジョン探索で汚れた体を清め、疲れを癒そうと浴室に入ったのだが……。

「ベル、お疲れ様……」

「っ、ナ、ナーザさ……んむっ!？」

シャワーを浴びているベルの後ろからナーザが抱き着き、振り向いたベルの口へと深く口づけをし、味わっていく。

「んむ、くちゅ、ふむ……ふは……たっぷり癒してあげるよ、ベル」

「だ、だからってこんなのは……んむ……」

「良いの……私が望んでる事だし、こんな事くらいしか出来ないから……」

蕩けながら戸惑うベルに対し、妖艶な雰囲気纏いながらナーザは言って……。

「それに愛してるよ、ベル」

再度、深い口づけをし……そして……。

2

現在は夜に包まれたオラリオ——西のメインストリートにある「ミアハ・ファミリア」の本拠、『青の薬舗』。

ベルの私室では……。

「まさか、こんな事になるなんて……ナーザさんには一生、敵いそうにない」

寝台にてベルは目覚め、隣で自分に抱き着きながら眠るナーザを見、苦笑して言う。ベルとナーザはどちらも裸であり、浴室でもそうだが彼と彼女は男女の関係を築いたのである。

「女性は強いってというのが良く分かったよ、祖父ちゃん」

自分の育ての祖父へと呟くとナアーザを起こさないように静かに寝台から抜け出し、冒険者としての衣服を着て、買い替えた長剣を納めた鞆に水と糧食を持って本拠を出る。

そうして向かうはオラリオを囲んでいる市壁の上……。

「はあっ!!」

ベルは一人、長剣をひたすらにまるで基礎の追求こそ全てだというように猛烈な勢いで振り上げ、振り下ろし続ける。

終わりや果てが見えない程に……、

祖父に誓った誰よりも強く、そして誰よりも優しい『英雄』になるという不変の誓いを果たすためにベルは努力をしているのだ。

「……鬱陶しい」

ただ、バベルの頂上からだろうか……自分の全てを無遠慮に覗こうとする銀の視線を感じ、ベルは鬱陶しそうにしながらも無視した。

その視線を感じたのはこれが初めてでは無く、今のように市壁の上での鍛錬やダン

ジョンに行くためや本拠へと帰還するためにバベルを行き帰りしている時にさんざん、感じていたからだ。

「ふふ、無視するだなんてつれないわね……でも、やっぱり素敵」

「バベルの頂上の部屋の主、魂の質をその瞳で見通せる女神がベルの魂に見惚れながら、賞賛するのであった……」。

一話

神々と人が交わり暮らしているこの神時代、その縮図のような大都市であり、モンスターの魔窟であるダンジョンを保有している事から『迷宮』の名を冠した都市であるオリオ。

この都市へと日の光が降り注ぐ。時間帯は早朝である。

「ふっ、しっ……ふう……」

西の市壁の上で夜中からずっと剣を振り上げ、振り下ろす鍛錬をしていたベルは最後に大きく剣を振り上げ、振り下ろすと深呼吸して止めた。

そうして、西のメインストリートの路地裏にある一軒家兼店舗である「ミアハ・ファミリア」の本拠、『青の薬舗』へと帰った。

「お帰り、ベル……ダンジョンでもそうだけど、帰ってきたら帰ってきたで精が出るね」
『青の薬舗』の扉を開ければ、ナーアザがベルへと微笑みながら出迎えた。

「日課ですから」

「ふふ、本当にベルは努力家だよ」

ベルもナーザーへと微笑むと私室に剣など片付けながら、汗と汚れに塗れた体を流すために浴室に入ろうとしたが……。

「ベル、一緒に入ろう。もう愛し合った仲だから問題ないし、体も洗ってあげるよ」

「そ、そうですね」

何やら逆らえない気迫を放ちながら、ナーザーに言われたのでベルは了承し、浴室へと入れば……。

「頑張り屋なのは良いけど、抱き合った時くらい鍛錬止めてよ。ムードも何も無いでしょっ!!」

「ご、ごめんなさいいいいいっ!!」

ベルは浴室にてたつぷりと性的なお仕置きをされてナーザーにたつぷりと躡けられたのであった……。

その後は起床したベルとナーザーの主神であるミアハと共に朝食を摂り、ベルは「ランクアップ」した事の報告とL.V. 2になったのでダンジョンの中層域を探索出来るように『中層域』についての知識を得るために北西のメインストーリーにある『ギルド本

部』へと向かうために本拠を出た。

一応、護身の意味合いも兼ねて戦鬪衣を纏い、長剣を鞘に納めたそれを装備をしながら大量の羊皮紙と血をインクとして使える特殊な羽根ペンを入れた鞆も持つ。

そうして、西のメインストリートを歩いていたが……。

「（この視線は……）」

ベルはとある場所から市壁の上で鍛錬している時やバベル付近を歩いている時に良く感じる自分に対して無遠慮に全てを見透かそうとする銀の視線を感じる。

何回も視線を注がれているせいか視線に対して敏感になってしまったのである。

それ以外にも銀の視線だけでなく、他の者からの視線まで感知できるようになった。

そして、銀の視線が注がれている方角や距離は近い。

更に……。

「あの一っ!!」

銀の視線は消えると同時に後ろから声がかげられた。

ベルは他者に優しく対応する事は誓っているものの、それはそれであり、これはこれ。

関わる者を選ぶ事ぐらいはするし、間違いなく声をかけた者と関われば碌でも無い事になりそうな気がした。

「……」

「ちよつとー、いくらなんでも無視しないでくださいよーっ!! 大声で泣きますよっ!!」
なので声を無視して去ろうとすれば、大声で叫ばれたうえに近づかれた。

「……はあ、何か用か？」

「そんな、面倒くさい人に絡まれたみたい溜め息やらぞんざいな対応されると凄く傷つくんですけど……」

振り返れば声をかけてきた者は白いブラウスと膝下まで丈のある若葉色のジャンパースカートにその上から長めのサロンエプロンという制服を着た薄鈍色の髪を後頭部で団子状に纏め、そこから一本の尻尾を垂らしたようなポニーテールの亜種のような髪型で薄鈍色の瞳の可愛い容姿をした女性であった。

「今もそして、前からずっと覗き見されたらこんな対応にもなるだろう。ようやく、接触してきただけマシとは思うがな」

「一体、何を言っているんですか。私が貴方を見たのは初めてなんです」

「可愛らしく惚けても無駄だ。ずっと視線浴びせられたせいでこっちは丸分かりなんだよ。まあ、良い……先ずは自己紹介と行こう。俺の名前はベル・クラネル。【ミアハ・ファミリア】所属の冒険者だ」

ベルの言葉に対し、愛嬌漂わせた首の傾げ方で惚けた女性に対し、ベルは溜息を吐き

ながらも自己紹介をする。

「はい、自己紹介ありがとうございますベルさん。私はその『豊穰の女主人』で働いているシル・フローヴァです」

そうして、シルも又、西のメインストリートに建てられた家や店の中で一番大きな宿屋染みた建物を指指しながら、自己紹介して頭を下げる。

「それじゃあ、シルさんの店に行きますからもう覗き見するのは止めてくださいね」

「ふふ、ありがとうございます。ベルさん」

ベルはシルが声をかけてきた意図を察して『豊穰の女主人』を利用する事を告げ、時間の予約と主神一人とナーザも含めて眷属二人での利用を予約した。

「それじゃあ、来店を楽しみにしています」

「ああ」

（ ）機嫌な様子で微笑むシルにベルは苦笑すると一旦、ミアハ達に『豊穰の女主人』で食事をする予約をした事を伝えるに言った。

「勿論、良いぞ……それにベルから宴を提案されるとは予想外で本当に嬉しい」

「私も良いよ。ふふ、やっぱりベルは良い子だね」

ミアハもナーザもベルからの提案に喜び、『豊穰の女主人』での食事を了承したの

だった……。

2

オラリオの北西のメインストリートに建てられた『万神殿』^{バンテオン}はこのオラリオの全てを担っている中枢組織、『ギルド』の本部である。

「はあああああつ!!」 半月でLV・2ううううつ!!」

ギルド本部で働く受付嬢の一人で冒険者のアドバイザーも務めており、更にはベテランとあって、受付嬢たちのまとめ役も担当している狼^{ウエアウルフ}人の女性は面談室の中で大きな驚愕の叫びを上げる。

赤い長髪に成熟しながら、端正な容姿を有する彼女の名はローズ・ファネット。ベルのアドバイザーであり、ナーアザが冒険者として活動していた時のアドバイザーを務めていたのもローズである。

「ちよつと、声がか過ぎるってローズさんっ!!」

ベルは「ランクアップ」した事を報告すれば、外にも聞こえる程の叫びを上げたローズに対して声を上げた。

「無茶言わないでよ、たった半月で『ランクアップ』なんて前代未聞で衝撃的すぎるわっ!!」

ローズはベルへと更に声をかけて頭を抱えた。

ナアザからも頼まれたのでベルのアドバイザーを担当したのだが、今回もそうだがLV・1なのに単独で『上層域』の修羅場である『12階層』まで早々へ行ったり、更にはダンジョンに籠り続けたり……安全機能をぶっ壊したような無茶をし続けているのに成果を成してしまっている常識外れで規格外なベルにローズは本当に頭が痛くなった。

「つていうか、ミノタウロスの件は昨日のうちに報告しなさいよ。重要な事なんだから」
そうして、「ランクアップ」の要因——他の冒険者に対して参考にさせるため（もつとも、ベルのは自殺行為過ぎて書けないが）、聞き取りをする中でミノタウロスの事を聞いたのでローズは指摘する。

「いや、他の冒険者に被害は無かったし俺も助けられたから良いかなって……それに

そつちだつて、犠牲も無い以上、最大派閥でオラリオにとっては重要な派閥でもある「ロキ・ファミリア」には注意くらいしか出来ないだろ？」

「まあ、それはそうだけど……で、今回は「ランクアップ」の報告に來ただけつて事で良いのかしら？」

「いや、『中層域』の資料を見せて欲しいんだけど」

「はいはい、もう好きにして……」

このギルド本部には通常開放されていない職員用の廊下を進んだ先に都市や周辺地域の歴史、モンスター及びダンジョンの情報が蓄えられた広大な書庫である資料室があり、その使用許可をベルはローズに求めた。

ローズは了承し、一緒に入るとベルは『中層域』の情報が記された資料を見ながら、用意した羊皮紙に要点を纏めて書き写すという勉強を始めたが……。

「ちよつと、失礼」

「ん、く、お、おい……ローズさ……」

ローズは悪戯染みた笑みを浮かべながら、ベルの頭を優しく撫で始め、更には搔くようにして刺激を与え、戸惑いながらも心地良さそうにするベルの顔をも弄り始める。

「へえ、ナーザの言う通り……あんたは可愛がられるのに弱いみたいね」

「ちよ、べ、勉強が……」

「うるさい、こっちはあんたを相手するのに疲れさせられるんだから、責任取りなさい」
「ちよ、ま……」

そうしてベルは飼う兎が如く、ローズに徹底的に可愛がられ始め身も心も蕩かされて
いったのであった……。

三話

今までベルの冒険者としての活動はダンジョンの1階層から12階層までが『上層域』と呼ばれる層域なのだが、この層域までを探索範囲としつつ、モンスターと戦い、ドロップアイテムや魔石を回収し、それが持ち運べない程の量になればベルの換金所にて換金しつつ、それを一時的な保管所にて預け、水に糧食、装備品に回復薬などの調達をしてはまた、ダンジョンへと探索に行くというのが基本。

後はダンジョンの壁や地形を破壊すれば修復にダンジョンは力を割くのでモンスターが産出されない特性を活かしての休憩や短時間の睡眠をするなどしてダンジョンに籠っている。

こうする事なるべく早く、L.V. を上げられるようにしているのだ。

因みに冒険者の世界においてはL.V. 1は下級冒険者であり、1v. 2からは上級冒険者と呼ばれるようになるがその中でも区分はある。

L.V. 2は第三級冒険者、L.V. 3からL.V. 4は第二級冒険者、L.V. 5以上からは第一級冒険者となっている。

最強を目指すならば、L.V. 5以上……それも祖父によればL.V. 9となった眷属が居たと聞いた事もあり、ベルはそれすら超えようと目標を立てていた。

それは過酷であり、苦難の連続でしかないが彼はミアハの眷属になるまでに基本の戦闘技能、『技と駆け引き』は祖父から学び、厳しく鍛えられてきた。

更にはダンジョンから産出される物と比べれば、魔石を分割して繁殖させる手法を取るために外で生活しているモンスターは戦闘能力が低いとはいえ、村周辺、あるいは遠くにて活動していたモンスターを倒したり、『神の恩恵』を有した盗賊の討伐など激戦による実戦経験も積んできたので戦闘の難度がどれだけ上がろうと今更、ベルの心が折れる事は無い。

ともかく、そうしてL.V. 2になった事で『中層域』を探索範囲とするためにアドバイザーであるローズの助けも借りて、ベルは『中層域』の情報を頭に叩き込もうと勉強を始めたが……。

「ふふ、ほれほれ……ここ、気持ちいいでしょう」

「っ、あ、んん……」

ナアーザ經由でローズにベルは女性に可愛がられたりするのに耐性無く、受け入れてしまう性質を知られた事で勉強の合間に愛玩鬼が如く、可愛がられ続けた。

「それにしてもこんなに可愛くなるなんてね……というかこの際だから、言うけど普段の『俺』口調とか全然、似合っていないわよ。舐められないようにって事なんでしょうけど」

「……見た目はどうにもならないから……うう」

実際、ベルは女顔であり、髪と目の印象もあって子兔のようですらある。今は可愛がられて蕩けているせいで更に兎っぽさが出ているが……。

「でもこっちの方がきつとモテるわよ。本当に可愛いわ、あんた姉とか母親に可愛がられたでしょう?」

ローズは蕩けてきた事で甘えてきているベルへと言いながら、問いかけると……。

「俺、姉は元からいないし母さんも父さんも物心ついた時にはいなかったんですよ。育ての親になってくれた祖父が居ただけ、良かったですけど」

「……ごめん、下手な事言っちゃったわね」

つい、ベルの事情に触れてしまったローズはベルに謝った。

「いえ、大丈夫です」

「そう言ってくれると助かるわ。お詫びにこれからも可愛がつてあげるから」

「さ、流石にそれは……」

「何、私じゃ嫌だって言うの? っていうかどうせこれからもあんたの滅茶苦茶さに疲

れさせられるんだから、癒しなさいっ!!」

「うぷっ、ん、んん……」

戸惑うベルにローズは彼の頭を掴んでそのまま胸の中に誘い、抱き締めながら髪を撫で続ける。

「ほら、気持ち良いでしょう……こんな役得は貴方だけよ」

「う……は、はいっ……」

こうしてベルの身も心も蕩けさせ続けたローズはベルから可愛がる許可を取ったのであった……。

2

オラリオにおいて一般市民が多く暮らしている西のメインストリートには石造りの三階建てという他の家や店よりも一際、大きい小綺麗な宿屋を彷彿とさせる料亭がある。

その店の名は『豊穣の女主人』であり、店主である女将から店員全てが女性であり、働いている種族もヒューマンに獣人、エルフなど多種多様で女将はともかく、店員の容姿

は抜群で雰囲気は華やか。

日中は一般市民を対象としたカフェ、夕方以降は冒険者を対象とした酒場とメニューに営業形態が変わるという特徴、何より女将直々に振る舞われる料理は美味しいという事からこのオラリオで一番人気でもあった。

そんな『豊穰の女主人』へとベルは店員であるシルとの出会いをきっかけに今夜、ミアハにナアーザと一緒に向かい、入り口へと近づけば……。

「来てくれたんですね、ベルっ!!」

「うおっとっ!!」

シルが店から駆け寄り、更には如何にも恋人に対するかのような態度と口調のままにベルへと飛び込み、ベルは抱き止めた。

「あぶねえだろ、いきなり飛び込むんじゃねえよ。シルさん」

「でも、受け止めてくれたじゃないですか」

「受け止めさせたの間違いだろ」

ベルはシルから離れようとしたが、シルは抱き締めながらしかも胸もとに顔を埋めて頬ずりまでする。

「その子が今日、初めて会った子だね……でも、随分と仲良いんだ」

「ベルさん、積極的ですから」

「煽るような事、言うんじゃねえっ!! ナアーザさんも俺がそういう男じゃないって理解はしてるし、信じてくれてるだろ」

ナアーザはなにやら不穏な雰囲気を放ち、それに面白そうにしながら、シルは答え、ベルはすぐさま反論する。

「……うん、それは勿論。愛し合ってる仲だし」

「その通りだ。ほら、良いからシルさんは離れてくれ。店に来たんだからよ」

「はい、じゃあ案内しますね」

「全然、離れてねえじゃねえか」

シルは面白くなさそうな表情を浮かべつつ、離れながらベルの左手を取って、店の中へと引つ張っていく。

その最中にベルはシルを抱き止めてから物凄い殺意の籠った視線を放ってくる方向へ、理不尽な事をしてきた仕返しに右手の中指を立てておいた。

『っ!?!』

案の定、更に物凄い殺意と怒気の籠った視線が放たれたがその時にはベルは店の中であり、代わりに周囲に居た者たちがビクつく事になったが……。

『豊穡の女主人』の中に入ったベルは用意されていた主神一人と眷属二人の三席へと

座り、お勧めを聞いて鶏の香草焼きを中心とした料理のセットやベルの人生においては初めて飲む事になる酒類、果実酒をそれぞれ頼む。

「では、お持ちしますね」

「おい、見逃すと思ってるのか。手に持つてる注文書見せてみる。さつき、明らかに何か書き足しただろ!!」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「気にするわっ!!」

その際、ベルはシルとこんな他愛ないやり取りをしながらもともかく、料理は運ばれ……。

「ミア母さんから、許可は頂いたので乾杯だけ付き合わせてください」

そうして、シルも座り水の入ったコップを持って……。

「では、これからの我らの派閥がもっと良くなっていく事を願って……乾杯」

『乾杯っ!!』

そうして乾杯をし、食事をベル達は楽しみ始めた。

「ああ、中々美味しいな料理も酒も……」

「評判なだけはあるね」

「うむ、正しく絶品だな」

「ありがとうございます、良ければこれからも最良にして下さいね」

ベル達の評価にシルは喜びながら、水を飲み終えたとあつて店員としての仕事を再開し始める。

そうして、しばらくすると……。

「ミア母ちゃん、来たでー」

朱色の髪を後ろに結び、細目がちな瞳で端麗な顔立ちとスレンダー過ぎる体型の女神が入り、それに続いて結構な数の眷属の一団が続いた。

その中にはアイズ・ヴァレンシユタインも居る。

そう、この女神と眷属の一団はこのオラリオでも頂点に近い権威を有する最大派閥の【ロキ・ファミリア】である。

【ロキ・ファミリア】は予約していたために確保されていた沢山の席へと座っていく。

「ん……つてうおつ、ミアハやんかつ!! 久しぶりやなあ」

「うむ、久しいなロキよ」

ロキは周囲をふと見まわし、ミアハに気づくと驚きながら挨拶した。

「知り合いだったんですか、ミアハ様?」

「ああ、天界での私とロキの領地は近所みたいなものだったからな」

「まあ、近所というには距離はあるけどな……元氣そうで何よりや」

「そちらもな」

ベルの質問にミアハは答え、ロキも答えるとミアハへと呼びかけ、ミアハは微笑んだ。

「ベル、奇遇だね」

「ああ、奇遇だなアイズさん」

するとアイズがベルに気づき、どちらも言葉を交わす。

「アイズー、知り合いなの？」

「うん、ベルだよ。私たちが逃がしたミノタウロスを倒してくれた子は」

『!』

アイズに褐色肌で短い黒髪、スレンダーな体型を露出させる踊り子衣装のアマゾネスの女性、テイオナ・ヒリュテが訪ね、アイズは答えた。

すると短い灰の髪に荒々しい見た目と雰囲気の高身の狼人の男以外の「ロキ・ファミア」の者たちが驚愕する。

狼人の男はベート・ローガであり、アイズと共にベルがミノタウロスを倒すのを見ていたのである。

「そうか、なら……」

そうして、小金色の髪であり、パルウムのために低すぎる体格、美少年の様な容姿の男が「ロキ・ファミア」のフィン・ディムナが立ち上がり、ベルへと近づく。

ベルもそれを見て、立ち上がった。

「僕は「ロキ・ファミア」の団長、フィン・ディムナだ。僕たちの尻拭いをしてくれた事に礼を言おう、そして迷惑をかけた謝罪も」

「ご丁寧にも……でも、俺もアイズさんに手当されたので貸し借りは無しで良いですよ。どうしても気が咎めるなら俺たちの本拠、『青の薬舗』をご利用してもらえればそれで……」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

握手と言葉をベルとフィンは交わした。

「おい……ミノタウロスを倒したからって調子に乗るんじゃねえぞ」

「それは勿論……あんなのは俺にとって通過点だ」

「へっ」

ベートが投げかけてきた言葉にベルはそう返すとベートは満足げに鼻を鳴らした。

そうして、後は「ロキ・ファミリア」は「ロキ・ファミリア」でダンジョンでの長い探索を終えた後の宴を楽しみ始めた。

「じゃあ、俺たちはこれで帰るからな」

「はい、今日はお店ありがとうございます。またお願いしますね」

「シルさんが妙な事しなければな」

「酷いです、ベルさん。いつ、私が妙な事したんですか」

「それを本気で言ってるなら、大物だよ」

シルの抗議に溜息を吐いてベルは答えた。

そして、ベル達は会計も済ませて帰ろうとすると……。

「ねえ、ベル……君はどうやって強くなれたの？」

アイズは立ち上がり、ベルへと近づいて質問する。

ベルとミノタウロスとの戦いを見た彼女はベルから英雄の威風を感じ、更には『強い』と認識させられたが故だ。

そして、アイズとはある目的のために強さを欲していたから質問したのである。

「どうやって……強くなるために鍛錬して、実戦も積んできたってだけだ。このオラリオはそういう点で良いよな……俺はまだ12階層までしか竈れないが……ともか

く、ダンジョンに籠れば幾らでも強いモンスターが出てくるし、単身なら経験値も稼ぎたい放題だしよ」

「っ、うんっ!!」

ベルの言葉に、特に最後の方に大きくアイズは頷く。

「納得出来たなら、良かった」

ベルはそういうとミアハ達と共に店を去っていった。

「おい、アイズ。何を自分は間違つてなかったとばかりに嬉しそうにしている……言つとくが、ダンジョンに籠るなんて許さんからな」

翡翠色の長髪を結び、美しい容姿に尖った耳。王族の威風を有する「ロキ・ファミリア」の副団長にしてエルフの王族であるリヴェリア・リヨス・アールヴがアイズへと注意する。

「……」

「不満そうにするんじゃない。他所は他所だ」

アイズとは母と娘のような関係を築いているリヴェリアはアイズの反応に頭を抱えて言うのだった……。

四話

昨日、自派閥の本拠があるオラリオの西のメインストリートにおいて『豊穰の女主人』の店員であるシルとの出会いを切っ掛けに、主神であるミアハとそして、男女関係を築いてもいる団長のナーザと共にその店で食事をした。

その最中、ミノタウロスを倒した時に高等回復薬の提供により、手助けをしてくれたアイズ・ヴァレンシュタインが所属する【ロキ・ファミリア】と多少の交流も会ったりしたが、ともかく食事を楽しんで本拠へと帰ると……。

「ベルは目を離すと直ぐに他の子、誑し込んでやうんだね」

「別にそんなつもりは……っ」

「良いから、大人しくお仕置きされて……私が一番だつてちゃんと分かせてあげから」

「んくっ!!」

シルからのベルに対する挑発的なアプローチや表情が分かりにくいながらも何やらベルに対し好意があるアイズに何か思うところがあつたのか、ナーザはベルの部屋で

ベルに対し、性的な責めをし続ける。

「う、あ、ふ……………うう、ん」

ベルは逆らつては駄目だと感じ取つていたので受け入れ、そして身も心も快樂によつて蕩かされ続け気を失うのであつた。

そうして、翌朝……………。

「ん……………」

「ふふ、おはようベル。今日はちゃんと傍に居てくれたね。偉い偉い」

ベルは普段より、遅い時間帯にナーザーと共に起床するとナーザーは満足そうな表情で微笑み、彼の頭を撫で回す。

「ん……………昨日、たつぷりと教えられたからな……………」

ベルはそれを心地よさそうに受け入れながら、苦笑する。

「それじゃ、一緒に体を洗おつか」

そうして、一緒に浴室へと向かい……………。

「ふむ、んく……………ナ、ナーザーさ……………こ、これじゃ……………キリが……………」

「ベルが悪いんだよ、貴方と触れ合つてると幾らでもこうしたくなつちやうんだもん」

「ええつ、うあつ!?!」

ベルは浴室でもナーザから積極的に性的な交流を求められ、彼女が満足するまで快楽を与えられ続け、蕩けさせられてしまうのだった……。

そうして、しばらくすると起床したミアハと共に食事をしてその後はダンジョン探索のための準備をする。

「ベル、今日から五日後に『怪物祭』モンスターフェアっていう祭りがあるんだけど、一緒に楽しみたいからその1日前くらいには帰ってきて」

「ああ、分かったよ」

ナーザはそんなベルに声をかけ、ベルは了承する。

「それじゃあ、気をつけてな。ベルよ」

「ああ、気を付けながらもダンジョンでまた沢山稼いでくるよ。ミアハ様」

ミアハからそう声をかけられたので応じ……。

「じゃあ、楽しみに待ってるからね。ベル……んちゅ」

「ああ、待ちぼうけもがっかりもさせないよう、頑張る」

ナーザからは口づけと共に送り出されたのであった……。

冒険者としてダンジョン探索をするため、『本拠』を出てメインストリートを移動していたベル。

「おはようございますっ、ベルさんっ!!」

「うおっと!!」

すると『豊穣の女主人』の方から店員であるシルが駆け寄り、飛び込んできたので彼女が怪我しないようにベルは抱き止めるしかなかった。

「えへへ、また抱き締めてくれましたね」

自分を抱き止めたベルに対し、満足そうな笑みを浮かべ更には嬉しそうな声で言う。

「抱き締めさせたの間違いだろう……っっていうか毎回、やるつもりじゃねえだろうな？」
「もう、ベルさんったら……そんな積極的な」

シルはベルからの質問に意味深で思わせぶりな態度と身振りを交えて言う。

「積極的なのは明らかにシルさんだろ……毎日が楽しそうで羨ましいよ」

「ふふ、お褒め頂きありがとうございます」

「褒めてねえ……もう、本当色々凄いな」

ベルは自分の発言を好意的に受け取るシルに対し、『オラリオの女性』は皆、色んな面で強いのかと思いつつ、溜息を吐いた。

「シル、あまり困らせては駄目ですよ」

するとまた、『豊穣の女主人』の方から店員が近づいてくる。

薄緑色の短髪に端整な顔立ちであり、空色の瞳と尖った耳で細身なエルフの女性である。

「別に困らせてないよ、リユー」

シルは自分の同僚で親友でもあるリユー・リオンにそう答えた。

「いや、現在進行形で困ってるんだが」

「もう、ベルさんつたらいけずなんだから……」

「もう、本当勘弁してくれ。っていうかさろそろ離れてくれよ、今からダンジョンに行くところなんだ」

本当に強いなどシルに思いながら、そろそろ解放してくれと意図を込めてベルは言い……。

「ほら、この方もこう言っていますし」

「はあい」

リユーの言葉もあつて、シルは渋々といった様子で離れた。

「ふう……ありがとう、助かったよ。俺はベル・クラネルだ」

「あ……」

シルから解放されたベルは手助けをしてくれたリユーに近づき、自己紹介しながら握手をする。

「えっ!？」

それにリユーもシルも驚愕した。

何故なら、エルフとは種族的な性質として同族や心を許した者以外には肌の接触ですら忌避する潔癖性がある。

リユーも又、その例に漏れず親友であるシル以外の者に手に触れられれば、すぐに投げ飛ばす程……しかし、ベルに対してリユーは拒絶感が出ず、受け入れてしまった事で驚き、そんな事態にシルは驚いたのだ。

「ん、どうした？ 普通の握手なんだが……」

「い、いえ……私はリユー・リオンと言います。よろしくお願ひしますね、クラネルさん」

「ああ」

そうしてベルとリユールは友好的な笑みを浮かべた。

「ちよつと、良い雰囲気を出さないでくださいよ。つていうか私となんか態度に違いがありませんか、ベルさん」

そんな二人、特にベルに対してシルは不満を訴えた。

「いや、今までの自分の……ああ、もう良い……とにかく、俺はもう行くからな」

ベルはシルへと問題を言おうとしたが、無駄だと思い直すと止め、そのまま歩き去ろうと動く。

「はい、クラネルさん……どうか気を付けて」

「ちよつ……ベルさん、又店にも来てくださいね。待つてますから」

リユールとそして、シルからの声に対して手を振りながらベルは見送る二人から去っていくのだった。

そうして、ベルは西から北西のメインストリートへ向かう。ダンジョンに行く前にアドバイザーであるローズに挨拶しようと思ったからだ。

ギルド本部に向かっていると……。

「まったく、「ロキ・ファミリア」め……ほったくりなんぞしおって」

北西のメインストリートは冒険者たち用の店や施設などが多いのが特徴である事から『冒険者通り』と呼ばれている。

そして『冒険者』のための製薬兼治療施設、清潔な白一色の建物である【ディアンケヒト・ファミリア】の治療院から金銀の刺繍が施された豪華なローブを着た灰色の髪と髭を蓄えた初老の男神が不機嫌な呟きをしながら出てきた。

彼こそ【ディアンケヒト・ファミリア】の主神であるディアンケヒトであり、又、ミアハに敵対意識を抱いていて、借金関係で優位に立てた事から色々ミアハ達をいびつたりもしていた。

因みに不機嫌なのは昨日、「ロキ・ファミリア」の者によりドロップアイテムを相場よりもかなり高い額で買い取らされたからでもある。

一応、凄まじく良好な状態で獲得されたものでその品自体も良い回復薬に出来るものなどで多少なら、相場より高く買い取らされても両派閥との関係を考えて受け入れる事も出来たが……。

「まあまあ、足元を見てるのはお互い様ですし」

不機嫌な主神を宥めるのは一五〇?には届かない小柄な体で白銀の長髪、精緻な人形染みた端正な容姿の女性、「ディアンケヒト・ファミリア」の団長で随一の治療師ヒョウライでもあ

るアミッド・テアナサーレである。

「よう、ディアンケヒト様。それにアミッドさん」

ベルがそんな主神とアミッドへ挨拶すれば……。

「げえ、べ、ベル・クラネルっ!？」

ディアンケヒトはベルに対し、凄まじく嫌そうかつ怯えたようにしながら、名前を呼ぶ。

何故、彼がこんな態度になったのかと言えば、ある時、いつものようにミアハ達をいびりに行った際……。

「おい、俺の主神と団長に何、ふざけた口聞いてやがるっ!!」

ダンジョンから帰ってきたベルがディアンケヒトのいびりに激怒すると詰め寄りながら、首を絞め持ち上げる。

自派閥が借金をしている相手だと知っても『だからっていびられる筋合いはねえぞ。借金は返すが、あまり、そっちの態度が過ぎると何、するか分からないぜ?』とこれ以上、ミアハ達がいびられないように脅した。

これにより、ディアンケヒトはミアハたちをいびる事が出来なくなつたのである。

「お久しぶりです、クラネルさん。〔ランクアップ〕おめでとうございます」

「ああ、ありがとう。でも俺の目標からすればまだまだだ」

対してアミッドは普通に対応した。

常日頃からディアンケヒトのミアハ達に対する横暴には思うところがあつたのでベルに脅されたのを見たときは内心、良い気味だと思つたりした程である。

「そうですか、頑張るのは良いですが無理をしては駄目ですよ」

「お言葉、ありがとう」

アミッドの言葉にベルは応じると……。

「ディアンケヒト様、俺が居ないからってミアハ様たちを又……」

「分かつとる、分かつとる。借金も返してくれているし、もうなにもせんわいつ。ちくしょおおっ!!」

「では、これで」

「ああ、じゃあな」

ディアンケヒトはベルから早く去ろうとベルの言葉に答えながら走り出し、アミッドはそれを追う前にベルに一礼して、追つていったのだった。

そうして、ギルド本部へとベルは向かい……。

「それじゃあ、俺は四日間ほど、ダンジョンに籠るからな」

「はいはい、ちゃんと帰ってくるのよ」

「ん……」

「ふふ、可愛い」

アドバイザーであるローズにベルは声掛けすると、ローズはベルの頭や顔を撫で回し、弄り回して心地良くさせながらそんなベルの反応にローズも満足げな微笑みを浮かべたのだった……。

五話

実のところ、『迷宮都市』オラリオが抱える数多の冒険者の中でベル・クラネルは注目されているし、有名でもある。

半月でL.V. 2に「ランクアップ」した事で更に彼は話題になっているがその前からダンジョンの中に籠り、自分が探索を始めた階層の正規ルート以外のルートにまで出てくるモンスターと戦い、討伐し続けているしその最中に危機に陥っている冒険者を助けたりもしている（その時は無論、自分の「ファミリア」の宣伝はしているが）。

なので正規ルートの間引きをする行為のそれに因んで『掃除屋兎』、『殺戮兎』、『血濡れ兎』、『剣豪兎』等の異名で呼ばれ、恐れられたり感謝されたり冒険者からの反応は様々だ。

ベルは人からの評価など気にしない方だが、それでも一つ思うところがある。

「(なんで兎にこだわるんだっ!!)」

自分に異名が付けられるときは絶対に兎は外せないルールみたいなものが出来上

がってしまった事には文句を言いたいのである。

ともかく、今回も四日間の間、ダンジョンの中層域を探索範囲として籠ろうと地下にダンジョンの唯一の入り口である『大穴』がある巨塔であり、摩天楼施設のバベルが見える中央広場に向かう。

「(今日はあの視線が無いな……)」

頂上からの自分に対して全てを見透かそうとするような無遠慮な銀の視線が無い事を気にしながらもバベルへ入ろうとしていると……。

「あの一、すみませーん!!」

バベル近くの場所から薄紅色の長い髪を二つに結わえており、可憐で整った容姿だが何故か目は死んでいる女性が声をかけてきた。

衣装は赤のエプロンドレスと戦闘衣の構造に似た白衣を着ている看護師を連想させる彼女は長杖やらバックバックに腰帯にも大量の回復薬系アイテムを装備している。

「……………うせ」

ベルは絶対、面倒な事が起きると確信したので軽く挨拶してそのまま、逃亡しようと

考えたが……。

「とりあえず、話をしましょう。じゃないと後悔する事になりますよ」

「……分かった」

呑気な様子で脅し染みた事を行ってくる女性の言葉にベルは応じた。そして、少し離れた所へ行くと……。

「それじゃあ、話を聞こうか……その前に俺は「ミアハ・ファミリア」のベル・クラネルだ」

「これはどうも……私は「フレイヤ・ファミリア」の治療師をしているヘイズ・ベルベツトと言います。実は私たちの主神であるフレイヤ様より貴方のダンジョン探索に付き合う様、神命を仰せつかりました」

要はパーティを組みたいとベルはヘイズから言われた。

「……因みに拒否権は？」

なんとなく、察しながらも質問してみる。

「別に自由ですけど、その場合でも勝手に付いていくのでもし、私が死んじゃったらやっぱり、貴方にとってまずいことになりますねー」

「……まあ、治療師が同行してくれるのはありがたいがヘイズさんはそれで良いのか？」

後、俺は四日間はダンジョンに籠るぞ。魔石とかドロップアイテムの都合上、バベルとダンジョンを往復くらいはするが……」

オラリオの女性と女神はどこまでも強く、したたかなのだと認識を改めながらベルは彼女自身の意見を聞いてみる。

「全然っ!!」 むしろ、四日間もだなんてこっちこそありがたいですつ。実はですねー
……」

ヘイズは凄く嬉しそうに答えながら、自分の派閥事情をまくしたて始めた。

やれ、彼女たちの本拠では戦闘員たる眷属らが自派閥内による殺し合い混じりの鍛錬に励み続けており、毎日毎日蘇生三步手前の治療をさせられ続けているとか、それだけでなく鍛錬が終わった後の料理の用意やら身の世話をしなければならぬので本当に毎日、毎日しんどいとの事だ。

そのため、ベルのダンジョン探索に同行するのはフレイヤから与えられた休暇のようなものだと言われは認識している。

それに……。

「兎が強く見られようと振る舞っているようなベルは見てて、可愛らしいですし」

「ほっといてくれ……まあ、そういう事ならよろしく頼むよ。なるべくヘイズさんの手を借りないようにも心掛ける。存分に休暇を楽しんでくれ」

「……なんて良い子なんですか、ベル」

「うお、あ……」

ヘイズはベルの言葉に感激すらしながら喜び、頭を撫でてベルの甘えたがりなスイツチを入れる。

「おおっ……そういう事なら……」

「ちよ、い、良いから早く……い、行くぞ」

ヘイズは心地良さそうなベルに対し、更に可愛がろうと撫で回し始め、ベルは蕩けかけながらもなんとか、二人でダンジョン探索へと向かったのであった……。

人生、何が起るか分からないとはいうが何故か、「フレイヤ・ファミリア」の優秀な治療師だというヘイズとパーティを組んでダンジョン探索を始めた。

「ふっ!!」

ベルは『上層域』のモンスターを相手にダンジョン内をまるで自然を我が庭の如く、駆け回っては跳ね回る兎のように……生まれつきの速足を活かした速力と身軽さによる機動性で縦横無尽に動きつつ、自分の得物である長剣を銀閃へと変え、躍らせると同時にモンスターを漸滅していった。

「(うーん、兎ですねぇ)」

戦い振りから兎を連想しながらも……。

「(聞いてた以上に強いですねえ、勇姿の資格は十分です)」

「フレイヤ・ファミリア」の本拠である『戦いの野』フォールクヴァングにて治療の傍ら、眷属たちの殺し合い染みだそれを見ているが故に培った観察眼にてベルの素質をヘイズは見抜いた。

ベルが自派閥内に入る素質があるのかどうか観察し、報告するのも彼女が敬愛する女神が要求している事だと思っているからだ。

そしてベルであるが見ているだけでも絶対に従来のL.V. 2の冒険者より『敏捷』が飛び抜けている事は明らかだ。

自派閥内、更にはオラリオ内でも『最速』の名を欲しいままにしているとある幹部からはこのまま、成長した際には絶対に敵視されるだろうなともヘイズは思う。

後は全く疲れを見せない事からそういう持久力系の「スキル」があるのだろうと予測し、これも又、自派閥に入る資格があると判断する材料となった。

しかし彼が最も優れているのは『技と駆け引き』である。

とはいえ、別に何か特殊な術理などを用いている訳でも無い。

全て基礎通りだが、無駄無く、隙無く、正確無比であるが故に異端染みた流麗さと鋭さを発揮している。

もはや、基礎の技術が絶技染みているのだ。

そうして基礎を追求しているからこそ応用が……というような臨機応変な戦闘技術とそれに伴う駆け引きをベルは体現していた。

『教科書通り』と言う言葉があるが、本当にやってみてしまおうとかえって誰も真似は出来ない。

ベルの『技と駆け引き』はヘイズから見て自派閥内の団長や幹部にすら匹敵さえしているのだと思ってしまうほどに凄まじい。

更に……。

「(こ)う(い)うのをぎやっぶ? って言うのでしょ(う)ねー」

普段、可愛らしいベルが見せる勇姿にヘイズは見惚れてもいた。

「(やっぱり、良いなこれ)」

探索する階層、全てのルートで対峙するモンスターを倒しながら2日前にバベルの武器店で購入した唯々、機能性を有した無骨な長剣と純粋な白い金属光沢なライトアーマーの具合に気を良くする。

バベルの武器店にて埃を被りそうな場所にあったが一目見て、何故だか目も心も惹かれた長剣とライトアーマーの制作者は鍛冶系最大派閥の「ヘファイストス・ファミリア」所属のヴェルフ・クロツゾという事は分かっているのいずれ、工房でも訪ねて契約鍛冶師にでもなってもらおうとも考えた。

「(命名の素質はどうかとも思うが……)」

内心で言うようにライトアーマーの名前は『兎鎧』ビョンキチだったり、命名のセンスに問題あるから、売れなかったのではと思う。

ともかく、ベルは慣れている事やLV.2になったのもあって以前よりも凄まじい速さでゴブリンにコボルト、フロッグ・シューターやダンジョン・リザードやウオーシャドウ等のモンスターを倒しながら階層を進んでいき……。

「い、いやああああっ!!」

7階層へと到達すると蟻のモンスターである『キラアアント』の群れに蹂躪される間際のパルウムの女性が居た。彼女の傍では何人かの冒険者が既に蹂躪されていたりもする。

「っ【轟^{ビート}け】」

ベルはすぐさま、魔法を発動し雷霆を燃料に自分の性能を格段に上昇させると超速で駆け跳ね、少しの剣閃連舞を披露する事でキラアアントを斬滅した。

「一人だけでも間に合って、良かった」

「……あ、ありがとうございます」

尻もちをついている栗色の短髪をフードで隠した超小柄な体格でパルウムだと分かる女性が手を差し出してきたベルに少し、戸惑っていたが礼を言つて握手をする。

「(本物ですね、ベル)」

ヘイズはパルウムの女性を迷わず助けたベルの姿に確かに『英雄』を見、より一層見惚れたのであった……。

六話

ダンジョンの『中層域』を範囲に四日間籠ろうとしたベルは『主神から手伝う様に命じられた』とオラリオの最大派閥の一つである「フレイヤ・ファミリア」の治療師、ヘイズ・ベルベツトとパーティを組んでダンジョンへと入った。

そして階層を進みながら、階層内の全てのモンスターを倒しながら次の階層へと向かうのを続けていると7階層に入ったところで『キラアアント』という傷つけた際に仲間を呼び寄せる匂いを発するモンスターの群れに囲まれ、蹂躪されようとしていたパルウムの女性を救出した。

残念ながら彼女とパーティを組んでいた冒険者は全滅していたが……。

「危ないところを助けていただき、ありがとうございます。ベル様、ヘイズ様」

ベルは一旦、モンスターが出現していない場所までヘイズにパルウムの女性を連れて移動すると壁や地形を剣撃によって幾多も切り刻んで話が出来るようにする。

そして、ベルによって助けられ、傷ついていた（モンスターによるものではなく冒険者たちによる暴行の跡）をヘイズに治癒された「ソーマ・ファミリア」のサポーターで

あるリリルカ・アーデはベルとヘイズに感謝を述べた。

「いや、困ったときはお互い様だ」

「ベルに同じくー」

ベルもヘイズも軽くリリルカに応じた。因みにベルはリリルカ以外の男たちが「ソーマ・ファミリア」の団員だと知ると、『なんだよ、あいつらのとこか』と呟いた。

というのもダンジョンに籠っていた時、単独であったが故かベルが倒したモンスター
の魔石や『ドロップアイテム』を奪い取ろうと「ソーマ・ファミリア」の連中に襲撃さ
れたのだ。

言わば追剥ぎであるが、ベルは命を狙われたとあつて容赦なく返り討ちにして殺し、
持っていた金品や回復薬を奪い取った。

それを言うへとヘイズは『顔に似合わず、恐ろしいことしますねー』と呑気に言い、リ
リルカは当然、気まずい表情を浮かべる。

そんな彼女へそれはそれ、これはこれと言って男たちが持っていた金品やアイテムは
全て、リリルカへと渡した。

「それでリリはこれからどうしたい？ このまま帰るといふなら付き合うし、稼ぎたい
というなら俺たちのサポーターとして同行させても良いが」

「……大変、ご迷惑をお掛けしますが精一杯、働きますのでどうかご同行させてくださ

い。その方が都合が良いので……」

「分かった、それじゃあ……」

そして、話をしていき結果としてリリルカもサポーターとして4日間、ベルとダンジョンに籠る事が決まった。

「う……お、おい……な、何を……」

ベルはリリルカとの話し合いが決まると近づき、頭や首元など好きなように撫で回し、弄ってくるヘイズのそれに心地良くさせられながら、意図を問いかける。

「何って、労っているんですよー。ベルは本当に良い子ですからね。それに戦っている時のベルは英雄みたいで格好良かったですし、私、すっかり惚れちゃいました」

「そ、それは良いが……うあつ、り、リリまでえ……」

「ベル様、可愛い……こういうのが良いなら、幾らでもしてあげますね」

「うああ……」

ヘイズのベルに対する可愛がりや甘やかしを見て、リリルカもそれに加わり、二人の女性は『可愛い』と言いながら、ベルをたつぷりと蕩かせたのであった。

ともかく、そうして階層を更に進んでいると……。

「おい、待ってくれ。その兎みたいな奴」

「呼び止めるにしてももつと、他にこうなんかあるだろうっ!？」

一人の男の呼びかけに不満の声を上げながら、ベルは答える。

「す、すまん。あまりに兎そのものだったから」

ベルに声をかけた短い赤髪でそれなりに顔の良い男で得物は大刀である男は謝るも……。

「追い打ちかけんじやあねえよ。俺はベル・クラネル……要件は？」

「おお、俺はヴェルフ・クロツゾ……お前のその長剣と鎧を打った奴だ」

「そうかつ、まさかこうも早く会えるなんてな」

ベルはバベルの武器店で買い、現在使用している長剣とライトアーマーの製造者である「ヘファイストス・ファミリア」の見習い鍛冶師、ヴェルフ・クロツゾに出会えた事を喜んだ。

「俺もようやく、俺の作品を買ってくれて使ってくれる奴に会えて嬉しいぜ」

ヴェルフもまた、自分の作品を使っているベルと出会えたことを喜ぶ。そうして、とんとん拍子に話は進み、ヴェルフはベルの専属鍛冶師になる事を約束し、ベルはこれから都合が付けばヴェルフを自分のダンジョン探索のパーティに加える事やドロップアイテムの提供などを約束し、更に今の四日間のダンジョン探索のパーティに加えるのだった……。

二

ダンジョンの『中層域』の始点である13階層から17階層までは岩窟が続く、階層域であり、口から火炎を吐き出す黒犬が『ヘルハウンド』、群れによる戦闘を得意とする『アルミラージ』、鋭い爪に牙と硬い皮膚であり、毛皮を有する『ライガーファング』、更には『ミノタウロス』など『上層域』とは比べるべくもない厄介であり、強いモンスターが続々と産出される。

階層域は段階を一つ越えるだけで遥かに難易度が増すのである。

そんな中層域、『岩窟の迷宮』にてとある中堅派閥の眷属が10名ほどのパーティが探索していたのだが……。

『グウオオオオッ!!』

そんな彼らであり、彼女たちをモンスターの群れが迎え撃つ。

「うぐああっ!!」

「ルアンっ!? くっ、数が多すぎる……うっくっ!」

パルウムの男、ルアン・エスペルが負傷しながら吹っ飛ばされ、今まで何とか対抗していた短髪で強気な印象を受けるダフネ・ラウロスも又、痛手を受けた。

他の者たちもあまりに多いモンスターの群れとの激闘により、消耗し負傷しており、全滅間近。

ルアンやダフネ達は眷属の人数としては百十名にはなるだろう数で構成された「アポロン・ファミア」の団員たちだ。

今回、「経験値」稼ぎを目的に少人数でダンジョン探索を始めたのだが、ダンジョンでは常に異常事態や不測の事態は起こり得る。

実際、こうして探索に慣れている筈の中層でありえない程の群れに囲まれ、襲われている。

「あ、ああ……（予言を変えられなかった）」

そんな中で黒の長髪で気弱な印象を受ける女性で自身も消耗し、傷も負っている治療師のカサンドラ・イリオンは絶望する。

彼女は予知夢であり、予言を受ける能力を持っているのだがそれはどうやろうとも人に教えても信じてもらえなかった。今回もモンスターの群れに蹂躪されるといような予知夢を見たが、今までのように教えても聞き入れてもらえなかったのである。

何とかしようと頑張つても結局、どうにもならない現状にカサンドラは絶望しながらも……。

「……助けて」

それでも彼女はなんとか、一縷の望みを賭けてこの絶望的な状況を救ってくれる者を求めた。

すると……。

「ああ、任せろ」

「っ!?!」

彼女の傍を駆け跳ねながら、声をかけて通り過ぎるは雷霆を纏った白影。

『グギヤアアアアッ?!』

そのまま、モンスターの群れへと駆け跳ねながら突撃すると壮烈でありながら苛烈、

しかしてあまりにも流麗な劍舞を披露しながらヘルハウンドやアルミラージ、ライガー
フアングにミノタウロス等、全てのモンスターを切り伏せ続け、そうして全滅させた。

「……………う、あ、え、英雄だ……………」

「す、凄……………」

ルアンやダフネらはベルの勇姿に衝撃を受けながらも見惚れ……………。

「……………英雄様」

自分の予知夢や予言など知った事かと打ち砕き、自分の声に答え救ってくれたベルへ
とカサンドラは感謝よりも更に大きい感情を抱きながら、眩くのであった……………。

七話

ダンジョンの『中層域』である『岩窟の迷宮』で本来ならありえない規模のモンスター群れに襲われるという『異常事態イレギュラーにより、全滅しそうになっていた「アポロン・ファミリア」を救出したベルは大量の魔石や『ドロップアイテム』をリリルカにヴェルフと共に回収し、優秀な治療師であるヘイズにはダフネ達の治療を頼み、後は壁や地形を傷つける事で休憩場所を作り上げた。

「まさか、あの……ふ、【フレイヤ・ファミリア】に借りを作る事になるなんて……」
 治療を受けながらもダフネ達はヘイズの所属する【ファミリア】はオラリオでも頂点に近い権力を有する派閥とあって、委縮しながら呟く。

最大派閥への借りは小さなものでも誠実な対応をしなければ、後が怖いのである。

「それなら、ご安心ください。私の働きに関しては何でも無いですように呑気に言い、ダフネ達は安堵でー」

『良かったー』

委縮しているダフネ達へヘイズは何でも無い事のように呑気に言い、ダフネ達は安堵

の息を漏らした。

「俺にとつては良くないけどな……後が本当に怖ええよ」

「ふっふっふ……あの方への貸しはそう簡単に返せるものじゃないですからね。ベル」

「押し売りしてきたのは、向こうだけだな」

愚痴に返して来たヘイズへベルは溜息を吐きながら、言った。

「あの……本当に助けていただき、ありがとうございました。英雄様」

そんなベルへと近づき、深々と頭を下げながらカサンドラは感謝を告げる。

「どういたしました。だが、そういう呼び方は小恥ずかしくなるからやめてくれ。俺の名前はベル・クラネルだ……それと俺への借りについては俺の本拠である『青の薬舗』の得意客になってくれればそれで良い」

「分かりました。是非とも、常連にならせていただきます。ベルさん」

「ウチらもそうさせてもらおうよ」

「ああ、本当に死ぬところを助けてもらったしな」

ベルの言葉にカサンドラを始めにダフネにルアン達、「アポロン・ファミリア」は頷いた。

その後は「アポロン・ファミリア」は数日間を予定とした【経験値】稼ぎのための探索を始めた矢先に異常事態に遭遇し、全滅しかけた事もあるのでベル達に『良ければ、一

緒に行動してほしい』と頼み、リリルカやヘイズ、ヴェルフはベルの判断に任せると言ったのでベルはダフネ達の提案に頷き、そうして更にベルの一派の人数は増える事になった。

とにもかくにも回収した魔石とドロップアイテムの換金と人数が増えた事で食料や水など必需品が必要となったので一旦、バベルへと戻り換金と買い出しをするため、足の速いベルと「スキル」の関係で大荷物を背負った状態でも機敏に動けるリリルカが係を務めた。

そうして、休憩地とした場所へと戻ると……。

「び」

苦労様でした、ベル」

「お疲れ様です、ベル様」

「重ね重ね、ありがとうね」

「う、く……あ、あう……」

ベルが戻ってくるまでの間にヘイズはダフネにカサンドラ、女性陣へとベルが甘やかされたり、可愛がられたりするのに弱い事やどこを触るのが反応が良いかなどを言っており、そうしてベルは身も心も蕩かされ始めた。

「ベル様は本当に優しい方ですね」

「ふ、あ、も、もう良い……」

リリルカも加わり、ベルは撫で回され、揉み回され、弄り尽くされていき、問答無用で更に、更にと蕩かされていく。

「まあまあ、そう言わず。休憩は大事ですから」

「癒すのは治療師の本分ですから、私、頑張ります」

「うん、聞いた通り、こうしてみると兎みたいに可愛いね」

「ほら、もっと甘やかして可愛がってあげますから……存分に堪能してください」

「う、うわああ……」

『（可愛い……）』

蕩けながらも無意識に求めてくるベルへとヘイズたちは満足しながら応え、更に彼を甘やかすと可愛がりで満たしていくのだった……。

2

ダンジョンの中層域には『安全階層《セーフティポイント》』と呼ばれる絶対にモンス

ターが産出される事の無い階層が存在する。

それが18階層だ。

そこを休憩地点、宿営拠点とするのが実力ある冒険者たちのやり方でダンジョン探索の定石。

それを見越して中継拠点であり、宿場街でもある『リヴィラの街』もこの18階層に用意されているが、取引においては商人側が得するようになっていて、利用者は足元見られた形になる。

つまり、売るときは外界の相場より更に安い、買う時はかなり高いのだ。

勿論、宿を利用するのも高い。

故に『リヴィラの街』の利用は考えず、ベル達は18階層での野営をする事とした。実力なければ他派閥の冒険者に襲われたりする事もあるが、名が通った派閥の冒険者ならば、牽制が出来るのでそうした者たちに襲われることは無い。

【アポロン・ファミリア】の名はそれに値するので野営地に持ってきていた自分たちのエンブレムが刻まれた表章旗をダフネ達は掲げたのである。

そうして、休息に入ったベル達だが、ベルは少し眠った後に起きると……。

「さて、行くか」

17階層へと自分の鍛錬を目的として引き返す。すると……。

『グオオオオオオッ!!』

そんなベルをまるで出迎えるかのように一定の周期で産出されるモンスターの中には王族であり、上位種である『階層主』、『迷宮の孤王』モンスターレックスと呼ばれる総身七?はあろうかというほどの灰色の巨人である『ゴライアス』とその配下であるかのように『岩窟の迷宮』で産出されるモンスターの群れが立ちはだかった。

「ああ、望むところだ……この程度、乗り越えなければ英雄になんてなれねえからなあっ!!」

ベルは不敵に笑うと「ケラウノス・エナジー」を全力で発動。そうして縦横無尽に駆け跳ねる雷霆となりながら、全身全霊の武威を込めた長剣にて魔性の領域を更に超えた異端の流麗さを感じさせる武技による剣閃の乱舞を披露する。

「オオオッ!!」

「ぐ……はっ……」

とはいえ、ゴライアスの実力はLV. 4の冒険者に匹敵するほどであり、他のモンスター達の数も多い。よって、押されるのはベルの方であり、実際、かなり早い段階でゴライアスたちの暴威によって重傷を負わされ、窮地へと追いやられた。

しかし……。

「まだだ、こんな程度で俺を殺せると思うなよおっ!!」

ベルは意志を燃やして重傷であり、立ち上がるのもやつとな自分の体に入れると立ち上がり、吠える。

彼の憧れる英雄は絶体絶命の窮地であつても立ち上がり、そうして覆してきた。

それは精霊の助けがあつたとか仲間の力を借りたのもあつたが、何よりも、そう、超越存在である神すら見惚れさせた無限の可能性を發揮したのは『意思力』によるもの。

俗に勇氣に気合に根性、人類にだけに許されたその『力』をベルは發揮し始め、その『力』に彼の背中に刻まれた『神の恩恵』に呼応していく。

古代の英雄がやってきた意思による限界突破に対し、可能性を切り開くのを助ける促進剤である『神の恩恵』も又、その役割を果たそうと稼働しているのだ。

「いぐぞおおおおおっ!!」

そうして、ベルは限界を超えながらゴライアスたちへと駆け跳ね……。

「ただいま」

『いや、なにがあつたああああ?!?』

18階層にて勝ち取つた巨大なゴライアスの魔石を始めに激闘の戦果を持ってきた事やかなりぼろぼろなベルに対し、一党の者たちは驚愕の叫びを上げるのであつた……。

八話

その場所は外界とは違う世界——なぜ、外界とは違うのかとまづ、天井があり、無数の水晶が隙間なく生え渡っていると明らかに外界の物とは違っているからだ。

そう、此処は地下世界のダンジョンだ。

階層はモンスターが産出される事の無い『安全階層』。

この階層の天井の中心には太陽のように輝く幾つもの白水晶の塊、その周囲には優しく発光する青水晶の群れがあつて疑似的な『空』が構成されている。

実際、時間の経過によつて水晶の光量が変化するし、『朝』、『昼』、『夜』の時間帯も作り上げるのだ。

そして、他にもこの18階層はオラリオの半分が収まりそうなほど圧倒的に広大な広さであり、水晶の群れが草原の如くとなつていて中央地帯にいたつては晴れ渡る地下の蒼穹の如くだ。草原の中心には次なる階層へ向かうための樹洞がある巨大樹であり、中央樹がある。

北には広大な湿地帯、南から東にかけて広がるのは緑の森林、西には紺碧色の湖畔と

そこに浮かぶ大島と幻想的な風景に圧倒的な大自然が合わさった風光明媚な景色が、『迷宮の樂園』と冒険者たちが呼ぶに相応しいものがあつた。

実際、とある富豪は冒険者に護衛を依頼してまでこの景色を観光しに来たという話があるほどに評判でもある。

そんな18階層の片隅で……。

「こういうやり方は絶対に私を過労させてくるあの人たちにはしません、ベルは特別です」

「私もヘイズさんのやり方を真似ながら、精いっぱいベル様を癒します」

ひよんなことから「ミアハ・ファミリア」のベル・クラネルに「フレイヤ・ファミリア」のヘイズ・ベルベツトに「ソーマ・ファミリア」のリリルカ・アード、「ヘファイストス・ファミリア」のヴェルフ・クロツゾ、「アポロン・ファミリア」のカサンドラ・イリオンにダフネ・ラウロスやルアン・エスペルなど他派閥らの連合が組まれ、そのリーダーとなつているベルは昨日、『階層主』でLV. 4に匹敵する程の強大なモンスターである『ゴライアス』とその壁役であるモンスターの群れを相手に激闘を繰り広げた。

ライトアーマーや長剣が全損したり、戦闘衣と体も十分に致命傷レベルとボロボロになりながら勝利はしたが当然、他の者たちは無茶や無謀を通り越したベルにもはや、何

も言えないくらいに衝撃を受けた。

ともかく、まずはベルが回収したゴライアスたちの魔石にドロップアイテムをバベルの預り所に預けたりなどの処理やベルの全損した長剣とライトアーマー、戦闘衣の用意などのため、ベルにヘイズとカサンドラ、ダフネにリルルカを残して他の者たちは一度、バベルへの帰還を始めた。

そうして、彼らが帰ってくるまでの間にヘイズは宿泊地の中にてベルへ治療を始め、そのまま勝手に一人で無茶したお仕置きとして、強い圧でされるがままの状態になる事を約束させた彼女はベルをうつ伏せに寝かせてカサンドラと共に按摩によるマッサージを始める。

「う……………ふ……………き、気持ち良いぞ」

「ふふ、それは良かったです。何なら、寝てもらって構いませんよ」

「皆が帰ってくる間だけでもお休みになってください」

「あ、ああ……………そうだな、やることも無いし……………」

按摩によって心地良くされているのもあって、ベルは眠りにつく。

……………。

「まったく、こんなに可愛いのに階層主に一人で挑むなんていう、とんでもない無茶をするなんて……本当、びつくりしちゃいますよ」

「そうですね……流石に私もどうかかって思っちゃいました」

「やる事、成す事とんでもなさすぎて理解が追い付かないよ。見た目は可愛らしいのにね」

「ええ、可愛いです」

ヘイズは眠り始めたベルに対し、膝枕をすると頭を撫で直し、顔も弄る等自分の思う様にベルを可愛がり始め……それに続いてカサンドラにダフネ、リリルカもそれぞれ、ベルに対しまるで可愛らしい小動物にするかのようなやり方でベルを可愛がり始める。

「ん……ふ……」

眠っているベルはヘイズたちの可愛がり屋与えられている温もりに心地良さそうに、満足そうな反応をする。

『（可愛い）』

そんなベルの反応に胸を疼かせるヘイズたち。

「ベル、お姉ちゃんたちがしばらく可愛がって、甘やかしてあげますからね」

「……うん、お姉ちゃん」

『っ!』

耳元でヘイズが眠っているベルに甘く優しく囁くと、ベルは眠っているためか普段、舐められないために無理している態度ではなく、素の態度で反応を示す。

その反応にヘイズたちは衝撃を受けると……。

「ベル、本当に良い子で可愛らしいですね。お姉ちゃん、嬉しいです」

「ベル様、お姉ちゃんがたっぷり可愛がりますから」

「ウチもお姉ちゃんとして、可愛がってあげるからね」

「お姉ちゃんたちがもつと、気持ち良くさせてあげます」

事実としてベルより年上（リリルカも15才）な女性陣はベルに対して姉の如く、接して甘やかし可愛がりまくるのであった。

そうして……。

「ふ……んん……」

「起きましたか、ベル」

「ああ、お姉ちゃん……っで違っ」

ベルは寝ている間に刷り込まれた言葉を発してしまい、混乱しながら訂正しようとするが……。

「もう、お姉ちゃんだなんて……」

『可愛い』

「ちよ、止め……」

そのまま、更にベルはヘイズたちにより、抱き締められるなど可愛がりや甘やかしを受けて身も心も蕩かされていく。

「おお、ものの見事な飼い兔だな」

「オイラも一時期、ああいうような事、されてたよ」

ベル達の元へと返ってきたヴェルフやルアンたちはベルが可愛がられている様子を見てヴェルフは感心、ルアンは懐かしい光景だとばかりにしみじみとする。

ともかく、そうして……ベルは新しい戦闘衣やバベルの武器店でやはり、売れ残りとなっていたヴェルフ製でベルが壊していたものとは別の長剣とライトアーマーを装備する。

「よ、ふ……」

19階層への探索を始める前にウォーミングアップと新調したライトアーマーや長剣を馴染ませるための鍛錬をしていると……。

「はあっ!!」

「おっとっ!!」

突如、襲撃されたがその振り下ろされた大朴刀の一撃を長剣にて弾き逸らす。

「やるねえっ」

大朴刀の持ち主で黒の長髪に色気たっぷりの成熟した体ながら引き締まった肉体、褐色肌で踊り子衣装のために露出的な女性はベルに一撃を弾き逸らされるとまるで獣が標的を良い獲物であると実感できたのを喜ぶような笑みを浮かべ、一度、離れる。

「それはどうも……俺はベル・クラネルだ。何故、襲撃を？」

「私はアイシャ・ベルカ。良い男を見つけたら、その時に手を付けるのがアマゾネス流でね……それは戦いでも闘いでも……」

アイシャ・ベルカは簡潔にベルの問いへと答える。

「……そうか、どうやら退いてはくれないようだし付き合おう。せめて楽しませてくれよ」

内心、オラリオの女性陣は本当に押しが強いという事や自分は女難の相でも抱えているのだと思い、溜息を吐きながらアイシャが退かないのを見て取ったので彼女に付き合うことを決めた。

そうして、剣を構える。

「はは、こっちの台詞だよ」

アイシャは応えてもらった事で喜びながら剣を構えた。

そんな二人の様子を遠くで見ている者たち、ヘイズたちは……。

「ああ、慣れ親しんだ光景ですねえ……」

「が、頑張ってください。ベル様」

「あれって【イシユタル・ファミリア】の戦闘娼婦、【麗傑】アンティアーネイラじゃん。本当に手が早いわね」

「リリ達じゃ止めようもありませんし、ベル様を応援するしかないですね」

「だね」

「なんかもう、面白いつ!!」

「流石は英雄だな」

ヘイズはしみじみとし、カサンドラは応援、ダフネはアイシャの見た目や振る舞いから冒険者の中で有名な彼女の話そのもので本人だと確信すると眩く。

リルルカは事実だけを告げて、ダフネと応援を始めてヴェルフはベルが起こす事態を面白がり始め、ルアンは只々、頷く。

「いくぞっ」

「いくよっ」

そうしてベルとアイシャは手合わせを始めたのであった……。

九話

モンスターが絶對的に産出されない階層であり、比較的安全（上や下の階層からモンスターが侵入してきたり、異常事態が起こりうる可能性はあるため）なために冒険者にとつての休息地ともなる『安全階層』の18階層。

その南から東にかけて広がる緑の森林地帯を縦横無尽に動き回るのは二人の男女。

「ふっ!!」

「しっ!!」

男はベル・クラネルであり、得物である長剣を使つての剣舞を繰り出し、対する女はアイシャ・ベルカは得物の大朴刀による刀舞を繰り出す事で互いに剣閃の応酬を繰り広げた。

戦況は拮抗であり、そうして、渡り合っている二人の剣閃の余波で森林は荒れに荒れていく。

「（強いな、L.V. は元より能力も経験も俺より上か……）」

ベルはアイシャの実力を手合わせしている中で自分よりも格上だと感じ取りながらも……。

「(だが、勝つ!!)」

『ゴライアス』と部下のように立ちはだかつてきたモンスターの群れとの死闘のように己が誓いを果たすため、『勝利』を勝ち取るために『意思』の力を燃焼させ、それを原動力へと変えていく。

「うっ、やるねえっ!!」

アイシャもベルのLV・や能力、経験が自分より下である事は手合わせにして感じ取ったが、しかし、彼は『別格』だった。

『魔法』や『スキル』という『神の恩恵』由来の特別な物ではなく、単純にして異端な領域にある『技と駆け引き』。

それが限界など知らぬとばかりに次々に研ぎ澄まされ流麗となり、魔性を超えた輝きを更に濃くしていく。

ベルの剣舞に比べれば、自分の刀舞など粗野な泥踊りだろう……しかし、最も凄まじいのはもはや、内部から体外へ放出され世界を燃やしかねない程に昂ぶり続ける『勝利を勝ち取るため』に燃やし続ける意思力。

それだけでまるで古代の英雄のように、留まることなく限界突破を……おのが器の昇華を果たしていく。

「春姫、本物が此処に居たよ。そして良いものだね、英雄ってのは……」

アイシャは本拠内にて面倒を見ていて、英雄譚好きな妹分へと内心で呼びかけながら、そして『英雄』に対し、恋心を持ちながら……。

「来れ、蛮勇の覇者」!!」

ベルと閃撃乱舞を交えながら、己が全力をぶつけるべく、自らが持つ魔法のための詠唱を開始した。

「雄々しき戦士よ、たくましき豪傑よ、欲深き非道の英傑よ」!!」

通常、魔法を使うための呪文の詠唱は発動の失敗や魔力の暴発を防ぐためにその場に停止したり、意識を集中するために他の行動を緩慢にせねばならない。

しかし、アイシャは優れた女戦士だ。熟練者の魔導士のように『平行詠唱』を可能としているし、恋に情熱的な女が如く、ベルに対し絶対に離れないし、逃さないとばかりに剣撃を激しくしていく。

「女帝の帝帯が欲しくば証明せよ」!!」

ベルと剣戟を交えながら、詠唱に己が愛を込めていく。

「我が身を満たし我が身を貫き、我が身を殺し証明せよ!!」
「良いだろう、やってやる」

ベルはアイシャからの愛にそう応えた。彼女の愛に応えると確かにそう、言ったのだ。

アイシャはそれに満足げに微笑みながら……。

「飢える我が刃はヒツポリユテー!!」

アイシャは魔法発動のための詠唱を完成させた。

「轟け!!」

ベルも自分の限界を超え続けながら、全力以上の全力を込めて超短文詠唱をし……。

「ヘル・カイオス!!」

「ケラウノス・エナジー!!」

至近距離にて紅色に染まったアイシャによる斬撃の衝撃波と雷霆を燃料にした事で絶大なる威力になった斬撃が衝突した。

凄まじい爆光と衝撃波……そして……。

「俺の勝ちだ」

「ああ、そして私はあんたのものだよ。ベル・クラネル」

ベルは倒れ伏したアイシヤを抱き起しながら言うと、アイシヤはベルに起こされながら、口づけした。

「ん…………ふ…………うむ」

舌を交えながら、愛する相手を食うかのようなアイシヤの深い口づけ……。

「む…………う…………」

「何だ、こつちの方は不慣れかい？ ふふ、ならたつぷりと教えてやるよ」

蕩けるベルにアイシヤは笑みを浮かべる。そうして……。

「とまあ、こうすればもつと相手を気持ち良くできるよ」

「おお、流石はこの道の達人ですね。参考になります」

「はい、とつても」

「勉強になりますね」

「ふふ、これでもつともつと蕩けさせれるね」

ヘイズたちの元へと戻るとベルはアイシヤによる講義と実践のままにヘイズやカサ

ンドラ、リリルカにダフネ達、女性陣に更に可愛がりと甘やかしを受けて身も心も蕩かされていく。

「お、俺で実践するなあ……うあ、ああ……」

ベルは抗議しながらも身も心も蕩かされるので骨抜きになっっていく。

「英雄が色を好むというか、色が英雄を好むというか……」

「何もおかしいところはないから、これでよし」

ヴェルフにルアン他男性陣はその間、他の冒険者が来ないようベルから離れて見張りをしたのであった……。

十話

冒険者がダンジョンを探索する中で最初に到達する『安全階層』である18階層から先、19階層から『中層』最後の階層となる24階層は『大樹の迷宮』と呼ばれる層域だ。

その名の通り、この層域においては木肌で構成された壁や天井、床は巨大な木の内部を彷彿させるものとなっており、燐光の代わりに発光する苔が無秩序に繁茂し、青い光を放っている。

又、奇妙な形と色をした葉に大きな茸、銀の雫を垂らす花々など地上には無い様々な植物が姿を見せているがこの層域には薬師達にとってはかなり質の良い薬の原料となる薬草が多く、それは当然、重宝されている。

ダンジョンに向かう冒険者に向けての依頼、冒険者依頼^{クエスト}で調達を依頼されるのもこの階層の薬草が多かったりする。

つまり、所属する「ミアハ・ファミリア」の活動の都合上、ベルにとっても訪れるべき、階層であり今回、初めてこの層域へと足を踏み入れたベル・クラネルは……。

「アアアアアツ!!」

『大樹の迷宮』にて出現するが絶対数が少ない最上位の希少種レアモンスターと対峙していた。

そのモンスターは尾を含めて全長は七?を超えようかという体躯であり、両脚は一体化したもので下半身は大蛇の如き、胴体。細い上半身の背中には灰色の皮膜を有する禍々しい翼、手には鋭く長い爪、体の随所は鱗に覆われ、髪は翼にまでかかる青銀の長髪、顔こそは人間の女性にも似ているがしかし、異形の風貌である。

額に紅の宝石があるこのモンスターの名は『ヴィーヴル』。

竜の種族であるため、高い戦闘能力を有していると共に冒険者にとっては『ヴィーヴル』のドロップアイテムはなんでも破格の額で取引されており、更に紅の宝石である『ヴィーヴルの涙』は巨万の富が約束されている価値があるために遭遇したら真っ先に倒すべき獲物とされている。

最もただでさえ、並みのモンスターより強い上に『ヴィーヴルの涙』は本体を倒せば砕け散るし、先に額から奪えば狂暴化して厄介な存在になるので倒すのは中々、至難であるが……。

「はっ、随分と活が良いなあっ!!」

そんなヴィーヴルに臆さず、ベル・クラネルは『ヴィーヴルの涙』を取る事と更なる強さを得るための試練としてあえて、徒手空拳にて挑んでいる。

これまでのダンジョン探索においても格闘術は使ったし、冒険者となる前から祖父に剣術だけじゃなく、格闘術は叩き込まれているので不自由は無い。

爪や尾によって暴威を叩きつけてくるヴィーヴルに対し、ベルは勝利に向けての意志を唸らせ、燃やししながらそれを原動力に変えて動き、四肢による格闘術を用いて捌いていき、反撃していく。

そして、一瞬の間隙を狙い……。

「貰ったっ!!」

「グッ!?!」

まずは額の『ヴィーヴルの涙』へと手を伸ばし、そのまま腕ぎ取った。

「ガアアアアアッ!!」

「それじゃあ、本番いこうか……【轟^{ビート}け】!!」

そうしてベルは雷霆の燃料を全力以上の全力で燃やし、更なる力へと変えて駆け跳

ね、蹴撃を繰り出す。

「グギヤアアツ!!」

ヴィーヴルは凄まじい武威を纏った蹴撃の炸裂により破碎し、ドロップアイテムを残してそれ以外は灰となり、消滅した。

「本当、疼かせてくれるし惚れさせてくれる勇姿だ」

「しやあツ、荒稼ぎいつ!!」

「ですねー、類を見ない稼ぎになりました」

「これでベルさんは「ファミリア」の借金、返せるので良かったです」

「そうだね、良かったよ」

「いやあ、素手でも勝てるのかももう、出来ないことは無いように思えてくるぜ」

「英雄に不可能はないんだ」

アイシャはベルの勇姿に艶のある視線と声を送り、リルルカはガッツポーズ、ヘイズは只々、笑顔となり、ベルから彼のファミリアの事情を聞いたカサンドラとダフネは安堵の笑みと声、ヴェルフは何気なしに呟き、ルアンは興奮した様子で断言したのだった

……。

「ステイタス」更新により、能力を着々と増していく冒険者のようにモンスターにもそうした方法が存在する。

それは『魔石喰い』——つまりは共食いのようなものだが、そうした事を行なったモンスターは力や知性、あらゆる能力が増していく。

そうしたモンスターの個体は冒険者たちの世界では『強化種』と呼ばれている。

その強化種が現在、ダンジョンの『上層域』12階層にて君臨していた。

「グルルルルッ!!」

『強化種』となった個体の名は『インファント・ドラゴン』。

翼が無いため、四足で地を這う琥珀色の鱗や長い尻尾に鋭利な爪、無数の牙を持つ『上層域』の希少種であり、更に元々の能力においても実質的に上層域の『階層主』と評される程の能力を有するモンスターである。

「う……………く……………」

『インファント・ドラゴン』の強化種により、窮地に陥っているのはとある「ファミリア」に所属し、普段は都市外での活動を主としているエルフの女性であり、結わえた金の長髪に濃緑の瞳、妙齢と種族的特性もあつて容姿端麗なローリエだ。

普段は都市外とはいえ、ダンジョンにおいても活動する事はするので慣れようと単独でダンジョン探索したりもする彼女は今回、不運な事に『インファント・ドラゴン』の強化種と対峙する事になってしまった。

彼女はLV・2で本来ならば倒せる敵だが、強化種であるために追い詰められてしまったのである。

「ガアアアアッ!!」

「(ここまでか……)」

迫りくる暴威に蹂躪されるしかないと諦めたその時……。

雷霆の輝きを纏いながら超速度で駆け跳ねる何かが即座に『インファント・ドラゴン』に接近すると同時に斬閃を炸裂させて滅した。

「危ないところだったな」

「……え、あ、はい……」

ダンジョン滞在のための必需品の補充と荷物一杯になった魔石とドロップアイテム

の換金のためにバベルへと帰還していたベルは『インフアント・ドラゴン』に追い詰められていたローリエを救出すると倒れている彼女へ手を差し出す。

ローリエは窮地の中、助けられた事やその際のベルの勇姿、彼女自身も自覚していない異性に対する『嗜好』が年下ヒューマン白髪赤眼とまさにベルがドストライクであったのもあつて、ベルに思いつき惚れまくりながら、その手を握った。

「（また一人、ですか）」

リルルカはベルを想う者が増えた事を確信し、しかも状況があまりに王道（自分も似たようなものだが）だったために苦笑するのだった……。

十一話

ベル・クラネルがオラリオ特有の祭りである『怪物祭』の開催日までの数日を予定にダンジョン探索を始めて、今は三日目。

色々な出会いを通してパーティーを組んでいるヘイズにリルルカ、ヴェルフにカサンドラ、ダフネにルアン、アイシャたちのため、収穫した魔石やドロップアイテムの換金及び保管、必需品の補充のために一旦、「スキル」の関係で大きなパックパックを背負って行動出来るリルルカと共にバベルへと帰還していたベルは途中、窮地に陥っていた「ヘルメス・ファミリア」のエルフであるローリエを助けた。

するとローリエはお礼のためにベルのパーティーに加わり、支援したいと申し出ながらベルと共にバベルへと帰還を始める。

「俺としては良いんだが、ローリエさんの主神や団長とかに言わなくても良いのか？」
「ああ、それについては問題ない。ちゃんと何日かダンジョンに滞在する事は伝えてあるし、それに私の主神、ヘルメス様は英雄の資格を持つ冒険者の情報を求めている。交流を深めているなら、もっと喜ぶだろう」

「そりゃ、どうも」

そういう話もあつて、ベルはローリエをパーティに加えた。

そして、一旦、バベルの地下一階へと辿り着くと……。

「ベル君、改めて危ないところを助けてくれて本当にありがとう。お陰で私は今、こうして此処にいる」

ローリエは一旦、ベルへとお礼を言った。

「ローリエ様、ベル様にお礼したいなら頭を撫でたりして可愛がり、甘やかしてあげると喜びますよ」

「リリ、お前いきなり何を……」

「えつと、ことうか？」

「う……ふ」

ローリエはリリの言う通り、ベルの頭に手を伸ばすとまずは慎重に丁寧に彼の頭を撫でていく。

ベルは撫でられるたびに心地良さげとなり、どんどん受け入れて、身を任せ始めた。

「お、おおつ、これは中々……」

「ふふ、ね、ベル様は良いでしょ。ローリエ様」

自分の可愛がりに満足げな様子のベル、それでもふもふなベルの髪質にローリエはすっかり虜となり、リリもベルの可愛がりに加わりながらローリエに声をかけた。

「ああ、とても良い」

「う……ああ、あく……」

ローリエとリリはベルの髪だけでなく顔中を撫で、弄り回して彼を蕩かしていく。

「失礼、私も兎さんを可愛がらせて下さい」

そうして、一人の女性が声をかけながらベルの可愛がりに加わる。その手つきには慣れがあった。

「うく……ああ、アミッドさ……」

「はい、アミッドですよ。随分、可愛らしい兎がいるかと思えばまさか、ベルさんだったとは」

その女性はアミッド・テアサナーレであり、これからダンジョン探索にでも行こうとしていたのかその服装は黒を基調とした戦闘衣となっていて、治癒魔法のための水晶の

長杖や回復薬などを入れていると思える小鞆なども身に着けていた。

聞けば治療院での仕事がおバーワーク気味なので気分転換と主神と相談しながら、用意を始めている18階層にある中継拠点、『リヴィラの街』に治療院を設けるための準備などそうしたものが重なって、ダンジョンへと赴くとの事だ。

因みに格好については『ダンジョンに赴くなら、それに相応しい恰好を』と団員からプレゼントされたとの事であり、プレゼントしたのは男性かとリリルカが聞けば『女性ですが』とアミツドが答えた。

『「デイアンケヒト・ファミリア」には拗らせたのが少なくとも一人、いる……』

アミツドの答えにベル達は戸惑いの表情と共にそう思考した。

ともかく、これも折角の機会とアミツドからベルのダンジョン探索のパーティ入りを提案され、ベルはこの事がナーザに伝われば後で怖い目に遭う事を確信しながらもアミツドの提案を受け入れ、バベルでの用を果たすとヘイズたちが待つダンジョンへと戻る。

そして、ヘイズたちが待つ18階層へと戻ればアイシャの助けとヘイズの助けも借りてダフネにカサンドラ、ルアンら【アポロン・ファミリア】とヴェルフは【経験値】稼ぎのためにモンスターと激戦を繰り広げており……。

「ふふ、これはこれで良いヒーラーだね」

「はい、本当に癒されます」

「ベル様、もつともつと甘えてください」

「そうそう、もつと身を任せて。蕩けさせてあげるから……」

「お姉さんたちにいつぱい可愛がられて、甘やかされて良かったですね」

「ああ、どんどん虜にされてしまう。大好きだ、ベル君」

「エリスイスが羨ましいですね。だから、私も……」

「うあ、う……お、おお……」

『リヴィラの街』にある天然の洞窟を宿屋にしている『ヴェリーの宿』はアイシヤが娼婦としての情事をする際に使っている宿であり、主人のヴェリーに対してもそうしたこと（本人、曰く世話）を何度かやっていると、いう事もあつて無料で部屋を借りるとベルは今までのものに加えて情事、しかもアイシヤだけどころかアイシヤの指導の元、ヘイズにリルルカ、ダフネにカサンドラにローリエらがそれを行い、アミッドは性的な繋がりのは無かったものの、奉仕だけはした。

そうして、ベルはとことん、蕩かされて骨抜きにされていったのだった……。

十二話

ベルがダンジョン探索を開始してから、四日目。

つまり今日はベルにとって、ダンジョンから「ミアハ・ファミリア」の本拠へと帰還する日である。そんなベルはと言えば……。

「おおおおっ!!」

「グルウアアアアッ!!」

彼はヘイズたちと共に中層域であり、19階層から24階層までの層域である『大樹の迷宮』。

その最後、24階層を探索すると赤や青の美しい宝石の実を宿す正に金のなる樹である宝石樹を発見。そしてその樹を守る宝財トレジャの番人キーパーの如く、君臨していたモンスターと戦いを始めた。

そのモンスターは全長十?以上の竜であり、L.V. 4に匹敵する潜在能力を誇るとゴライアスにも並ぶ強力なドラゴンたるグリーンドラゴン。

ベルは魔法も駆使した全力以上の武威を振るい、グリーンドラゴンの強力な暴威に対

抗する。

「(やつぱり、良いなあドラゴンとの戦いってのは……)」

英雄譚において定番の怪物退治はドラゴンである。英雄を目指しているが故にその定番に挑んでいる事にベルは心を高鳴らせながら、絶対にやり遂げると意思を燃やしていた。

そして、これは彼にとつては練習であり、通過点。何故ならダンジョンに出てくるモンスターよりも更に強力であり、正しく最強のモンスターが外界のどこかに存在している。

それは黒竜——当然、ベルはその黒竜を倒すことも目的している。

「さて、それじゃあそろそろ倒させてもらおう」

そうして、グリーンドラゴンと戦うまでにゴライアスとの死闘、アイシャやヴィーヴルとの激戦を通して燃やし続け、練り上げてきた意思の熱を更に更にと燃やし上げると限界を超えた限界の力を振り絞りながら発揮し……。

「楽しかったぜ」

壮絶にして凄烈な剣閃を炸裂させ、グリーンドラゴンを屠ったのであった。

「ああ、なるほど……これは堪りませんね」

「ふあああ、ベル君格好良いなあ」

改めてベルの勇姿を目撃したアミッドは見惚れながら眩き、ローリエは恍惚とした様子
子を隠しもしていない。

「はい、ベルの勇姿は何回見ても飽きませんよ」

「ベル様は英雄ですから……」

「見るたびに好きになっちゃうよ」

「リリもです」

「戦いときは勇ましく、そして普段は可愛らしい兔……ふふ、反則だよ」

何度もベルの英雄としての勇姿を目に焼き付けているヘイズにカサンドラ、ダフネに
リリルカ、アイシヤもやはり、ベルを讃えた。

そうして、グリーンドラゴンから魔石とドロップアイテムを採取すると宝石樹の実も
全て取り、帰還を始める。

帰還するとバベルに預けていたドロップアイテムや採取物も回収、武器へと加工でき
る質の良い『ドロップアイテム』の幾つかをヴェルフに、回復薬に使えるものはアミツ

ドに渡しつつ、バベルの換金所で換金。

『ヴィーヴルの涙』に『宝石樹の実』、ゴライアスたちの魔石などもあるので総額にしても超億万長者へと至る程のものとなったがベルは当然とばかりに山分けを提言したのだが、大体の者たちは殆どベルがやったからと大半はベルが獲得し、残り少ないものをヘイズたちが取る。

因みにベルはアミッドの所属する「デイアンケヒト・ファミリア」に借金しているの
でこの後返しに行く形式になるが、そうしても腐るほどの金額を手に行っている。

「ベル、私は此処に居るフレイヤ様に報告しますのでこれで……」

「そうか、借り返しに何を要求されるのか怖いがそれでも借りは借りだ。ちゃんと返すからと伝えておいてくれ」

ヘイズはバベルの頂上に居る自分の女神で主神のフレイヤに会うと言って、ベルと別れる事を伝える。

「はい、しっかりと伝えておきますよ」

「それと話しぐらいは聞いてやるから、ヘイズさんのところの本拠での仕事が辛くなったら俺の本拠に来い。俺は居ないかもしれないけどな」

「……やっぱり、良い子ですねベルは」

「ん、うむう……」

ヘイズはベルの言葉に感動した様子で彼に言葉をかけると深い口づけをし、ベルを蕩かせると去っていった。

「それじゃあこれから、もつともつ腕を上げながらお前に相応しい武器を造り上げるから、よろしく頼むぜ」

「おう、よろしくな」

ヴェルフとも改めて、鍛冶契約を交わして彼とは別れる。

「ベル君、君とのダンジョン探索は本当に楽しかった。出来ればこれからもパーティーを組んでくれると嬉しい。恩返しもまだだし」

「ええ、勿論。パーティーに誘いたいときは俺の本拠に来てくれ。ヘイズさんにも言ったようにもしかししたら、居ないかもしれないが」

「ああ、分かった。それじゃあ……また」

「ふむ、んくう」

ローリエは笑顔で頷くとヘイズと同じように口づけする。

「ベル様、 私たちもこれで」

「借りは絶対に返すからね」

「これからもよろしくな、 英雄」

カサンドラ達、「アポロンファミリア」も又、ベルに声をかけるとカサンドラとダフネ達、女性陣はベルを甘やかし、可愛がって蕩かせながら去っていった。

「ベル様、 リリも又後で」

「私も待っていますね」

リリルカにアミッドもまた同様にベルを蕩かせて、満足するとそれぞれの本拠へ戻っていく。

「私もあんたの所に行くから、 あんたも私のところに来てくれよ」

「場所が場所だから、 難しいと思うが善処するよ」

アイシャは自分の本拠がある都市南東、『歓楽街』に来るように言つてベルは苦笑しながらも応じる。

「流石は私の見込んだ男だ」

そうして、アイシャはやはりベルを蕩かせて去っていった。

パーティーを組んでいた者たちと別れたベルはいったん自分の本拠へと帰還する。

「ベル、お帰り」

「ああ、ただいまナアーザさん……うう、む、ふ……」

ナアーザはベルが帰ってくると同時に抱き締めて深い口づけをした。そしてまずはやるべきこと——「『ディアンケヒト・ファミリア』へと借金を返しに行き……」。

「ほら、これで文句は無いな。ちゃんと返したぞ」

「……う、うぬぬぬぬ……お、おのれええええええつ!!」

ミアハの言葉に返された借金を見て齒ぎしりしながら、ディアンケヒトは叫んだ。

「なんで借金、返したのに悔しそうにするんだよ」

「まったくですね……それとおめでとうございます、ベルさん」

「ん……ふ……どうも、ありがとうございます」

「……」

ディアンケヒトの様子を奇異に思いながら、アミッドに祝われ、頭を撫でられる事で満足げにするベル。

その様子をナアーザは何かを察した様子で見えており、本拠へと戻るとリリルカが居た。

【ソーマ・ファミリア】にて『脱退金 一千万ヴァリス』を要求されたのでその額をしつかりとベルの許可のもと、換金額から取っていたリリルカは即座に脱退金を出したのである。

これにより驚愕し、戸惑った団長のザニスを尻目にリリルカは脱退を済ませ、そうして【ミアハ・ファミリア】の本拠で待機していたと言う訳だ。

故にそのまま、リリルカは改宗を受け入れられ【ミアハ・ファミリア】の団員になったのである。

そして、リリルカはしっかりとダンジョンでの事をナアーザに報告し……。

「ふふ、私が一番だつてしっかりと躡け直してあげるからね、ベル」

「リリも手伝います」

「う、あ、ま、待って……うくああああつ!!」

ベルがダンジョンに行っている間に情事のための道具を用意していたナーザーザはリルカと共にそれを使つてたつぷりと調教し、ベルを蕩かしまくつたのであつた……。

十三話

数日間のダンジョン探索の中で「フレイヤ・ファミリア」のヘイズに「ヘファイストス・ファミリア」のヴェルフ、「アポロン・ファミリア」のダフネにカサンドラ、ルアン達に「イシユタル・ファミリア」のアイシヤ、「ヘルメス・ファミリア」のローリエ、「ディアンケヒト・ファミリア」のアミッド、そして「ソーマ・ファミリア」から現在は「ミアハ・ファミリア」に改宗しているリルルカと本来、冒険者は他派閥の者とは交流しないのが常だが、ベル・クラネルはそんなこと知らないとばかりに交流し、そしてある程度関係を深めた。

そして、ベルはダンジョン探索の中で得た報酬を持つて、「ミアハ・ファミリア」が「ディアンケヒト・ファミリア」に対して抱えた借金の全額返済をした。

もつともその上でダンジョンでの稼ぎはまだまだ余っており、店の再建やら商売の拡大をするだけの資金にすることが出来るのでそうするとも決めていた。

ともかく、ベルは昨日ダンジョンから帰ってきたが本拠へと帰ったが、夜にはナアーズにそれと新しい団員となったりリルルカによって徹底的に愛され尽くし、蕩かされて

いった。

「う……んああ、く、ふおっ……も、もう止め……」

早朝近くに一晩中、ベルを愛し、可愛がって蕩かし、自分たちの飼う兎と化している彼のその様子に癒されたのもあって、早起きしたナーザとリルカが眠っているベルの頭を撫でたり、擦ったりと可愛がりを再開しているとベルは蕩けた様子ながらも起きる。

止めるように言っているが、反応としてはナーザとリルカに対して可愛がりを続けるように要求していた。

「ふふふ、やっぱリルカが居てくれると気持ち良く起きれるから、最高だね」

「戦いときは凄く格好良いのに、こういう時は凄く可愛らしくなるのが堪らないです」
ナーザもリルカもベルに対し、微笑みながら可愛がりを続けていく。

「く……ああっ……た、頼むから話を……」

「んん……もつと素直になつて欲しいなあ、遠慮しなくて良いんだよ、ベル」

「そうですよ。こういう穏やかな時はたつぷりと私達が愛して可愛がってあげますから

……」

「うく、ふああああっ!!」

ベルはナアーザとリルルカが満足するまで徹底的に愛され、可愛がられていったのだった。

ともかく、その後はまだしていなかった「ステイタス」の更新を主神であるミアハにしてもらおうと……。

「……うむ、その……うん、もうお前に対しては何も言わないし、考えないようにしよう。連続「ランクアップ」もそうだが、凄まじすぎる」

ミアハは複雑な表情を浮かべ、深いため息を吐きながら言う。

そう、ベルはダンジョン探索にてゴライアスと彼に付き従っていたモンスター軍勢、自分よりLV・が上で経験も豊富な冒険者であるアイシャ、狂暴化状態のヴィーヴルにグリーンドラゴンと激闘に次ぐ激闘を通してLV・2からLV・4へと連続の「ランクアップ」を果たしたのである。

それによって得た発展アビリティは『耐異常』と魔法発動の際、威力や効果の強化、効果範囲の拡大や精神力の効率化と魔法を使用する上で様々な補助を得られる魔法円を発生させる事の出来る『魔導』である。

そして『スキル』も複数、発現した。

一つは「英雄求道」であり、効果は『能力の常時限界解除』、『逆境時、全能力の超高補正』、『能動的行動に対するチャージ実行権』というもの。

二つ目は【アクロバティック・ラビット激動白兔】であり、効果は『アツク発展アビリティ』『アツク俊足』のアツク発現補正効果

はL.V.に依存)、『アツク敏捷』の超高補正、『アツク運動時、体力と精神力の消費度合いに応じた速度の強化』、『アツク速度域に応じた攻撃力の補正』というもの。

そして三つめはなんとスキル名ですら、神聖文字で表示されていない。よって、効果も不明である未知の塊な【スキル】であり、ミアハ自身の解釈で【アツク絶対なる真の英雄】。ベルはとんでもない成長を遂げたのである。

「どうとう、【スキル】にまで……」

本人は【スキル】にまで、ラビットと出てしまった事に結構、ショックを受けたりはしていたが……。

二

本日、オラリオの東メインストリートは盛大に飾り付けられ、出店も多く並んでとにかく様々な人や神で賑わっていた。

何故なら、今日は東のメインストリートにあるアツク円形闘技場にて【ガネーシャ・ファミ

リア」が主催となってダンジョンやオラリオ外で捕らえたモンスターに対する調教劇を披露する祭り、『怪物祭《モンスターファイリア》』の開催日である。

「ガネーシャ・ファミリア」は唯一、モンスターの飼育を許されている派閥であり、よつてモンスターの調教にも長けているのだ。

「ミアハ様たちの言う通り、凄いい賑わってんな」

「うん、今回はいつにも増してね」

「人気とは聞いてましたが、これ程とは……」

「ふふふ、今回も盛況で何よりだ」

そんな『怪物祭』が行われている東のメインストリートを「ミアハ・ファミリア」全員で見回っていた。

もつとも、ナーザがモンスターに対して深いトラウマがあるので闘技場には行かない。祭りの雰囲気を楽しみに来たのである。

そうして、時折出店で買ったたりしていると……。

「こんの、ドチビイイイイッ」

「なんだよ、ロキイイイイッ!!」

『ジャガ丸くん』の屋台にて「ロキ・ファミリア」のロキとそして、屋台を営んでいる

長い黒髪をツインテールにした小柄で童顔ながらもグラマースタイルの女神が争っていた。

「あ、あのロキ……人が見てるから……」

ロキの隣では彼女の眷属で花を象った刺繍が施され、美しい柄の白い短衣にミニスカートという私服姿だがベルと同じく、もしもの時の護衛の為かレイピアを帯剣しているアイズが困り果てていた。

「ヘスティアもロキも相変わらずだな……」

「そうですね」

ミアハとナーザは呑気に二人の女神の喧嘩を見て言った。

ロキと喧嘩している女神はヘスティアと言い、このオラリオで未だ眷属を得ておらず、未だに派閥を築けていない女神である。

とはいえ、善神としては有名であり、評価もされている。ミアハとは神友であり、良くミアハが世話してやってもいた。

そして、天界の頃よりロキとは喧嘩ばかりしている女神であった。主に体に似つかわしくない豊満な胸を持つヘスティアをスレンダーに過ぎる胸のロキが嫉妬しているのが要因であったりもするが……。

「ともかく、止めないと。つってもどうするか……」

「しょうがない……ベル、ついてきて」

ナアーザに誘われるままに取っ組み合いすらやりかねないヘステイアとロキの元へと行き……。

「ロキ様、ヘステイア様……とりあえず、ベルを可愛がつて落ち着いてください」

「ちよ、どういふ……んふ、く、うあ……」

ナアーザは二人の女神へと呼びかけながら、ベルの頭を撫でて飼い兎としてのスイツチを入れる。

『か、可愛いつ!!』

蕩け始めるベルの様子にロキとヘステイアは堪らず、駆け寄りベルを撫で回し、可愛がり始める。

「おおっ……」

アイズも又、ベルを愛で始める。

「う、あ、く……ああ」

「うん、もうどうでも良くなってきたよ。話に聞いてた通り、可愛いねベル君」

ヘステイアは孤児を保護したり、育ててきたりした母性の強い女神であるが故に可愛がったりする事には慣れている。実際、特にヘステイアの可愛がりにベルは反応を示していた。

「おお、凄い癒されるわあ……こんな子がおったんやなあ」

「うん、もふもふな兎のようでも可愛い……」

ロキもアイズもベルを可愛がる事で癒されている。

「うん、これで解決」

「ふふ、癒し効果は凄いですねベル様は」

「二人まで加わって……ふああああ」

ナーザは満足げに言いながらもやはり、可愛がり始め、更にリルルカも加わり、通行人の女性たちも加わってベルはとことん、可愛がられ尽くしたのだった……。

十四話

今日、迷宮都市オラリオの東地区は迷宮都市において開催される祭りの中では評判の高い『怪物祭』を楽しみに来た市内の冒険者に一般市民、都市外からの観光客や神々などで賑わっていた。

そして「ミアハ・ファミリア」の主神であるミアハに団長であるナーザと団員であるベルとリルルカも全員で祭りを楽しみに来た。

とはいえ、ナーザがモンスターに対し、トラウマを抱えているので祭りのメインである闘技場でのモンスターの調教劇を見には行けないが……。

まあ、ミアハは元よりダンジョンで散々、モンスターと戦っているベルにリルルカも調教劇には興味が無いので問題は無いし、雰囲気を楽しめながら派閥としての穏やかな時間を過ごしているので問題ない。

そして、そんな中で天界に居た頃より天敵の関係にあるヘステシアとロキが諍いを起こしたので放っておくことは出来ず、止めようとしたのだがナーザはベルを使つてのラビットセラピー染みた行為を行って争いを止めたのだ。

「ふ、うく、あうう……酷い目に遭った」

争いを止めて、ヘスティアにロキにアイズと別れたベルであるが彼はヘスティアとロキ、ロキの護衛を担っていたアイズ、そしてナーザにリルカ、更にベルが愛玩鬼と化しているそれに刺激を受け、可愛がりに加わった大勢の女性や女神たちによつて徹底的に蕩かされてしまっていた。

今もなお、力が抜けた様子でおぼつかない足取りとなっている。

「お疲れだったな、ベルよ……いやはや凄い人気だった」

ミアハはそんなベルに苦笑しながら、労いながら呟く。

「私たちが普段から調……可愛がり続けた成果だよ。ちよつとやり過ぎた気がしないでもないし、止める気も無いけど」

ナーザは自慢げに言いつつ、ベルを引き寄せて頭から愛撫していく。

「ふわ、も、もうや、止めてくれよ。ナーザさ……」

「ベル様は大変、愛らしいですからね。こつちも虜になっちゃいますから」

「う、ああ……リリ、ほ、本当にもう止めて」

リルカもやはり、ベルを可愛がる事に加わって更に蕩けさせていく。

「やっぱり、これからはベルを可愛がらせる商売も……」

「そうしたらきつと、素晴らしい集客効果が……」

「お、お願いだからそれだけは本当に止めてくれえええ」

大分本気でベルを商売においての愛嬌マスコット鬼にしようと考えているナーザーザとリリルカに必死に抗議した。

彼がなりたいのは英雄であり、オラリオに來たのも英雄になるため……決して女性に可愛がられ続けるマスコットになりには來たのではないのである。

ともかく、そんなこんなで怪物祭を楽しんでいたベル達だが……。

「(っ!?)」

激しい熱情と愛情込められた銀の視線がどこから自分に対して注がれるのを感じ、視線の主には失礼だろうが嫌な予感もしたのでベルは反応する。

「(なにかしてくるんじゃないかとは備えていたが、今か……)」

そして視線の主に対しては見当がついていた。数日前まで行つたダンジョンの探索に同行し、協力してくれた治療師であるヘイズ・ベルベットの主神であるフレイヤである。

ヘイズからも『ちゃんとあの方の意思に伝えてあげてくださいね』と念押しはされているし、なにより散々世話になつたし愛されたりもした関係上、無視は出来ないし拒否も出来ない。

「(仕方ないか)」

ベルは内心、面倒くさいと思いつつもフレイヤの意思に応える事にし……。

「ミアハ様、ナーザさん、リリ……なんか嫌な予感がするから、ちよつと様子を見てきて良いか？」
「ランクアップ」して『敏捷』もスキル含めて格段に上がったから直ぐに見て回れるからよ」

「なに……ふむ、まあそれは別に構わんが」

「ベルが冗談言うとも思えないしね。うん、行つてきて良いよ」

「ベル様なら心配ないでしょうが、お気をつけて……」

ミアハ達はベルが真剣に言っているのもあつて、許可を出し、そうしてベルは瞬時に足を踏み出し、近くの建物の屋根へと跳ね上がる。

「(こいつはっ!?)」

そうして、感じるのはまるで風になったような身軽さとそして、LV・2へと「ランクアップ」した直後においては感じた肉体と精神のずれであり、微細な感覚の誤差は現在とは二段階も「ランクアップ」したのに感じていないし、まるで最初からそうであったかのように馴染んでいる。

「(こいつは最高だっ!!)」

調整の手間を省けるので有難く、だからこそ現在の「スキル」の効果も確かめようとしながらベルは次々に建物の屋根をまさしく野原で兎がそうするかのように駆け跳ね

ながら、オラリオの東地区を超速の速度で進んでいったのだった……。

二

今回も例年通り、『怪物祭』を楽しんでいた人々に神はしかし、一瞬にしてその楽しみを奪われる。

『グオアアアアアッ!!』

何故なら、円形闘技場から脱走したモンスターが周囲を、まるで夢中になっている者を探すが如く、暴走しているからだ。

そう、闘技場から脱走したモンスターは誰かに強く魅了された様子を見せていた。それに夢中になっているので周囲の市民や神々には意識を向けず、よって今のところは大きな被害は無い。

それでもモンスターはモンスター、いつ牙を剥き、周囲の者たちに牙を突き立てて来るか気が知れたものではない。恐怖がこの場を染めつつあったが……。

「悪いな」

モンスターの近くに残像と化した白影が現れ、謝る声をモンスターが聞いたと思った

直後、斬閃がモンスターを切り裂いた。

そして白影はすぐさま、駆け跳ねてその場から姿を消す。

「つたく、モンスターを脱走させるとか正気かよ」

ベルは『敏捷』を超高補正し、移動している時、体力と精神力を注げば更に速度を上げられる『激動白兎』、更にその『スキル』で得た発展アビリティの『俊足』の効果もあって超速でオラリオの東地区を駆け跳ねながら、十中八九、フレイヤによって円形闘技場から脱走したモンスターを排除していた。

無理やりダンジョンや都市外から連れてこられた上、女神によっておもちゃの如くとされているモンスターに同情し、申し訳ないとは思っているがそれでも倒さざるを得ないのだ。

「ちよつ、どうしてこっちに來るんだよおおおつ!？」

そうして周囲を駆け跳ねていけば、トロールとシルバーバックの2体に追いかけるヘステイアの姿があった。どうもモンスターを魅了したと思われるフレイヤと間違っているらしく、積極的に2体のモンスターはヘステイアを追っていた。

野猿に醜悪な怪物とどっちも追いかけるには最悪なモンスターである。

「ふっ!？」

ベルはここまで何度か試している「英雄求道」のチャージを行使し、光粒を足に集め小鐘の音を鳴り響かせながら屋根から飛び上がり、そして空を蹴りつけるとともに解放。

爆発的な勢いで発走と共にトロールとシルバーバックの背へと追い付き……。

「しいっ!!」

斬閃を輝かせ、2体を瞬く間に斬滅した。

「え、あ、べ、ベル君……」

「取り返しのつかなくなる前に助けられて良かった。追いかけるには最悪なモンスターだったな」

助かった安堵感に助けたのが先ほど、可愛らしい兎のような姿を見せたのに今は凄まじい勇姿を示しているベルという事にハスティアは戸惑っていた。

そんなハスティアを一旦、剣を鞘に納めて抱き締め、ベルは背中を摩ってやる。

「うん、全くだよ。助けてくれてありがとう」

「どういたしまして……悪いが、まだモンスターが暴れ回ってるかもしれないから、見てくる」

「そうだね、皆を頼むよベル君」

「ああ、任せてくれ」

そうして、ベルは再び駆け跳ねてヘスティアの前から姿を消し、ヘスティアはベルが居なくなつた方向を見続ける。

「ベル君、可愛いのに格好良いなあ……」

ヘスティアは顔を赤らめ、艶の籠つた声で呟やきながらも心地の良い胸の高鳴りに身を任せるのだった。

又、この日の翌日、ヘスティアが自分の手によつて間接的に最悪な体験をした事に同情した女神により、この都市最大派閥に眷属がヘスティアの勤める『ジャガ丸くん』の店の商品を全て買い占め、これによりしばらくの間、『ジャガ丸くん』がオラリオ中でブームと化す珍事が発生し、どこかの派閥の「剣姫」が『ようやく、皆ジャガ丸くんの魅力に気づいた』と満足げに頷いたりするのは別の話である……。

十五話

モンスターの調教劇を披露している会場の円形闘技場より十匹ものモンスターが脱走してしまった。

当然、この事に一番動揺したのはこの『怪物祭』の主催派閥である「ガネーシャ・ファミリア」、【ガネーシャ・ファミリア】と密接的な繋がりがあり、この祭りにも協力している『ギルド』である。

そして、そんな一同の動揺を感じ取り何かあると察した【ロキ・ファミリア】のロキとアイズは話を聞いてアイズはすぐさま、脱走したモンスターに対処するために行動に出た。

遅れてモンスターの調教劇を観戦していたが、やはり【ガネーシャ・ファミリア】の尋常ならざる様子から異変を感じ取って外に出た【ロキ・ファミリア】所属のアマゾネスで妹のティオナと違って、グラマーなスタイルであり、黒い長髪と対照的な容姿のティオネとティオナ、そして実は『豊穣の女主人』にてアイズがベルに感心を寄せてい

た時、嫉妬の視線を送っていたが無視されていた長い山吹色の髪を後ろに束ね、エルフとしての美麗な容姿にスタイルも中々な魔導士であるレフィーヤ・ウィリデイスも又、アイズを追ってモンスターの特処のために行動に出た。

そんな中、先んじて行動に出たアイズはロキの指示の元、闘技場の外周部で天頂から東のメインストリートから入り乱れる街路の隅々まで一望する。

彼女が使える魔法であり、風を纏う「エアリエル」の一部を都市中に流れている風に乗せればモンスターの咆哮の振動を敏感に感知できる。

「見つけた……っ!？」

見事、大半のモンスターの位置を探知できたがそのモンスター達が瞬く間に消えていく。自分より先に対処に動いた者が居るようで、モンスターを次々に葬る速さから相当な実力者だと分かる。

「とにかく、行こう」

とはいえ、見つけた以上は何もしない訳にも行かない。アイズは「エアリエル」を纏い直し、風の化身となって超速にて疾走する。

そして、少し進むと……。

「あ、ベル……」

屋根の上中を凄い勢いで兎の如く、駆け跳ねるベルの姿を発見した。すると彼もアイ

ズに気づいたようでアイズの方を向いて、そっちへと向かう。アイズも同じくベルの方へと向かった。

「どうも、アイズさん……貴女もモンスターへの対処に？」

とある建物の屋根で二人は再開し、ベルの方から頭を下げつつ、声をかけた。

「うん、そうだよ。でも、ベルが半分、片づけたみたいだけど」

「ああ、十匹は居たよ。まだいるかもしれないが」

「あ、だったら終わりだよ……脱走した数はそのぐらいって言うてたから。お疲れ様」

「ちよ、い、今は……」

アイズは今が好機だとばかりにベルの頭に自然に手を乗せて先程のように撫で回しながら、モフモフを楽しみ、ベルは心地良くなりながらも声をかける。

すると……。

突如、遠くの方で爆発音にも似た轟音が響き、膨大な土煙が立ち込めた。

「どうやら、まだ終わりじゃないようだ」

「うん」

次なる異変にベルもアイズも意識を切り替えて動き出したのであった……。

突如、オラリオの地面より細長い胴体に滑らかな皮膚組織、向日葵の種のような頭部と蛇のような長大なモンスターが現れた。

そのモンスターの対処へと向かったのは「ロキ・ファミリア」のティオネとティオナ、レフィーヤである。

L.V. 3のレフィーヤはともかく、第一級冒険者の領域であるL.V. 5のティオネ、ティオナが居るので優に何の問題も無いと思われたが……。

「っぎん!!」

「かったあああつ?!」

ティオネとティオナは自派閥内でも徒手空拳において凄絶な技量を有しており、その打撃の威力は並のモンスターならば十分に破砕できる程の威力を持つているがモンスターの頭部の皮膚は相当に硬かった。

一応、皮膚を僅かばかりとはいえ、陥没しているし悶え苦しませているのでダメージはあるようだが……。

とはいえ、打撃では効果は薄くしかもアマゾネス姉妹は祭りを楽しむために武器を持つてもない。

だからこそ、魔導士でその魔法の威力は同LVの魔導士たちより抜きんでているレフィーヤに任せる。彼女が魔法を発動させるための詠唱を完成させるまで時間を稼ぐのだ。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり】」

アマゾネス姉妹の意図を読み取り、レフィーヤは詠唱を始める。

「【狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】!!」

そうして山吹色の魔法円を構築しながら、最後の韻を終え、魔力が収束した直後に……。

今までレフィーヤを見てもいなかったのに彼女の魔力に対し、異常な反応速度でレフィーヤに注目。レフィーヤは悪寒を感じたが……。

「【ケラウノス・エナジー】!!」

瞬間、最悪の悲劇が起こるそれを許さないとばかりに雷霆がモンスターへと接近し、振り下ろしの軌跡を描いた斬閃がモンスターを切り裂いた。

様子を見ていたベルが介入したのである。

そして、レフィーヤたちに声をかける間もなく、地面が激しく揺らぎ……。

『オオオオオオオオオオオ!!』

そこかしこの地面より破鐘われがねの咆哮を轟かせ、種のような頭部を開いて極彩色の花弁を見せながら、牙の並んだ巨大な口に生々しい口腔の奥からは陽光を反射させる魔石の光を放つ。

更に未だ埋まっている体の部分からは幾本もの触手を飛び出させる。蛇のようなモンスターモンスターの正体は食人花であった。

「なるほど、本番って事か。だが、覚悟しておけよ守るために戦う時の俺は無敵だっ!!」
ベルは自分に向かってきていている食人花へと告げながら……。

「ビート轟け——ケラウノス・エナジー!!」

超短文の詠唱と共に白色の魔法円を構築しながら全力以上の精神力を『魔力』として魔法を再発動。

もはや雷霆を燃料にしているというより、内部から雷霆そのものと化して食人花の群れに向かって駆け跳ねる。あまりの超速度に空中すらも足場となっていた。

そうして、雷霆による閃舞が瞬く間のうちに食人花の群れを殲滅していく。

「ベル、凄く強くなってる……それに、格好良い」

「あれがLV・2……でも、良いじゃない」

「わああ……凄いい、凄いいよ兎君っ!!」

つ拡張（一般的に魔法のスロットの限界は三つまでであり、それを超える事は出来ないが）も出来る『魔導書』を見つめながら呟く。

「ふふふ……本当に最高だわ。好き、とっても大好き、愛しているわベル。楽しませてくれてありがとう」

至高の美しさを体現する銀の女神は恍惚な表情であり、艶のある声でベルを讃えながら微笑む。

「それじゃあ、うんと愛して可愛がってあげるわ」

次の瞬間にはその場から移動を始めた。

「あんなに可愛らしい見た目ののに、あんなに雄々しく……ああ、もう惚れさせてくれるなあ。早く、あれが誰か調べなくては……必ず手に入れて見せるからね」

変態染みた表情と言動のとある冠を被った男神は呟きながら、ベルの姿に夢中となった。

様々な人物や神に対し勇姿を見せつけ、色んな感情の籠った視線を受けながらも……。

『わあああああっ!!』

……。
周囲に応えるように剣を抱え上げ、その姿に周囲の者たちは歓声を送ったのであった

十六話

今年、オラリオの東地区で開催された『怪物祭』は祭りどころか大惨事になるところであった。何せ闘技場から複数のモンスターが脱走し、更には地面より食人花の群れが出現したのだから……しかし、それでも流石は英雄の都と呼ばれたオラリオ。

英雄譚に出て来る英雄さながらの勇姿を見せつけながらベル・クラネルが救世主となつて皆を守り、モンスターを滅ぼした。

そのため、周囲の者たちは彼を讃えたし今後の活躍にも注目する事になるだろう。ベルにとってはまだまだ自分の夢を果たすための第一歩を歩んだに過ぎないが……。

ともかく、ベルは食人花の群れを滅ぼした後は『それじゃあ、俺はミアハ様たちを待たせていますし、帰ります』と軽く告げて残像を残しながら、その場から駆け跳ねて姿を消した。

そうして、屋根の上を駆け跳ね回つてミアハ達の姿を探し、自分を待っているその姿を見つけたので屋根から駆け跳ねて近くへと着地する。

「ただいま、嫌な予感は的中したよ。モンスターが暴れていたが全て片付けたから安心

してくれ」

「何やら激しい音とかが聴こえたがそうだったか……ご苦勞であつた」

「うん、お疲れベル。皆を守るなんて本当にベルは偉いね」

「流星はベル様です」

ミアハが労い、ナアーザとリルルカがベルを可愛がる。

「う、ふ……」

ベルは例の如く、ナアーザ達の可愛がりに対し心地良くなりながら受け入れた。

そうして、休憩がてらベンチに座つたベルはやはり、ナアーザとリルルカから可愛がられ、蕩けていると……。

「私も入れてください」

「え……んむ、ふ、く、あう……」

後ろから声をかけられたので振り返ればそのまま、後頭部から抱き締められ深い口づけをされ、更に頭の後ろから慣れた手つきで愛撫されて意識を更に蕩かされていく。

「貴女は『豊穡の女主人』の……」

「はい、シル・フローヴァですよナアーザさん……先ほど、モンスターと戦うベルさんの勇姿を見ていたので堪らず、ご褒美あげちゃいました。オラリオの皆を守ってくれたお礼もあります……それにしてもこんな弱点があつたなんて驚きです」

ナアーザの眩きにシルは答えながらも自分の口づけと可愛がりによつて蕩けて飼ひ兎と化しているベルに対し、満足げな笑みを浮かべながら言う。

「甘えたいなら、可愛がって欲しいなら言つてくれれば良いのに……ふふ、本当に素直じゃないんだから」

「まあ、そこは同意かな……でもベルを可愛がるのは飽きない」

「ですね、それに可愛がれば可愛がるほど味が出るつていうか……」

「うああ……」

そうしてしばらくの間、三人に可愛がられ蕩かされるままになつたベル。

「では、また店の方でござ来店を待っていますからよろしくお願いしますね」

満足したシルはそう告げるとベルの元を去っていく。

ベル達も又、夕方に迫ろうという時間帯もあつて自分たちの本拠である『青の薬舗』へと戻つた。

そうしてゆつたりと過ごしていると……。

「こんばんは」

『青の薬舗』に来店者が現れた。一人は羽根付き帽子を被り、旅人の衣装を着た橙黄色

の髪と瞳の細身の男神であるヘルメスであり、彼に付き従う二人のうち一人は「ヘルメス・ファミリア」の団長であり、水色の髪だが一房だけ白に染まっているという特徴的なそれでありながら、眼鏡をかけているのもあつて理知的な雰囲気も感じるが美麗な容姿の女性であるアスファイ・アル・アンドロメダ。

オラリオの冒険者たちの中では随一の魔道具の製造者として有名であり、もう一人はベルによつてダンジョンでの窮地を救われたローリエであつた。

「おお、久しいなヘルメス。元気に旅をしているようで何よりだ」

「ああ、優しい言葉をありがとうミアハ。実は怪物祭でのベル君の活躍を見ていてね。英雄の如き勇姿を見せてくれた事やオラリオの皆を救ってくれた事、それに何よりダンジョンでは俺の眷属であるローリエを救ってくれたことの礼をしにきたんだ」

ミアハに応じると用件を告げながら、ベルの方を向き……。

「俺はヘルメス……ベル君、怪物祭ではオラリオの皆をそして、ダンジョンではローリエを助けてくれてありがとう」

「私は団長のアスファイ・アル・アンドロメダと言います。ベル・クラネル……うちのローリエを助けられたのに色々忙しい身とはいえ、直ぐに札に参れず、すみません」

「本当にあの時は助けてくれてありがとう、ベル君」

ヘルメスにアスファイ、改めてローリエがベルへと頭を下げて礼を言った。

「どういたしまして、こっちこそわざわざ礼を言いに来てくれて嬉しいよ」

ベルはそうヘルメスたちの礼に応じた。

「これは礼の品だ。スロットが三つ埋まっていたら無理だが多分、読めば魔法を発現する『魔導書』だよ。スロットの拡張も確率次第ではあるけど出来ると思う、これは本当に俺の神としての勘だけど、読めばきつと君の力になると思うよ」

「どうも、ありがとうございます」

奇妙な色の書物であり、表紙は幾何学模様が刻まれてるそれをヘルメスが懐から取り出し、ベルへと手渡す。

「(……なんか、懐かしい)」

ベルは何故だか魔導書に懐かしいものを感じた。

「それでは、次からもこの店を利用させてもらいますので」

「是非ともよろしくな、ベル君」

礼儀として更にアスフィとローリーエが『青の薬舗』の商品である幾つかの回復薬を購入し、そうしてベル達の元を去っていった。

その後、ベルは早速、魔導書を開き中身を読み始めると……。

「何だ、此処は？」

何も無い、真つ白な空間にベルは居た。戸惑っていると……。

「鐘の音……」

聞き心地の良い鐘の音が聞こえたので聞き惚れながらもベルは音が聞こえてくる方向へと近づけば……。

「ふふ、これが下界の未知というものなのかしら……まさか、貴方に会えるなんてね、ベル、ずっと会いたかったわ」

白い長髪で色彩の違うオッドアイの瞳、まるでベルを女性的にしたような顔立ちの女性がそこに立っていてベルに対し、微笑む。

「……………」

ベルはその女性を見て、もはや本能とか感覚的なもので女性の正体を理解し、震え……、

「俺も……僕も会いたかったよ、お母さんっ!!」

ベルは素の自分を曝け出しながら、母親へと近づきその体を抱擁した。

「ごめんね、ベル。貴方を残したまま、死んじやって……でも貴方の事はずっと見守っていたし、これから見守っているわ」

「うん、お祖父ちゃんがそう教えてくれたから知ってるよ、僕、英雄になるために頑張ってるんだ」

「ええ、分かっているけど貴方は頑張りすぎだとも思うわ。もう少しだけでも自分の体を大事にして」

「うん」

不思議な空間で亡くなった自分の母親と奇跡的に出会い、会話をするベル・クラネル。

「幸せな夢を見てるんだね……楽しんで」

「本当に幸せそうに寝てますね」

本を開いたまま、眠っているベルの頭や背中を撫で回しながらベルの眠りを更に心地良い物に出来るようにする。

そうして、眠っているベルの精神世界では……。

「いつまでも隠れてないで姉さんも出てきたら？　ベルと会えたのも姉さんのお陰なんだろうし」

「いや流石にこれは私の予想外だ……まさか、こんな奇跡が起ころうとはな」

「僕に「ぶん」ぶぎゅ、い、痛いっ!!」

ベルの母親であるメーテリアから明るさを取り、女王のようにした威厳のある風格と姿の女性、アルフィアはベルが自分との関係を口に出そうとして直後に頭に強烈な一撃を受け、悶え苦しむ。

「先ほど、失礼な事を言おうとするからだ。私の事はお義姉さんと呼べ……生前は二十四才だったしな」

「いや、流石にそれは「ん？」ひ、な、何でもないです。お義姉さん」

「お、お姉ちゃん……」

メーテリアはアルフィアの傍若無人ぶりとベルが調教された事に絶句していた。しかし、そんなやり取りをしているうちに白い空間が揺らめき始める。

「もう時間みたいね、まあこんな奇跡が起こったんだから無理も無いかな……ベル、母さんたちからの贈り物を受け取って」

「お前に唯一、渡せる物を渡そう」

そうしてメーテリアとアルフィアはそれぞれ、ベルの頭に手を置く。

『ベル、私たちはお前をいつまでも見守っている』

「うん、ありがとう。お母さん、お姉さん」

ベルは触れられているメーテリアとアルフィアの手から温もりを受け取りながら、礼を言いそうして白い空間は消えてベルは眠りから目覚める。

そうして、ミアハに「ステイタス更新」をしてもらうと二つ目の魔法が発現しており、それは無詠唱だけでの発動や詠唱しての発動で効果を変えて発動するという異質な魔法。

「アルカディア・ベル」という名の魔法であった。

そして、更に「スキル」も発現しており、それは『発展アピリテイ』『大魔導』の発現と『魔力』に超高補正』と『魔法効果超増幅&精神力消費超効率化』という魔法に関して超絶的な強化をするスキルでありその名は「リング・ベル鳴響継鐘」であり、変わらずとんでもないベルの成長ぶりにミアハは絶句したのであった……。

時系列 原作二巻&ソード二巻 十七話

『怪物祭』が終わって夜にローリエの主神であるヘルメスからもらった魔導書を読んだ事で正に『奇跡』とも呼ぶべき現象がベルに起こった。彼が物心つく前に亡くなった母親のメーテリアとその姉、ベルにとっては叔母のアルフィアと夢の世界という形で出会う事が出来たのだ。

少ししか話は出来なかったが、本来なら二度と出会う事は出来なかったのだ。話もそして何より、触れられて温もりを感じれたので十分だ。

そうして、目覚めた彼は魔法とそれに関係する「スキル」を得たのである。

現在、『怪物祭』の翌日であり、朝。今日のベルの予定としてはLV・4に「ランクアップ」したことをギルド本部に居る自分のアドバイザーのローズに報告する事と後はダンジョンの下層についての資料を見せてもらおうとしている。

もつとも「ランクアップ」した要因と二段階の「ランクアップ」を果たした事でローズに怒られる事は容易に想像できたが……。

なのでその準備を軽くしていると……。

「おはようつ、俺がガネーシャだっ!!」

「ガネーシャ、声がかいし十分な挨拶になってない」

『青の薬舗』に象の仮面を被った浅黒い肌引き締まった肉体を持つ男神、ガネーシャに彼の眷属で「ガネーシャ・ファミリア」の団長である女性の短髪の藍色の髪に手足は長く、百七十を優に超えた身長、整った伶俐な容貌でL.V. 5の第一級冒険者であるシャクティ・ヴァルマが現れた。

「おお、久しぶりだな。ガネーシャ」

「うむ、久しぶりだ。ミアハ」

ガネーシャとミアハは軽く言葉を交わした。そして、ガネーシャとシャクティが『青の薬舗』へと来た理由だが『怪物祭』の時に脱走したモンスターとオラリオの地面より現れた新種と思われる食人花を倒し、オラリオを救ったベルに祭りの主催者として礼を言いに来たとの事。

「本当にありがとう、ベル・クラネル。このオラリオを救ってくれて」

いつもとは違う真剣な雰囲気と言葉でガネーシャはベルに誠意と礼を伝えた。

「同じく……オラリオを救ってくれて感謝する。ベル・クラネル」

「わざわざありがとうございます。ですが、当然の事をしただけですよ」

ベルはガネーシャとシャクティからの札に応じつつ、言った。

「若いの随分と謙虚だな……それに聞いた話と比べて随分と可愛らしい」

「え……あ、うう……」

シャクティは微笑みながら、ベルの頭を優しく撫で直し、ベルは例の如く、それを受け入れ身を任せ始めた。

「いや、本当に可愛いな」

シャクティはベルの子兔の如き、可愛さに心を疼かされながら更に撫で回していく。

「それでは……何か困った事があれば言ってくれ。必ず力にならせてもらう」

「うむ、ガネーシャだからなっ!!」

「ガネーシャ、うるさい」

シャクティは存分にベルの撫で直しを楽しむと『青の薬舗』の商品を幾つか購入してガネーシャと共に去っていった。

それからわずか後に……。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよう」

「早朝に失礼する」

【ロキ・ファミア】のレフイーヤにアイズ、ティオナと更にレフイーヤの師匠であるリヴェリアが『青の薬舗』を訪れた。

「昨日は危ないところを助けて頂き、ありがとうございます」

彼女たちが店に来た理由は昨日、怪物祭にて現れた食人花が攻撃しようとしたレフイーヤを助けた理由を言いに来たのであった。

「レフイーヤを助けてくれてありがとう、ベル。それに格好良かったし、強かったね」
続けてアイズが言い……。

「本当にね……それに兎君がまるで私の大好きな英雄譚の英雄みたいで私、君のファンになっちゃった」

英雄譚が好きだというティオナに対し、ベルも又、英雄譚は好きだと言った事で更にティオナは気を良くした。

「私の大事な弟子を助けてくれてありがとう、ベル・クラネル」

リヴェリアは愛弟子を救ったベルに師匠として感謝を伝えた。

そうして……。

「うあ、ふ、く……ちよ、ああ……」

「うん、やっぱりもふもふで可愛い」

アイズがベルは可愛がられるのが好きだとレフィーヤたちに言っており、だからこそベルは頭や顔と愛撫されて可愛がられていく。

「わあ、本当見た目通りの兔のようで可愛いですね」

「うん、可愛すぎるよ。こんな弟が欲しかったんだよねえ」

「ああ、随分と愛らしい。これが生まれつきだというならある意味、恐ろしいな」

アイズに加えてレフィーヤにテイオナ、リヴェリアもベルを思う存分、可愛がると商品を幾つか買って、都合が合ったりすれば一緒にダンジョン探索しようなどと言葉を交わし、別れた。

「今日も朝から可愛がられて、良かったね」

「ベル様、幸せそうで何よりです」

「うく、あ、も、もう……んああああっ!!」

ナアーズとリリはベルにとつては自分たちこそが一番だとしつかり刻み付けるように可愛がり直したのであった……。

今日も冒険者たちでいっぱいギルド本部……その換金所で偶々、ローズは換金の仕事をしていた。担当が来るまでの一時的なものである。

しかし、そんな彼女の前に居たのはえらく、表情が切羽詰まっている男の冒険者。

最近、随分と換金の際にゴネてくる「ソーマ・ファミリア」の眷属の幾人かのうち、一人であった。

『朝から勘弁してよ』とローズは思いながら、対応を始めたが……。

「ち、ちくしよおとおっ!! 良いから金を出せつてんだよおっ!!」

換金の結果に納得いかず、元々切羽詰まっていたのが爆発したのだろう。男はなんとこのギルド本部にて武器を抜く。その常識はずれな行動はかえって、周囲の冒険者たちの虚を突き、よって冒険者の凶刃はローズへと……。

「(嘘でしょ……)」

ローズは状況を受け入れられず、思考を停止させながら只々、迫りくる凶刃を見……。

「がぶっ!!」

しかし、冒険者は引つ張られて体勢を崩しながら、男を引つ張りながら待ち受けていたベル・クラネルが回し蹴りを頭部に炸裂させて床へと倒れさせた。

「……早くそいつを連れていってくれ、我慢できず、殺しちまいそうだ」

「あ、ああ」

ベルの言葉に本来なら護衛として待機している「ガネーシャ・ファミリア」の団員に言えば、団員は応じて直ぐに倒れている冒険者を連行した。

「間に合つて、良かったです。本当に……」

「ええ、助けてくれてありがとう。ベル」

そうして、ローズは本来の換金担当と変わり、ベルと共に個室へと行けばL.V. 4に「ランクアップ」した事とその経緯を告げる。

「本当にあんたつて子は……ふふ、良いわ。助けられた礼も含めてたっぷり可愛がつてあげる」

「え、あ……ちよ、ロ、ローズさ……うわあああああつ」

ローズはベルをたっぷり弄り、可愛がる事で蕩かせていく。

そんな中、ベルはローズを襲おうとしていた冒険者が「ソーマ・ファミリア」の眷属である事を知り……。

「(これ以上は流石に見過ぐせねえ)」

自分に対してもだが、幾度か見た「ソーマ・ファミリア」の蛮行……これ以上、放置すれば問題になるだろうと判断し、対処する事を決めたのであった……。

十八話

ギルド本部にて受付嬢であり、アドバイザーであるローズ。つまりは職員に対し、凶行を働こうとしていた「ソーマ・ファミリア」の団員を倒して凶行を防いだベルは前から何度か、「ソーマ・ファミリア」が蛮行をしたのを見たり、聞いたりしたので見過ごす事を止め、襲撃する事に決めた。

ローズにL.V. 4に「ランクアップ」した滅茶苦茶さとなつた経緯によるこれまた、滅茶苦茶さに対しての怒りと助けた事による感謝とで弄られ、可愛がられまくった事で蕩かされたベルはその後、予定を変更して「ソーマ・ファミリア」を襲撃するために使う正体を隠すための冒険者用のローブと仮面をバベルの武器店にて購入する。

襲撃時間はなるべく騒ぎにならない事や襲撃しやすい夜を選び、とりあえず今日、自分とは別に「ゴブニュ・ファミリア」へと新店の相談をするために向かつたミアハ達は今頃は帰っていると思われるので『青の薬舗』へと帰り、報告する事にする。

もし、帰っていないならいないで待てば良いのだから……。

そうして、本拠へと帰っていたベルだが……。

「ベルさーんっ!!」

「うわっ」と

夕方くらいの時刻、今は営業中の『豊穰の女主人』の方からシルが飛び込んできたのでやむを得ず、ベルは受け止めた。

「ふふ、なんだかんだ言って受け止めてくれるんですから、ベルさんは良い人ですよ。良い子良い子……」

シルはご満悦になりながら、ベルの頭の後ろや頬、それから顔や頭と撫で回しや撥りなど弄っていく事でベルを可愛がっていく。

「うああ、そう言うなら人の優しさに着け込むのは止めろお……」

ベルは蕩けながらもそう抗議した。

「まあまあ……朝はすみませんでした。昨日休んだ分、働けてミア母さんにこき使われてて」

シルはベルの反応を楽しみつつ、そう謝る。

「くふ……じゃあ、今抜けて平気なのか?」

「丁度、休憩中なので……という訳で折角会えましたし店に寄っていきませんか? ベルさんが寄ってくれるなら、もっと頑張れますし可愛がってあげますから」

シルはベルへと語り掛けつつ、抱き締めながら更に弄っては可愛がっていく。

「……つう、今からやる事があるが……店が終わりぐらいの時間にちよこつと寄ってやるよ……」

「寄ってくれるなら、それで構いません。ありがとうございます、ベルさん。ちゅ」

「んむ、く……んあ……」

シルはベルに微笑みかけると顔を寄せて深い口づけをして、更にベルを蕩かせていく。

そうして、豊稜の女主人から『青の薬舗』へと帰るとミアハ達が居て……。

「実は今日、ギルド本部に行ったら危うくローズさんが「ソーマ・ファミリア」の団員に襲われかけている場面に出くわした。幸い、間に合ったし阻止出来たが……」

『なっ!?!』

ベルからの報告にミアハ達は驚く。ダンジョン探索していた時にローズにアドバイザーを担当してもらったナーザーは更に、そして元「ソーマ・ファミリア」で脱退したばかりのリリも又、とうとうそこまで暴走するようになったかと思慮する。

「敢えて言わなかったが、前に俺もダンジョンで「ソーマ・ファミリア」に襲われた事があったな。それにリリルカをモンスターの群れの中で置き去りにしたり、そして今回……これ以上、放っておけばとんでもない事になりそうだから止めに行きたい」

「……決意は固いな、本当は止めたいところだが……せめて程々にな」

「……そういう事なら、行つて。ローズに手を出そうとするなんて許せないよ。私の分まで懲らしめて」

ミアハはベルを止められない事を悟ると仕方ないといった表情で頷き、ナーザは怒りと共にベルに許可を出す。

「ベル様、道案内なら……」

「いや、何が起こるか分からないし地図で場所だけ教えてくれ。その方が安心できるし、俺の帰りを待ってもらつてただけで俺は十分だしな」

「ふふ、嬉しい事を言ってくれるね。だったら、帰ってきたらまたたつぷりと可愛がつてあげるからね」

「楽しみにしててください、ベル」

「ああ、ありがとう」

こうして、ベルは夜になると仮面を被り、ローブを着てフードを目深に被ると素手の状態でリリから教えてもらった「ソーマ・ファミリア」の重要拠点である『酒蔵』へと向かう。

その酒蔵では「ソーマ・ファミリア」の眷属においては主神よりも重要な『神酒』が保管されているのもあって、リリが言うには実質的な本拠と呼べる場所になっていると

の事だった……。

二

薄緑色の短髪に美麗な容姿であり、尖った耳。口元には覆面で格好としては動きやすい短衣、長い木刀と腰には左右それぞれ小太刀を納めた鞘を帯剣していると云った普段の店員としてではなく、今回、引退する前の職業、冒険者としての姿となっているリユーが夜の中、都市内の建物の屋根中を風に舞う妖精となりながら、疾走していた。

昨日のシルと入れ替わる形で今日、一日休みを貰った彼女は冒険者を引退する前に所属していた「ファミリア」の仲間であり、ダンジョンでとある要因によつて死んだその仲間たちの墓参りと掃除のため、密かにダンジョンへと向かっていたのだ。

「(あれはまさか、クラネルさん?)」

『豊穰の女主人』へと帰還していると凄まじい速さで屋根を駆け跳ねる何者かの姿を見かけ、なんとなくそれが兎の如くであつたためにベルを連想したので追いかける事にした。

「(この私が……中々、追い付けないっ?)」

とても冒険者になったばかりとは思えない程であり、ともすれば自分をも超える能力を有しているのではと思う速度でベルは駆け跳ねており、リユーはその事自体に驚きながら必死で追った。

すると……ベルは気づいていたようでどこかの地面を指差すと降りる。因みにそこは「ソーマ・ファミリア」の『酒蔵』近くだ。

「こんばんは、リユーさん。やっぱり、貴女は冒険者だったんですね」

「え、ええ……それと尾行してしまい申し訳ありません、クラネルさん。つい、気になったものだから」

物陰にて降りてきたリユーに対し、ベルは苦笑するとリユーも苦笑しながら、謝った。「別に構いませんよ。因みに俺は今からギルド本部で俺の担当アドバイザーを襲おうとするなんて馬鹿な真似をした団員が居る【ファミリア】をとつちめに行くところですよ。ギルド本部にそんな真似をする派閥なんて放っておいて良い事はありませんからね」

「……確かにそうですね、これも何かの縁でしょうし、そういう事なら私も力になりましょう」

リユーは言動こそ軽めだが、ベルから確かに悪に対する怒り、義憤を感じ取り、それもあつて協力する事にした。

「ではお願いします。因みにL V. は？」

「L V. 4ですよ、クラネルさんは？」

「奇遇ですね、俺もL V. 4です」

「え……」

リユーはまさかのベルの言動に驚きながらも「ソーマ・ファミリア」の『酒蔵』へと向かい……。

『ぐわああああつ!!』

「ソーマ・ファミリア」の団員たちを兎の如く、縦横無尽に駆け跳ねながらダンジョンで戦ったアイシヤの体術に垣間見た程度とはいえ、しつかりと覚えたテイオネとテイオナの体術を参考とした徒手空拳を持ってベルが打ちのめし、リユーも又風に舞い踊るかの如き、剣舞で倒していく。

更に……。

「【アルカディア・ベル】!!」

無詠唱と共に放たれた鐘の轟音の如き、衝撃波であり振動波がベルより放たれ、標的を吹っ飛ばしながらその肉体を損傷させる。

「【楽園の鐘よ、福音を鳴らせ】——【アルカディア・ベル】!!」

更に詠唱を加えたためか範囲に威力を増した鐘の轟音であり、音による強烈な砲撃が

更に標的を吹っ飛ばしていく。

「くそおっ!!」

【ソーマ・ファミリア】の団員達も必死に反撃しようとする刃等の武器、更に魔剣や魔法による砲撃を行うも……。

【楽園の鐘よ、鎮魂^{レクイエム}の音を鳴り響かせろ】——【アルカディア・ベル】

別の詠唱によって発動し、鳴らされた鐘の音波が障壁となり刃など物理的なものは弾き返され、魔剣に魔法の魔力はなんと、無効化され消失する。

「う、嘘だろ……」

魔法すら無力化されるどうしようもなさ【ソーマ・ファミリア】は呆然とし……。

「(クラネルさん、貴方は……)」

リユーは驚きながらも鐘の音による砲撃、魔力の無効化と過去に似たような魔法を使った存在をリユーは想起した。

「(随分と良い贈り物を貰ったな。ありがとう、母さん。アルフィア義姉さん)」

ベルは魔法を試しながらその効果を実感して、この魔法をくれたメーテリアとアルフィアに感謝を告げる。

「降参だ。用件があるなら言ってくれ……」

様子を窺っていたドワーフであるザニスが代表となつて降参した……。

そうして……。

「く、くそお……は、早く逃げましょうソーマ様」

酒蔵が襲撃され、状況が不利になった事で中肉中背の男神であるソーマを連れて逃げ始めているのは彫りが深い細面に眼鏡をかけ、理知人を気取っているが嫌らしさを隠しきれていないヒューマンの男で団長のザニス・ルストラ。

「逃がすかよ。【楽園の鐘よ、至高の音を世界に鳴り響かせろ】——【アルカディア・ベル】!!」

ベルは魔法を発動するとともに鳴り響く鐘の音は周囲一帯へと浸透しながらとある現象を引き起こす。世界の色が音の発生源であるベルを除いて白黒となり、ベル以外の者の動きは緩慢となっていく。

鐘の音が時間の流れを乱し、狂わせたのである。

「(体力と精神力が凄い消耗するが、これも又、使えるな)」

時間に関する魔法の効果を実感しつつ、緩慢となった世界でベルは動き、ザニスへと近づくと魔法を解除してザニスの頭を掴んで持ち上げ……。

「【アルカディア・ベル】!!」

「がばあああっ!!」

ザニスは超至近距離で受けた鐘の轟音による砲撃により、頭を始めに体の至る所が破壊され、血を吹き出し、骨まで見えているという致命傷に近い重傷を負わされながら放り捨てられる。

「とりあえず、責任を持ってもらおう」

「うがつ!!」

そして、死なない程度の力でソーマを殴り倒した。

「これで酔いは醒めたる」

「……………わ、私は……………」

ベルの拳の痛み、それによる熱がソーマの心身に響き、ソーマは戸惑うのであった。そうして、用は済んだとばかりにベルはリユーと共に『豊穣の女主人』へと戻りながら……………。

「クラネルさん……………」

「メーテリアは俺の母で、アルフィアにとって俺は甥だ。俺の魔法に覚えがあるならそういう事だ」

「つ!!」

リユーはベルからの言葉に驚く。

「リユーさん、俺は母さんたちにも誓ったんだ。英雄になるって……母さんたちから受け継いだこの魔法も使つて必ず、英雄になってみせるよ」

「……はい、貴方ならきつとなれますよ。クラネルさん……そして、本当に貴方は尊敬に値する素晴らしいヒューマンだ」

「ありがとうございます……って、うあ、リユ、リユーさん……」

「シルの言つていた通り、クラネルさんは可愛がられるの好きなんですわね」

ベルはそうして、リユーによりしばらく頭を撫でられたり、顔を弄られたりして反応を楽しまれながら可愛がられて蕩けていく。

その後、シルとの約束通り『豊穡の女主人』へと向かえば『リユーと何してきたんですか、ベルさん』とシルにより、耳を甘噛みや穴の中を舐められたりなど責められつつ、リユーと共に可愛がられて蕩けに蕩かされ……。

「ベル、ご苦労様」

「たつぷり、癒されてください」

「う……んあああああつ!!」

ベルはナーアザとリリによる奉仕によって、たつぷりと蕩かされ尽くしたのであつた……。

十九話

昨日、自分の冒険者としてのアドバイザーであり、ギルドの職員であるローズ・ファネットが自派閥において働きの成果により、与えられるこの世のどの酒よりも極上の味の酒こと『神酒』を求めた結果、暴走した「ソーマ・ファミリア」の団員に襲われかけた。

間一髪でベルが間に合ったのでローズは無事だが、この行為により前から「ソーマ・ファミリア」の様子を見ていたベルは極力、自分の都合で主神であるミアハにナーザたちを巻き込みたくも無いし他派閥との争いにならないようにはしていたがこれ以上、許容も見過ぎすことも出来ないかと判断し、最低限正体を隠して「ソーマ・ファミリア」が本拠よりも重要としている『神酒』の酒蔵へと強襲を仕掛けた。

偶然、出会ったリユアの協力も得られ、ベルが考えるよりも早く「ソーマ・ファミリア」への襲撃は終わり、しばらくは活動できないくらいにダメージを与えることに成功した。

そうして本拠へと帰るとベルはナーザとリリによって、愛され尽くし……。

「ん…………ふ、あ…………」

ベルはまるで寵の火で温められているかのような、心地良さと気持ち良さを感じながら意識を目覚めさせていく。

「(暖かい、気持ち良い)」

布団よりも柔らかく、気持ち良く温かい何かに自分は横にならされて頭を撫でられ、頬や顔を揉まれ、腹部や背中を摩られたり、擦られたり、気持ち良くなる刺激をベルは与えられた。

「良い子、良い子…………ベル君は良い子」

「とても可愛くて、大好きですよベル」

甘く優しい声をかけ続けられたり、息を吹きかけられ、気を抜けば、微睡みそうになつてしまうほどの快樂…………しかし…………。

「(起きないと)」

こういつた快樂に身を委ね、骨抜きになつてしまつては母と義姉に怒られてしまう。だからこそ、ベルは無理やりにも意識を覚醒させた。

「…………ん、ふ…………つてあ、あれ、ヘステイア様？ それにヘイズさんも」

「あーら、起きちゃったか…………やあ、おはようベル君」

「どうも、ベルー。とても気持ち良さそうに寝てましたね」

目覚めるとベルはヘスティアに膝枕された状態であり、ヘイズも居た。

ヘスティアは昨日、何故か店の『ジャガ丸くん』が店を買い取る勢いで「フレイヤ・ファミリア」の団員達により、買い占められた事で特別休暇と特別給金が与えられた。

それもあつて、ヘスティアは一昨日の『怪物祭』にて助けられた礼をしに来たのである。

ヘイズは『怪物祭』の前日にバベルで別れる際、ベルに話を聞くぐらいはしてやると言われたので早速というか、ともかく「ミアハ・ファミリア」を訪れた。

主神であるフレイヤからもヘイズはベルとの交流役を任されているし、何なら毎日、積極的に会いたいくらいにはもう惚れているし愛している。

そんな訳でベルの元へとやってきた二人は深く眠っていて、無防備なベルの姿を見、ナーアザとリリルカの許可もあつてベルが目覚めるまで可愛がり、甘やかしていたのだ。

また、実はベルの契約鍛冶師でありベルとのダンジョン探索の結果、L.V. 2にもなつて本格的に鍛冶師の道を歩めるようになったヴェルフも手始めに本格的な長剣や軽装鎧を完成させる前の繋ぎとして造つたそれを受け取ってもらいに「ミアハ・ファミリア」へとやってきたのだが、ナーアザ達の様子を見てミアハに『工房で待っている』と伝言だけして帰つた。

「それでは行ってきます、ナアーザさん。ミアハ様、それにヘステイア様」

身支度に遅めの朝食を済ませるとベルはヴェルフが用意したという長剣と軽装鎧を受け取り、試用のためにダンジョンの中層まで探索する事を伝え、リルルカに今回も治療師として同行を申し出てくれたヘイズを伴いながら、ナアーザ達に出発の挨拶をする。

「うん、気を付けて行ってらっしゃい」

「無茶は程々にな」

「行ってらっしゃい、ベル君」

ナアーザ達により、見送られながらベル達は一度、北東のメインストリートでありオリオが誇る魔石を原料とした製品を製造している心臓部でギルドに雇われた無所属の労働者や派閥の職人までが集まる都市第二区画こと工業区が隣接している場所へと向かった。

ここにヴェルフが工房として与えられている平屋造りの建物があるからだ。

「悪いな、折角来てくれたのに寝ちまって」

「いや、『怪物祭』でも皆を守るために戦ってたお前の事だ。昨日も誰かを守るために戦ってたんだらう？」

「ああ、そういう事だ」

そうしてヴェルフの工房にて言葉を交わしながら、ヴェルフが発展アピリテイ『鍛冶』の効果を試すためもあって、徹夜にて完成させた長剣と軽装鎧をベルに与える。

ベルはダンジョン探索に誘ったが、ヴェルフは徹夜からの疲れもあるので眠る事を告げる。

そうして、ベルは再びリリにヘイズを伴いながら、ギルド本部へと向かう道中……。

「ヘイズさんが治療師として同行してくれるのはありがたいんだが、自派閥は大丈夫なのか？　なんか毎日、殺し合いレベルで手合わせしてるって言ってたけど」

「はい、大丈夫です。むしろ私が居る事のありがたみを知るべきなんですよ。あの人たちは……」

「そうか……でも、『フレイヤ・ファミリア』の人たちに俺、恨まれそうだ」

「フレイヤ様が関心を向けてるだけで、既にあの人たちはベルに敵意や対抗心向けてるので……心配なく」

「心配だし、最悪だし、迷惑過ぎるわッ!？」

「物騒な事を平然と言わないでくださいッ!!」

ヘイズからの呑気な言葉にベルとリルルカは突っ込んだ。

ともかく、ベル達はギルド本部へと行くと……。

「お、ラベット・ナイト【白兎の騎士】様のご登場だ」

ローズを誰よりも早く、「ソーマ・ファミリア」の団員から守ったその姿からベルの異名は増えており、そう呼ばれた。

「おはよう、ローズさん」

「今日は随分と遅かったわね、おはよう……ベル」

ローズへ挨拶しに行くとローズは苦笑しながら、ベルに挨拶し、彼の頭を撫でる。

「(本当に昨日は助けてくれた事もそうだけありがとう、色々ありがとう、ベル)」

「んふ……ど、どういたしまして」

昨夜、「ソーマ・ファミリア」の『酒蔵』を襲ったのはベルであると理解しているローズは自分を助けてくれた事も含めて礼を言いながら、可愛がり甘やかしていく。

「おお、なんと可愛らしい兎ではないか」

「はぶッ、う、うむううッ!!」

飼ひ兎と化したベルを突如、身長は一七一?程であり褐色の肌、黒髪を後ろに結び、秀

麗な顔立ちで赤眼だが左目に眼帯をしたグラマーなスタイルの女性でハーフトワーフ。

極東産の和装と大陸産の洋装を組み合わせた格好、漆黒の鞆に収まる太刀を腰に納めている彼女はヴェルフが所属する「ヘファイストス・ファミリア」の団長であり、鍛冶師の世界においては神の力抜きに下界の誰よりも並ぶことが出来ない程の『神業』を有するヘファイストスを除いて最高の腕を持つ鍛冶師であり、冒険者としてもL.V. 5の第一級冒険者と実力者である椿・コルブランドだ。

「ふふふ、お主が噂の兎だな？ 本当に可愛いがり甲斐がある……」

「う、うああ……」

椿はベルを抱き締めながら髪やら頬やらを撫でていき、蕩けていく様子を楽しんでいくのだった。

そうして、すっかりベルを気に入った椿はベルのダンジョン探索への同行を申し出、ベルはそれを受け入れダンジョンのあるバベルへと向かうのであった……。

二十話

ダンジョン探索を進めるに冒険者にとつて、最早なくてはならない程の規模に達した補給基地であり、中継拠点である『リヴィラの街』。それはモンスターが産出されない安全階層たる18階層に創設されている。

とはいえ、モンスターが産出されないだけであつて下の階層や上の階層からモンスターがこの階層へとやってきて『街』を襲撃するなどの『異常事態』はままたつた。

実際、今の『リヴィラの街』は三百三十四代目、過去から今までで三百三十三回壊滅していた。それでもこの階層に足を踏み入れて『リヴィラ』を利用する者は多く居るし、その需要から居を構えて生計を立てる者も多く居る。

壊滅しようと再建すればいいだけであり、再建するだけの価値が『リヴィラの街』にはあるのだから……。

そんな『リヴィラの街』だが今日、とある事件が発生した。

『怪物祭』までの数日間、ダンジョン探索していたベルも利用した『ヴィリーの宿』でどうも『冒険者依頼』により、正体を隠していた「ガネーシャ・ファミリア」の中でもそ

れなりの実力者であるハシャーナ・ドルリアが持っていた何らかの品を狙って近づいた。これまた、顔を隠した謎の女性によって殺されたのである。

ハシャーナの死体は顔も分からぬ程に破壊されていたが、部屋を荒らした様子からハシャーナが持っていた品を女は手に入れられなかったようでもあった。

それらを掴んだのは『リヴィラ』に立ち寄ったオラリオの中でも最高位の派閥である「ロキ・ファミリア」の団長、フィンに副団長のリヴェリア、その弟子のレフィーヤ、幹部のアイズとティオネとティオナである。

ともかく、そうしてフィンたちの主導の元、リヴィラの封鎖がされ取り調べなどが行われたが……。

『オオオオオッ』

突如としてそれはリヴィラに現れた。

オラリオでの『怪物祭』でも現れた食人花の群れが破鐘の咆哮を上げて湖畔より、湖畔に浮かぶ島に建てられたリヴィラに対し、襲撃を始めたのだ。

「アイズとレフィーヤが居ない……まあ、良い。ティオネ、ティオナ彼らを守れ」

すぐさまフィンは指示を出して、自分の部下と共にモンスターの排除に取り掛かっ

た。

「このタイミングで襲撃とは……嫌な予感がするな」

「ああ、全くもって出来過ぎてているよ」

リヴェリアとそんな話をしながら、食人花を相手するフィン。

フィンたちは実力的にも食人花を楽に蹴散らしていった（ティオネは二刀の短湾刀、ティオナは大双刃とどつちも武器を持ってきている）がほかの冒険者はそうでもない。

モンスターの襲撃にパニックになったり、なすすべなくやられたりと犠牲者も出始める。

「ち、畜生。こんな事なら殺人が起こったって時に帰れば良かったぜ!!」

そんな中で『リヴェラの街』を拠点としている如何にも荒くれ者と言った風貌の冒険者である「オグマ・ファミリア」所属のモルド・ラトローがぼやきながらも必死で食人花から逃げる。

「今更、遅いだろうがよおおッ!!」

「くっそおおおッ!!」

取り巻きのガイル・インディアとスコット・オールズも必死に食人花から逃亡するも触手が彼らへと向かい……。

『う、うわあああッ!?!』

モルドたちが蹂躪されようとしたその瞬間……。

「【アルカディア・ベル】!!」

楽園からの鐘音を連想させる至高の音が鳴り響き、それが時間の流れさえも虜とし、緩慢なものへと変えていく。

そうして……。

「遅れてすまない……お詫びといっちゃあなんだが、後は任せてくれ」

緩慢な世界で唯一、俊敏に動くことを許されたベルが剣閃を舞わながら食人花を一掃したと同時に魔法を解除した事で世界は正常なそれへと修正される。モルドたちからすれば食人花の斬滅とベルが声をかけたのはほぼ同時の出来事となっていた。

『は、はい』

英雄のような雰囲気を生しながら、告げるベルにモルドたちは『この少年ならば任せられる』と確信しつつ、頷いた。

「それじゃあ、行つてくる……【楽園の鐘よ、福音を鳴らせ】」

ベルは超短文詠唱すると共に白色に発光する魔法円を展開しつつ、そこに光粒を収束していき鐘の音を鳴らしながら、収束による光の量や鐘の音を強くしていく。

【英雄求道】によるチャージを始めたのだ。

『オオオオオオツ!!』

そうして、強い魔力を放つベルに対し食人花の群れが殺到し始める。

「ああ、そうだ。追って来いよ。お前らの殺し方はもうとつくに出来上がっているんだからな」

オラリオで戦った際、食人花は魔力に反応するという性質も掴んでいたのでベルはそれを逆に利用したのだ。無論、触手による攻撃や直接咀嚼しようと食人花はあの手、この手で攻撃してきたもののしかし、超速であり、超高機動の動きをもつて絶対回避していき、食人花を誘導。

そうして……。

「鐘の音つてのはこう鳴らすんだ。【アルカディア・ベル】!!」

ベルは周辺被害も出ない箇所まで食人花を誘き出すとチャージしていた魔法を解放。

『アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

ベルより放たれた極大の『福音』——鐘の音の如き、轟然たる魔力の叫喚であり音の極撃が空間を震撼させながら、食人花を激しい振動によって攪拌しながら肉体の内外を破壊し、消滅させた。

「ベル様はどんどん、強くなりますね」

「ふふ、ますます英雄らしくて素敵です」

「兎の如く、愛らしいのに戦うとなると本当に速く、そして強いな……最も力を発揮するのは誰かを助ける時とは……ふふふ、ますますもって気に入ったぞ、ベル」

先に向かったベルに追い付いたリリルカにそして、彼の意思を組んで追い付いた後に負傷者の治療を始めようとするヘイズ、今日出会ったばかりのベルの戦い振りをずっと楽しんでいた椿がそれぞれ、見惚れながら称賛した。

「……成程、確かに彼は本物だ……でも、あの魔法は……まさか……」

フィンも又、ロキたちから聞かされたベルのそれと実際のそれを比べても英雄と評するに十分だと思い、更には高揚までさせられながらもベルが使った魔法について考える。

何故なら、鐘の音で相手を破壊する魔法を彼は知っていたからだ。

「(ベル・クラネル……君は一体……)」

リヴェリアも又、自分の知っている魔導士の魔法と酷似している魔法を使ったベルに對し、内心で問いかけた。

「うわあ、鐘の音の魔法って凄ーい。ベルって名前にぴったりの魔法だね」
 「破壊力がえげつなさすぎるわね……頼りになるけど」

テイオナは呑気にベルを讚え、テイオネは苦笑しながら頼りになる助っ人の登場を喜ぶ。

しかし、事態は好転したと思われたのも束の間……。

『オオオオオオオオオオオオッ!!』

無貌ながらも体型自体は女体の上半身、下半身は食人花そのものが連なってるまるで蛸にも見え、全体的な感想としては半人半蛸ススキュラを思わせる巨躯のモンスターが突如、姿を現した。

「まったく、もう『怪物祭』は終わってるってのによお……まあ、ちょうど良い。こいつを使わせてもらおう」

ベルは巨躯のモンスターに対し、苦笑して見せると……。

「【楽園の鐘よ、鳴り響け】」

詠唱すると共に魔法円を展開、するとベルが使う魔法効果による強制チャージが発動する。それと共にベルは巨躯のモンスターへと駆け跳ねていったのだ……。

二十一話

オラリオに存在する各「ファミリア」の中でも都市を管轄する組織、ギルドと密接的な関係にある「ガネーシャ・ファミリア」の幹部、ハシャーナが殺害された『リヴィラの街』に「ロキ・ファミリア」のフィンにリヴェリア、アイズにティオネにティオナ、レフィーヤが立ち寄ったのは偶然であった。

少し前に「ロキ・ファミリア」が行ったダンジョンの遠征にてフィンたちは強烈な酸を身に宿し、更には吐き出す新種の芋虫型のモンスターと遭遇してしまい、多くの武器を溶かされる事になった。

特にティオナは自分の愛剣である二つの大剣を一つに繋いだ大双刃ウルガを溶かされてしまい、現在使っているのはまるごと造らせたばかりの奴である。

アイズの愛剣は壊れない特性を持つ『不壊属性デュランダル』のものだが、それでも整備を必要とするほどには酸によって摩耗させられた。

そうした事からティオナもアイズも多額の武器の製造代、整備代が必要であった事からダンジョン探索をする事に決め、レフィーヤはその付き添いであり、ティオネは最初、

断ろうとするがそれを見越してティオナは姉が愛してやまない団長であるフィンと偶々、傍で仕事を手伝っていたリヴェリアを誘った事で全員で六人のパーティーを組み、ダンジョン探索に向かったのである。

因みにその際、ティオナはベルを誘おうとアイズと共に『青の薬舗』へと向かったのだが、ベルは夜遅くまで必要な事をしていたとの事で就寝中だとミアハ達から聞いたので残念がりながら、商品だけ買って店を去っていたりする。

ともかく、「ロキ・ファミリア」の眷属たちはそうして、『リヴェラの街』に寄った事でハシャーナ殺害のそれと出くわしたのである。

『リヴェラの街』を封鎖しながら、中央の広場へとフィン主導の元、全冒険者を集めて取り調べをしていると女性人気の高いフィンに取り調べを積極的に望む女性冒険者達とそれを阻むティオナによる騒動もあって中々に混沌とした状況が出来上がったがそれを幸いに逃げようとする者をアイズとレフィーヤが発見。

取り押さえるべく、後を追えば尋常じやなく怯えられたのでその者に話を聞く。

そうして浅黒い肌に身軽そうな体格の犬人の女性で「ヘルメス・ファミリア」の冒険者であるルルネ・ルーイはハシャーナが取ってきた物を回収するようにという依頼があつた事を話し出した。

依頼者は黒衣であり、影を体現したような怪し気の風貌だったが、依頼料に前金が破

格だったからこそ引き受け、順調に依頼の品を受け取ったがその直後にハシャーナが殺された事で自分も危ないと悟り、逃げようとしたのだという。

ともかく、そのハシャーナから受け取った品をアイズたちが確認すると緑色の宝玉の中に雌の異形の胎児がいるという気味悪すぎる物であり、何故かそれを目にしたアイズは強い不快感を覚えた。

レフィーヤが代わりに宝玉を持ち、ルルネも連れてフィンの元に戻ろうとしたとき、食人花の群れがリヴィラに殺到し……そうして、アイズたちはハシャーナを殺しその顔の皮を剥いで被る事で正体を偽っていた謎の赤髪に緑の瞳の女性と遭遇。

モンスターの子をそのまま長剣にしたそれによる剣術と拳と足に用る猛烈な戦闘技術を有する女性は凄まじく強く、アイズも押され始めたのでやむを得ず、風の魔法を使つて形勢を引き戻せば……。

「そうか、お前が『アリア』か」

自分の母親の名前を出したので動揺していると……。

『アアアアアッ!!』

宝玉より胎児がアイズの魔法による風に反応して産声を上げると食人花の死体へと素早い動きで迫り、寄生。そのまま巨大化しながら食人花の群れを取り込んでいき変貌を遂げて半人半蛸のような巨軀の怪物へと進化。

その最中にも猛進しつつ、アイズへと迫っていきアイズはレフィーヤとルルネを抱えるようにして逃走。

「ええい、全て台無しだ」

忌々しげに女性も又、その場から逃走する。

そうして、アイズが怪物に追いかけられながら逃走していると……。

「あれは俺が片付ける。アイズさんはそのまま行けッ!!」

「ベルッ!? 分かった!!」

強烈な白い光を魔法円に収束しながら、荘厳な大鐘楼グラントドベルの音を鳴らし続けつつ、超速で駆け跳ねるベルとすれ違いざまに声をかけられたので応じる。

『オオオオオオオッ』

対して自分へと迫ってきたベルが発する超絶なる魔力の高まりに死を予感させられた巨躯の怪物はベルをとにかく早く殺そうと必死で攻撃するも……。

「そんな程度で俺はやられねえよ」

ベルは全ての攻撃を長剣で切り払い、あるいは回避していく。

『オアアアアアッ』

「だから、雑なんだよ……そして、残念。時間切れだ」

焦るあまり、単調になった怪物の攻撃を切り払い、回避しきつたベルは告げると同時、魔法円が今までもよりも強烈な光を放ち、大鐘楼の音も一度、大きく鳴らされる。

魔法発動のためのチャージが完了したのである。

「【アルカディア・ベル】!!」

そうしてベルが遥か頭上を示すと共に純白にして荘厳な『鐘』が顕現、それが一度揺らいだ瞬間、超絶なる破轟であり、音の絶撃が放たれる。

そうして巻き起こるは超高压、超振動による超発電であり、爆轟である。大輪の炎と衝撃波も追加した攻撃が巨躯の怪物の断末魔すら呑み込んでその身を蹂躪し尽くすと共に滅した。

「ふう……強烈だが、消耗きついな」

怪物に対して使ったものはベルの「アルカディア・ベル」による最大攻撃によるもの。強制チャージによる全体力に全魔力、潜在値まで含んだLV、と全アビリティを魔法威力に加算して放たれる代物。

しかし、消耗もそうだがこの最大攻撃は一行のみにして、回復間隔はインターバル二十四時間という代償も存在する。

気を抜けば倒れそうになる身体に鞭打って耐え、回復薬をベルは飲み始めた。

『……』

そんなベルが巨躯の怪物に対し、放った超圧倒的な攻撃魔法でありながら、守られる者たちからすればまるで救いや奇跡を与えるかのような鐘の音に冒険者たちは心打ち震わされ……。

「な、なんだあいつは……く……今日には本当に最悪な事ばかりだ」

アイズを狙い始めた赤髪の女性はベルの魔法の威力に恐怖を覚え、更にアイズの周囲に仲間だと思われる人物が集まった事でこれ以上、活動する事は出来ないと判断し、この場から立ち去っていったのだった……。

二十二話

「ガネーシャ・ファミアリア」の幹部であるハシャーナの殺害をし、タイミング的に食人花を操ったと思われる女性とそして女性が操っただろう食人花によるリヴィラ襲撃はベルの奮戦によつて事態は沈静化した。

そして、ベルはといえば……。

「ベル様、良く頑張りました」

「種族も派閥も関係なく、皆を助けるために必死で戦うベルは格好良くて良い子ですね」
「いやはや、今日は随分と素晴らしい勇姿を見せてくれたな。ありがとう、ベル」

「ふやあ……ちよ、ふ……」

事態が鎮静化し、一先ず負傷者の救護（大体はヘイズの活躍により解決）、そして地上に撤収する事が決まった中でベルはリリルカにヘイズ、椿がベルの頭や頬に首と可愛がり始めていく……。

「今回も皆を守ってくれたね、ありがとうベル……魔法、凄かったよ」

「うん、本当に凄かったね。鐘みたいな音がしたけど綺麗だったし」

「ええ、随分とんでもなかったわね。魔導士としても才能あるって事かしら」

アイズにテイオナ、テイオネもリルル力がするベルの可愛がりに加わっていく。

「ふ……………ん……………最近、知った事だが、どうも俺の母の姉の名のある魔導士だったようだ……………本人は死んでるし、俺も知ったのは伝聞みたいなものだからその本人、良く知らないんだけどな」

「……………そうか、辛い事を思い出させたな。それと良くやつてくれた」

「……………協力ありがとうございました」

魔法及びアルフィアの事について語るベルにリヴェリアは色々と感情を窺わせる表情を浮かべながら、ベルを抱き締めて可愛がっていく。レフィーヤもそれに加わった。

「お前がローリエの言ってたベルだな……………確かに格好良いし、可愛いな。ともかく、苦労かけて悪かった」

ルルネも又、ベルをリルル力達に倣って可愛がり始めた。

「む……………あ……………も、もう良いぞ」

『まあまあ、もうちよつともうちよつと』

ベルの意見はやんわりと断られ、しばらくベルは女性陣に可愛がられ、蕩けさせられ続けた。

そうした面はありつつもリヴェラの街にて怒涛の奮戦を見せつけ、英雄の如く戦った

ベルは皆から評価され、感謝も告げられたりした。

こうして、ダンジョンから『本拠』へと帰れば……。

「ふふ、今日も誰かを助けるために頑張ったんでしょ。ベルは偉いね」

「ええ、本当にベルは偉いですよ。だからたっぷりご褒美を上げます」

「い、いやもう十分に……うあああ……」

もはや、恒例の如くベルはナーザとリリによつて性的な快樂までも与えられてとことん愛され尽くし、蕩かされ尽くしたのであつた……。

二

『リヴィラの街』での事件の翌日、ベルは『リヴィラの街』の復興を手伝うためにリリルカと共に行って、リヴィラの元締めであるポールスから『なんて感心な小僧なんだ。とことん気に入ったぜ』と好感抱かれたりしながら復興を手伝うと……。

『乾杯ー!!』

リリルカと共にダンジョンから帰ってきたベルは事前のミアハ達との打ち合わせ通

り、『豊穡の女主人』にて食事を始めた。因みにバイトが休暇中のヘスティアも一緒にあ
る。

「ふふふ、ありがとうございます。ベルさん。食事しに来てくれて」

「楽しんでいってください、クラネルさん」

「あう、ん……どうとう、リユーさんまで加わったな」

シルとリユーが喜び、ベルを飼い兔のように可愛がり、ベルを蕩かせる。

「ベル君は可愛がりがありすぎるからね」

「最強の英雄かもしれないけど、最強の癒し兔だよね」

「ええ、まったく」

ヘスティアもナーザもリルルカもベルを可愛がる。隙や機会あらば彼女たちはベ
ルを可愛がるのである。

ともかく、楽しい食事の時間を過ごそうとしていたベル達だが……。

「なるほど、オラリオに女性や女神に可愛がられて調子に乗っている『兔』が居るって聞
いたが本当だったようだな」

何処かの派閥の冒険者がベルへと野次を飛ばす。

「ああ、しかもLV・4に【ランクアップ】したとかふざけた事抜かしてるようだぜ」

「どうやって、ギルドを抱き込んだのやら」

次から次へと文句を飛ばす。とはいえ、此処は酒場であり派閥間の敵対はなるべく避ける必要があるのでベル達は表情や心情はともかく、無視していた。

ベル本人は勿論、『まあこういうのもあるか』と冷静であったが……。

「へ、それに犬人の女性は店番ばつかだよな。きつとダンジョンにも行けない腰抜けなんだ」

「ああ、それにそっちの主神様は偽善ぶって良く回復薬を只で配ってるよな。どうせ、粗悪品だろうが」

「……もう、良い」

ナーザ達の悪口を言い始めた時点でベルは立ち上がり、野次を飛ばしてきた冒険者たちの元へと行く。

「これ以上はこつちにとつて良い風評被害だ。文句があるなら、直接言いに来いよ。何なら『戦争遊戯』^{ウォーゲーム}でもするか？ 俺一人とお前たち全員の決闘だな」

「なんだと……：：：：我が「アポロン・ファミリア」を舐めているのか？」

ベル達に対し、野次を飛ばした「アポロン・ファミリア」の団長で品良く纏められた茶髪の髪にきめ細かい色白の肌、深い海のような碧眼、金属のイヤリングなど冒険者装身具を身に着けた美青年のヒューマンであるヒューアキントス・クリオが立ち上がり、ベルを睨みつける。

「喧嘩を売ってきたのはそつちが先だろう。ぶつちやけ、このままやり合っても良いんだが此処は酒場だ。店に迷惑かける訳にも行かないから、それならいつそ正式な派閥による戦いをしようって事だ。それとも、口だけなのか？」

「……それはそつちだろう。兎風情が良くも大口を……言っておくが、今更言葉は取り消させんで」

「取り消さねえよ。正式な話はそつちの主神、アポロン様を交えてそつちの本拠でしよう……あと、仲介としてヘルメス様を呼びたいんだが、良いよな？」

「……思ったよりは礼儀を弁えているようだな。ああ、それで良い……今更、後悔しても遅いぞ」

「それはどつちの話だろうな」

そうして睨み合うとヒュアキントスは『騒がせた』とだけ言って、食事の代金を自分たちの席の上に置いて去っていく。そんなヒュアキントスの背にシルやヘステイアなどは舌を出していたりしたが……。

ヒュアキントスが去るとベルはミアハ達の元へ戻り……。

「あそこまで言われちゃ、俺も我慢ならねえよ。悪いがミアハ様……暴れさせてくれ」

「……ああ、ベルのやりたいようにやれ。それと私達のためにありがとう」

「私たちのために色々と考えて動いてくれる、そんな優しいベルが好きだよ」

「ベル様は何も悪くありません」

「そうだよ、ベル君は悪くないしあんなに回りくどく悪口言うなんてアポロンの奴う……」

「店の事を考えてくれてありがとうございます、ベルさん」

「約束通り、私で協力出来る事ならなんでもさせていただきます、クラネルさん」

ミアハ達はベルに声をかけ、そうして食事を再開したのであった……。

二十三話

『迷宮都市』であるオラリオが西のメインストリートを越えた第六区画、西と南西の大通りに挟まれた区域には背の高い鉄柵、広々とした植栽豊かな前庭、巨大な石造りの屋敷がある。

門に飾られた弓矢と太陽のエンブレムが示すのはこの屋敷こそ「アポロン・ファミリア」の本拠であるという証明だ。

「ふふふ……そうだったか。まさかベル君の方から『戦争遊戯』ウォーゲームを挑んできたところか、一人でお前たち全員を相手取る気とは……ああ、可愛らしい兎のような姿なのになんて男らしい。流石だ」

そして、自身の本拠の神室で団長であるヒュアキントスからベルとの話を聞いていたのは太陽の光が凝縮したかのような金髪で端麗な容貌、頭の上には緑葉を備える月桂樹の冠をした男神であるアポロン。

彼の恋愛における守備範囲は男女関係無し（どちらかというと男より）ととても広い神であり、見初めた相手を必ず手に入れようとする執念深さを持っている。

そんな彼は『怪物祭』にて食人花の群れと戦う際に見た目は愛嬌のある兎のようなベルが英雄そのものな勇姿を見せた事で彼のもうバグリ、絶対に自分のものにするという心情となった。

まあ、今までも例え他派閥であつても自分が見初めたなら様々な手段を講じて引き抜いて、手に入れてきたのだが今回はいつもより、何倍もベルに対してお熱なのである。「絶対に私の物にしてやるからな、ベル君。そしてたつぷりと可愛がつてやろう。ふはははははっ!!」

「ちっ……」

涎を垂らしかねない程に顔を歪めながら、恍惚な表情で笑うアポロン。それに対し、アポロンに深い忠誠と敬愛を捧げているヒュアキントスは面白くないと舌打ちを鳴らす。

そんな一柱と一人とは別に……。

「ちくしよーっ!!まさかアポロン様がベルの姿を見ちまうなんてよお……」

「案の定、アポロン様が見初めちゃったね。タイミングが悪いというか、なんというか」「うう、ベル様に迷惑かけちゃった」

『怪物祭』の前日までの間にダンジョンにて助けられ、その後、行動を共にしたルアンに

ダフネ、カサンドラ達が密かに集まって会議していた。

彼ら、彼女らはベルの見た目がアポロンの好みだと感付いていたのであるべく、ベルの情報を手に入れないように、あるいは姿を目にしないようにしようとしたが行動する前に『怪物祭』でアポロンがベルを見にしまい、こうなってしまう。

「……アポロン様の事は好きだけだよ、だからって恩人に対して仇を返すような真似はしたくねえよ」

「命を助けられたしね」

「うん、私達もいざとなれば」

そうして、最終的にとある覚悟と決意をしたのであった……。

二

『豊穡の女主人』での食事中に「アポロン・ファミリア」の団長であるヒュアキントスに挑発され、自身の「ファミリア」としての体裁やら評判、向こうの権威などを考えたベルは敢えて挑発に乗り、むしろ向こうが喜ぶように『戦争遊戯』まで申し込んだ。

有名な酒場での一件が故かこの話はしつかり、ヘルメスも挿んでおり、此方が行くまでも無くヘルメスは『青の薬舗』までやってきた。

そうして、ヘルメスの案内の元、ベルとミアハは「アポロン・ファミリア」の本拠へと行き……。

「お初にお目にかかります。アポロン様。もう、貴方の眷属で団長であるヒュアキントスさんからは聞いてるでしょうが、俺一人と貴方の眷属全員での『戦争遊戯』を申し込みに来ました」

「ああ、聞いているしそちらが挑むというなら、受けて立つよ。私の眷属が勝てばベル君、君を頂く」

「ではベルが勝つたなら、私たちの言う事をなんでも叶えてもらおうとしようか」

アポロンに対し、ミアハが言い、どちらも相手の要望を承諾する。

「では此処に神双方の合意はなった事を仲介としてこの俺、ヘルメスが宣言しよう。諸君、戦争遊戯だ!!」

『いえええええええいっ!!』

そうしてヘルメスの宣言と共に夜のうちからアポロンの屋敷周辺で潜み、スタンバっていた男神に女神が歓声を上げる。

娯楽好きな神々ゆえにそうした前兆があればすぐに食いつくのが神の特徴なのである。

こうして、舞台はとある軍神が率いる軍事国家との戦争で良く戦場となるオラリオか

ら離れた真東の広野であり、期間は一週間後と決まった。

そして、『戦争遊戯』までの一週間……ベルは……。

「他派閥ならともかく、無所属やそれに近い立場の者の支援を受けるのは問題ないからな」

冒険者としては引退の身であり、しかしL.V. 4という実力者。更には他にもL.V. 5でいうならリユーと同じである店員が三人、一番助力を望めないにしてもL.V. 6であるミアが居る『豊穡の女主人』へとベルは鍛錬に付き合ってもらおうという取引の為に足を運ぶのであった……。

二十四話

一週間後の「アポロン・ファミリア」との戦争遊戯に向け、ベルは鍛錬をすることにし、個人では限界があるので無所属の冒険者であり自分と同じL.V. 4が四人もいる『豊穡の女主人』にて鍛錬を手伝って貰うために店へと向かった。

そして、女将であるミアと交渉を開始すると……。

「普段ならお断りだけど、うちの店で騒ぎを起こそうとしゃがったしねえ……それにやり方も気に入らないし良いだろう。ただし、うちの娘たちの力を借りるといふならあなたの力も借してもらおうよ」

ミアは考え込みながらもベルとの交渉に応じ、ベルに一週間の間、泊まり込みにさせての店の手伝いをさせる、早朝やカフェから酒場へと移行する間の時間などそうした少しの時間だけ、リユーと短い栗色の髪のヒューマンの女性であるルノア・ファウスト、黒い毛並みの猫人の女性であるクロエ・ロロにこちらは茶色の毛並みの猫人の女性であるアーニャ・フロームルとの鍛錬時間を設ける事を約束してくれた。

もつともベルの働き次第にもよるとの事だが……。

「勿論だ。交渉成立してもらえて嬉しいよ」

「ふふ、そういう事ならよろしくお願ひしますね。ベルさん」

「クラネルさん、私は喜んで貴方の助けになります」

「あいつらは私も気に入らないし、鍛錬には喜んで付き合おうよ。その分、私たちの仕事をばんばん手伝ってもらおうけどね」

「私も少年の事はお気に入りだから、喜んで味方になるミヤ」

「よろしくニヤ」

そうして、話を聞いていたシル達もベルに挨拶して彼を迎え入れた。早速、どれだけベルが働けるかというのを試すためもあり、まずは仕事の手伝いからという事で仕事着に着替える事になったが……。

「おい、なんだこれは？」

ベルの目の前には女物の制服とそして白色の長髪であるウイグがあり、いかにも女装しろと言わんばかりのものをシルから渡され戸惑ったのである。

「なについて、うちの仕事着ですよ。いやあ、こういう時のために用意していて良かったです」

自分の念願が叶ったとばかりにシルは喜びながら、言う。

「こういう時って、いずれはさせるつもりだったのかよ……良いだろう、こうなりや全力だ。見てろ」

ベルは溜息を吐きながらも覚悟を決め……。

「今日から新人として働くことになったリンです。皆さん、よろしく願います☆」
『リンちゃん、可愛いいいッ!!』

元々、女性寄りの顔をしている事もあって、女装が似合うベルは新人店員のリンとしてカフェとしての経営をしている『豊穰の女主人』へと訪れた客へ可愛らしい仕草をしながら自己紹介をする。

「注文、ありがとうございます。私、とても嬉しいです」

「お、おう。リンちゃんに喜んでもらえて俺も嬉しいよ」

更には客、一人一人にあざとく可愛らしい仕草をしながら対応をするのと……。

「ほらほら、シル先輩。お客様、またのご来店、お待ちしております」

「え、あ、あの……」

更にはシルも巻き込んだりして、客の人気を勝ち取り、『豊穰の女主人』は普段よりも

多くの客を招き、一時間後にはカフェとして用意している在庫が切れる程の事になった。

「ふふ、やるじゃないか」

「うう、幾らなんでもやりすぎですよ……」

「とても可愛らしいです」

「あんな演技出来たんだ」

「とっても可愛くて最高ニヤ」

「良くやったニヤ」

ミアたちはベルの働きに彼に翻弄されたシル以外は大変、満足したのであった……。

そうして、酒場としての経営準備をするまでの間、約束通りリユーにルノア、クロエにアーニヤとの鍛錬を店の中庭にて始める。

「ふっ!!」

「やあっ!!」

「しっ!!」

「ミヤアアツ」

リユーは疾風の化身となりながら、剣舞を披露し、ルノアは拳を唸らせ、クロエは静かに動きながら暗剣を閃かせ、アーニヤは豪快に槍を振るう。

一つ一つが並のモンスターや冒険者ならば即座に倒される必殺の一撃であるが……。「やっぱり、鍛錬するならこれくらいじゃなきゃなあっ!!」

長剣による剣閃にて覆し、更には平行詠唱の鍛錬とばかりに時間を弛緩させる効果の【アルカディア・ベル】も度々、使う事でリユー達の激闘に臨むのであった。

そうして、夕方は又、リンとして働き、またもいつもより短い時間で1日の営業を終える程の成果を出すとまた、リユー達と鍛錬をし、それを終わるとミアたちの最後に浴室に入って、身を洗いそうして、浴室の掃除もする。

後は寝るだけだったのだが……。

「ふふ、ベルさん。お仕事ご苦労様です。ちゅ」

「う、あ……んむう……」

シルがベルに用意された部屋に入ると声をかけ、口づけする。更には抱き締めながら頭や頬や顔と愛撫やマッサージを始め、ベルを蕩かせ始めた。

「んふふ、とても可愛らしいです」

「女性として振る舞えば可愛くて、戦えば強いなんて……反則じゃない?」

「そういうところも含めてミヤー好みにや」

「年上のミヤー達が可愛がつてやるから感謝するミヤ」

更にリユーにルノア、クロエにアーニヤもシルに続いてベルを可愛がり始め……。

「う、うあああああつ!!」

甘やかされ、可愛がられ、更には……。

「良いですよ、そのまま蕩けてくださいベルさん、そんなあなたの姿を私はもつと見たいですから」

「蕩ける貴方の姿も又、良い……」

「普段はここまでしないんだけど、うん、私も虜になっちゃったかな」

「もつと、お姉さんが気持ち良くしてあげる」

「どんどん甘えるニヤ」

「くあああああつ!!」

性的な快樂も与えられ、ベルはシル達に蕩かされ尽くしたのであった……。

二十五話

曉闇になろうとする時間帯、ベル・クラネルが「アポロン・ファミリア」との戦争遊戯まで宿泊している『豊穣の女主人』のベルの部屋……。

「気持ち良さそうに寝やがって……」

昨夜、シルにリユー、ルノアにクロエにアーニヤたちにより可愛がられ、甘やかされ、性的な快樂も与えられて蕩かされたベルは寝台の上で目覚めれば隣にシルが居て抱き締められていた。

凄く気持ち良さそうに眠っているシルに苦笑を浮かべながら、彼女を起こさないようにゆっくりと巧妙に抜け出し、一人での鍛錬のために着替えて長剣も持つ。

「お付き合います、クラネルさん」

部屋を出て広い中庭へと行けば既に愛用の木刀を手にしたりユー・リオンが居た。

彼女は個人的に元冒険者であった習慣から早朝より早い時間帯から自主鍛錬をしている事もあって、こうした時間に起きていて、ベルが来るようなら鍛錬に付き合おうとしていたのだ。

「流石にこんな早くから鍛錬に付き合ってもらうつもりじゃなかったんだが……好意に甘えさせてもらうよ」

「ええ、それと昨日は大変可愛らしかったですよ」

「……それ、言う必要があるか？」

微笑みながら言ってくるリユーに恥ずかしさから顔を赤に染めつつ、言う。

ともかく、二人はある程度の距離を取って長剣に木刀を構え合い……。

「しっ!!」

「ふっ!!」

お互い『敏捷』に優れた能力を活かした超速で周囲を縦横無尽に動き回りながら、剣閃乱舞の応酬を朝日が昇るまで繰り返した。

そして……。

「う、あ、ちよ、ちよつと待っていてくれ……うああつ」

「しっかりと綺麗にしてあげますよ、ベルさん」

「もつと私達に甘えてください、クラネルさん」

鍛錬を止めると離れたところで見ていたシルの提案により、彼女とリユーによつてベルは浴室で体を洗われつつもマッサージされたり、性的な快楽も与えられてまたも蕩か

されたのであった。

「嬉しいし、気持ち良いんだが……なんで、大体会う女性たちは同じような事をしてくるんだ」

積極的に可愛がられ、甘やかされて蕩かしていく女性たちが多い事にベルは戸惑い……。

「う、く、も、もう良い、あ……」

「遠慮しないでください、ベルさん。お姉さんたちがしつかりと世話してあげますから……ああ、でもお姉ちゃんって呼んで欲しいなあ」

「そうですね、そうしてもらいましょうか」

「な、そ、それは……く、お、んんくうっ!!」

姉呼びを迫られつつ、二人にもどかし気な気持ち良さを与えられる。

「……も、もう良いよ。シル……お姉ちゃん。リユ……お姉ちゃん……こ、これで良いだろ」

「今回は良しとしてあげましょう」

「クラネルさんは素直で良いヒューマンです」

「うあああつ!!」

そうして、シルとリユは奉仕によつてベルを蕩かせ、骨抜きにしたのであった……。

二

ベルは『豊穰の女主人』においては白い長髪のウイグと女性ものの制服によつて女装させられている。なのでリンという別人として振る舞つており……今日も早朝から多くの客足を見越した買い出しを行なつた後、カフェとして開店した店にて……。

「皆さん、今日もご来店ありがとうございます!!」

『ウオオオオオ、リンちゃん!!』

あざとく可愛らしい振る舞いで接客するリンに客たちは夢中となつていく。

そんな中で……。

「女装したベル……すつごく可愛い……」

「ベル様、あんな演技力を……なにより可愛いです」

「うん、ベル君滅茶苦茶可愛いよ」

「もつと色んな女装してもらいたいですねえ……」

「ベル君の新しい魅力が……」

「元々、女顔とは思ってたけど……良いわね」

ベルから『豊穡の女主人』で住み込み、働きながら鍛錬できるかを交渉しに行く事を知っていたナーアザにリリ、ヘスティア。

リンの噂が気になってこの店に駆け寄ったヘイズにローリエ、ローズらも店を訪れ、色々と考えに耽りながら、リンとして振る舞うベルの姿を楽しむ。

そうして、今回も又カフェとして営業する分の店の在庫が切れるという成果をベルは出したのだ。

すると……。

「本当はここまで、やるつもりはなかったが……予想以上に働いてくれからねえ、借りは返してやるよ」

現在は半脱退の身だがかつては「フレイヤ・ファミリア」の団長であり、L.V. 6という強豪であったミアがベルとリユー達の鍛錬に現役時代の相棒であり、巨大な斧と見紛う程の鋼鉄のスコップを持って加わる。

「坊主、ここまでサービスするんだ絶対、勝つんだよ。それとこれからも時間があれば店を手伝ってもらおうか。どうだい？」

「それで実力者に鍛錬付き合ってもらえるなら、安いもんだ」

「ふ、そう言ってくれると思ったよ。それじゃ、あんた達……坊主の力になるよう、追

込み続けて鍛え上げるよおおっ!!」

『はい、ミア母さん!!』

そうして、L.V. 6であり凄まじい剛力とタフネス有するミアを中心にリユーにルノアにクロエにアーニヤがベルへと攻めかかる。

団長、それに女将としてしつかりしたミアの指示により、的確に動くリユー達の連携もあつてベルは「ケラウノス・エナジー」によつて自分を強化しながらも常に追い込まれていく。

「流石にL.V. 6を相手にするとキツイな、やっぱり」

「どうした、この程度かい?」

「まさか、ここからが本番だ」

意志の炎を燃やしてベルは力を絞り上げつつ、死闘の如き鍛錬に挑む。

「やっぱり、綺麗ですベルさん」

離れた場所でベルの勇姿を見ながら、シルは呟いていた。

そうして……酒場としての営業も終わり、鍛錬も終わった後で……。

「今日もお疲れさまでした、ベルさん」

「う、ん、あ、ふああ……」

「今日も沢山の客の人気者になってましたね」

「は、ん、く……ふ、うう」

「まさか、ミア母さんまで鍛錬に付き合いたいと思わせるなんてさ、やるじゃん」

「ん、くう……」

「流石はミャーの見込んだ少年ニヤ」

「ちよ、あ、お、お尻い……」

「白髪頭は大した奴ニヤ」

「うああっ!!」

今夜も又、シルにリユ、ルノアにクロエにアーニヤらによって愛情と快楽を与えられ、蕩けながら蕩かされていくのだった……。

二十六話

時間は人が何をしていようと、何もしていなからうと平等に過ぎていく。

「ミアハ・ファミリア」のベル・クラネルと「アポロン・ファミリア」の全眷属およそ百十名という一対多数で行われる『戦争遊戯』。

幾らベルがLV・4とはいえ「アポロン・ファミリア」の戦力差は圧倒的であり、しかも戦争遊戯まで後一日という今日までになんと「アポロン・ファミリア」の団長であるヒュアキントスはLV・4に「ランクアップ」したのだ。

これにより、ベルの敗北は濃厚となってしまったが……。

「面白くなってきたじゃねえか」

苦難こそ望む所だとヒュアキントスが「ランクアップ」した事を喜んだ。そして、明日は本番なので体を休めると鍛錬は止めて『豊穡の女主人』の店員リンとして最後の働

きをし……。

「鍛錬の方、世話してくれてありがとうよ。協力を無駄にしないよう、絶対に勝利を勝ち取ってくるぜ」

夜の営業を終えてベルは「ミアハ・ファミリア」の本拠に帰り、ミアハに「ステイタス」更新してもらうためミア達に感謝をしつつ、別れの挨拶をする。

「当然さね、うちの方針を曲げてまでたつぷりと協力したんだ。死んでも負けるんじゃないよ」

ミアはそう言い……。

「終わったら此処で祝勝会をしてあげますからね……私もいっぱい、応援していますベルさん」

「ご武運をお祈りしています、ベル……」

「ベルなら絶対勝つけど、私も応援するよ」

「ふふ、勝った後はたつぷりとご褒美あげるニヤ」

「負けたら、許さないから絶対勝つニヤ、ベル」

シルにリユー、ルノアにクロエにアーニヤたちがそれぞれ激励をする。全員、ベルと繋がったり甘やかしまくり、可愛がった関係とあつて親密になり、ベル呼びもするようになった。

「激励ありがとう。祝勝会の準備、頼んだぜ」

そうしてベルは『豊穡の女主人』を去り……。

「ただいま」

『お帰り、ベル』

『青の薬舗』で帰りを待っていたミアハ達がベルを出迎え……。

「……本当にそれで良いのか？」

「ああ、折角の勝負なんだ。なるべくフェアじゃなきゃつまらないからな」

「分かった」

ある会話をしながらステイタス更新をミアハにしてもらい……。

「やつぱり、ベルは向こうでも可愛がられちゃんだね」

「私達も負けてはいられません。ふふ、さあたつぷりとお姉さんたちが可愛がって、甘や

かして癒してあげますよ、ベル」

「う……ま、待て、幾らなんでも明日は戦争遊戯だ。だから……『問答無用』くあああああ
ああっ!!」

ベルの静止は無視され、ぶつちやけ嫉妬もあるナーザとリルルカによつて、悪魔でも自分たちこそ一番、ベルを愛し、可愛がり、甘えさせられる女性だという事を意識とその身を蕩かされながら分分からされていった……。

そうして、朝……前もつてミアハたちが依頼していた馬車によつて『戦争遊戯』の場として選ばれたオラリオから遠く離れた真東の原野であり、【ガネーシャ・ファミリア】によつて戦場として整備された場所。

丘の上では合図を送るために設置された銅鑼の近くに【ガネーシャ・ファミリア】の団員が居て、その団員が見下ろす中……。

少し距離を取つて、一人立ちながら、瞑想しているベルと対する位置では【アポロン・ファミリア】の眷属が陣形を築いて臨戦態勢であり、最奥では団長であるヒュアキント

スが居て、ベルが主神の興味を惹いているためか他の眷属より一番強く敵意を込めた視線を向けていた。

『……………』

只、「アポロン・ファミリア」のルアンにダフネにカサンドラ含めて十人の眷属たちはなにやら、とある覚悟をしているような瞳をしていたが……………。

そうして少しの静寂の後……………開戦の合図として銅鑼の音が戦場へと放たれたのであった……………。

二十七話

ベル一人による「ミアハ・ファミリア」とヒュアキントス他多数の団員による「アポロン・ファミリア」の対決が開始される少し前……。

『迷宮都市オラリオ』で「ファミリア」同士による代理戦争であり、「戦争遊戯」^{ウォーゲーム}が催される場合、それぞれ戦争遊戯を行う両ファミリアの主神に他の派閥の神々もオラリオ中央に建てられている白亜の巨塔が『バベル』にて戦争遊戯を観戦する事となる。

まあ、神々の中には他の市民たちと同じように酒場などで観戦する者や本拠にて眷属と観戦する者もいるが……。

何故、戦争遊戯が行われる戦場に行かずに観戦ができるのかと言えば戦争遊戯の際においてのみ千里眼の能力を有し離れた土地において一部始終を見通せる『神の鏡』という『神の力』を使うことが出来るからだ。

「ふっふっふ、悪いなミアハ。ベル君は頂くぞ」

「そっちなぞ、致命的となる願いをされないように祈っておくのだな」

バベルの三十階にして、普段は『神会』デナトウスという神々が使うための部屋にてアポロンとミアハが軽く言葉をぶつけ合った。

「アポロン、君は下手を打ったよ。まあ自業自得だけどね」

「ドチビの意見に賛同するのは癪やけど、先にご愁傷様とは言っておいたるわ」

ヘスティアにベルの実力を『怪物祭』で、更には以後もダンジョンの宿場街『リヴィラ』で凄まじい魔法を使ったと眷属たちから聞いていたロキがアポロンの敗北が確定したように言う。

因みにロキがこの場にいるのはアポロンが敗北した際に煽るためである。

「それじゃあ、ウラノス。『力』の行使の許可を」

戦争遊戯の仲介であるヘルメスが宙に向かって話しかける事でギルド本部の地下に居るウラノスへと話しかけ、戦争遊戯を観戦するための力の使用を求め、ウラノスが許可を出した事で神々は力を使用する。

そして、オラリオの全ての場所で虚空に浮かぶ『鏡』、円形の窓が無数に出現する。

「始まるようだね」

「ああ、結果は決まっているようなものだがな」

「だね、でもどういふ勝ち方をするのかとか楽しみだよ。アイズもそうでしょ。帰還が

間に合って良かったね」

「ロキ・ファミリア」の本拠にて出現した鏡に映るベルとヒュアキントスたちの様子を見てフィンが呟き、リヴェリアがそれに答えた。

そうして、つい最近までフィンにリヴェリアとアイズとテイオネとテイオナ、レフィーヤとラクタというサポーター要員による七人でダンジョン探索に行っていたがアイズが探索をまだ続けたいと言った事により、アイズはリヴェリアと二人でダンジョンの37階層に残り、階層主と戦った。

そうして、アイズはL.V. 6になったのだ。

少し揶揄うような感じでテイオナがアイズに話しかけたのである。

「うん、本当に良かった」

アイズはそう穏やかな表情で答える。

「まあ、どの程度か見てやるよ」

ベルの実力を知らない者たちは一人で戦うという彼の無謀に言及し、騒ぐ中ベートは黙って鏡からベルの様子を見続けたのであった。

そして、他にも……。

「ふふ、出来る事なら直接見たいんだけどね。あの時より見惚れさせてくれよ、ベル」

オラリオの南東区画が歓楽街、そこに建てられている宮殿のような「イシユタル・ファミリア」の本拠、『女主ペレト・パベリの神娼殿』でアイシャが眩きながら鏡を眺め……。

「ベル君、しつかりな」

「ヘルメス・ファミリア」の本拠、『旅人の宿』ではローリエがベルの応援をするべく、備えており……。

「ベル、終わったらいっぱい癒してあげます」

「フレイヤ・ファミリア」の本拠、『戦いの野』ではヘイズが……。

「しつかり、やれよ。ベル」

「ヘファイストス・ファミリア」の本拠では今、ベルが戦争遊戯で使おうとしている新しい長剣を鍛造し、昨日、『青の薬舗』に置いておいたヴェルフが……。

「頑張んなさい、ベル」

ギルド本部ではローズが……。

言うまでもなく『豊穡の女主人』に居るミアにシル、リユーにルノアにクロエにアーニヤも見ていて、『青の薬舗』ではナーアザにリルルカがやはり、ベルの様子を見ており……。

『それでは、戦争遊戯開始です!!』

戦争遊戯の実況を務める「ガネーシャ・ファミリア」の団員であるイブリが開始を告げるとともに戦場となっている場所にて銅鑼の音が鳴らされ、オラリオに居る全ての者が観戦に集中したのであった……。

二十八話

「ミアハ・ファミリア」と「アポロン・ファミリア」による『戦争遊戯』は戦場として選ばれた原野にて鳴り響く銅鑼の音により、開始が告げられる。

そして、始まったがゆえに事態の変化は一瞬。

「ふっ!!」

それまでじつと立ちながら、瞑目していただけのベルは銅鑼の音が鳴り響き、『戦争遊戯』が開始されるや否や目を開くと同時、その場から姿を消した次の瞬間には縦横無尽に駆け跳ね回る白影となった。

圧倒的速度と機動力、更には相手へと自分の姿を悟らせる事無く、接近する暗殺の技も用いる事でベルの動きや姿を認識できる者は居なくなっている。

それと同時に白影となったベルは空間に幾つも軌跡を描きながら、剣舞と鞘による戦舞を舞い踊る。

『うわあああああああつ?!』

ベルは鞘と剣の二刀流を用いる事で次々と「アポロン・ファミリア」の団員たちを斬

り倒し、打ち倒していった。

そして、更に……。

「これ以上、おいらの英雄に……命の恩人に恥ずかしい真似なんて出来るかよおっ!!」

「色々感謝はしてるけどさ、アポロン様には一回くらい痛い目を見てもらわなくちゃね」
「ごめんなさい、でも私は……」

ベルに命を助けられ、ダンジョン探索を共にした事のあるルアンにダフネ、カサンドラ達十人の団員たちはそれぞれのやり方で自派閥の団員たちへと攻撃していく。

「んなっ!? な、な……」

ベルの実力もそうだが、まさかのルアン達の反乱に驚愕し、思考が停止するヒュアキントスとリツソス等の幹部。

「へ、思った以上に借りを返してくれたな。ありがとうよ」

ベルはかなりの覚悟をして反乱したルアン達に感謝を告げる。

「まさかとは思っていたが、思い切ったじゃねえかつ!!」

「私も彼には借りがありますしね」

「こうなりや、やけだ。アポロン様には痛い目見てもらおう」

そうして、ルアン達の反逆を切っ掛けに実はベルに借りがあるのを聞いていた者やベ

ルは直接的に間接的に、ダンジョン探索中において他にも【アポロン・ファミリア】の団員を助けていた。

そうした者たちがルアン達に加勢、あるいはアポロンは実は無理やり引き抜きをしていたりもするのでこれこそ好機と反旗を翻したりなど一瞬で戦争遊戯はベル側が優勢となり……。

「さあ、一騎打ちといこうか。【太陽の光寵童】」

ヒュアキントスの元まで迫り、一旦動きを止めたベルは鞘を腰に納めて挑戦を叩きつけた。

「お、おのれええつ、裏切り者共めえええ。こいつを倒した後は制裁をしてやるから覚悟しろ」

ベルだけでなく、裏切った者たちに怒りの咆哮を上げると波状剣を抜き放つ。

「させねえし、倒れねえよ。そういや、L.V. 4になったそうだな。おめでとう。その祝いで代わりに五手譲ってやるよ」

「舐めるなあああっ!!」

ベルの宣言に更に怒りを発すると彼へ突撃し、波状剣による剣舞を披露する。

「もしかして、調整は済んでいないのか？」

「ぬうつ、くそつ!!」

ベルはヒュアキントスの剣舞をその場から一歩さえ動かさず己の剣で捌く。

「これなら、どうだ。【我が名は愛、光の寵児、我が太陽にこの身を捧ぐ】」

ヒュアキントスは剣舞が通じないと判断するや詠唱を開始した。

「【我が名は罪、風の悋気。一陣の突風をこの身に呼ぶ】」

詠唱を紡ぐヒュアキントスに対し、ベルはやはり微動だにせずヒュアキントスの魔法の完成を待つ。

「【放つ火輪の一投——来たれ、西方の風】」

ヒュアキントスは重心は低く、左腕を下に、そして右腕を高々と上げる円盤投げの体勢を取りながら、高出力の魔力を右手に凝縮させ……。

「【アロ・ゼフユロス】!!」

太陽光の如く輝く大円盤をベルへと投擲する。

それに対し、ベルは右手を突き出し……。

「【楽園の鐘よ、福音を鳴らせ】——【アルカディア・ベル】!!」

ベルの手より、音の極撃が放たれるとヒュアキントスの大円盤を消滅させ……。

「ぐああああああああああっ!？」

ヒュアキントスを撃砕の渦の中に呑み込み、蹂躪し地面へと倒れ伏させた。

「俺の勝ちだ」

ベルが拳を掲げると勝者である彼を讃える銅鑼の音が原野にて鳴り響いたのであった……。

二十九話

「ミアハ・ファミリア」の眷属であるベル・クラネル一人と「アポロン・ファミリア」の眷属で団長であるヒュアキントス、小隊長を務めるリツソス、他、ダフネにカサンドラ、ルアンなど全員でおおよそ、百人による『戦争遊戯』はなんとベルの勝利で終わった。何者なら対応できない速さと機動力、凄まじき剣技と魔法を惜しみなく発揮した事によるものと更にはなんと、「アポロン・ファミリア」に所属しているダフネにカサンドラ、ルアンなど借りを作っていた事で裏切りを起こさせた事によるものである。

今までベルの実力も借りを作っていた事情も知らないオラリオの観戦者たちはだからこそ、驚いた。

そして……。

「は……あ……ふあ?」

バベルにて『鏡』により、戦争遊戯を観戦していた「アポロン・ファミリア」の主神は混乱、驚愕の余りに呆然となっていた。

『ぶはははははははっ!!』

ロキを始め、他の神々はボロ負けするどころか眷属同士で裏切り合った【アポロン・ファミリア】の惨状を笑う。

「さて、文句なしに私たちの勝ちだぞ、アポロン。そして一応聞いておくが、ベルがお前の子を助けた事は聞いているか？」

「は？」

ミアハの問いにアポロンは初耳だとばかりに反応する。

「ふむ、ベルを手に入れようと夢中になるあまり、言っても聞かないと判断されたようだな。ベルはダンジョンでお前の子の窮地を救った事があるのだ」

「後、自分、結構強引な手で他の派閥から自分が惚れた眷属を引き抜いたりしたりしたやろ。だからこういう時にそのしつぺ返しをくらうんや」

ミアハに続き、ロキがアポロンへと言葉をかけた。

「さて、では帰ってくるベルを褒めねばならんなのでな、一旦、本拠に帰らせてもらう。願いの要求はそれからだ」

「……………う、うぐうう……………」

ミアハは立ち上がるとアポロンへ言葉をかけた。

「ミアハ、勝利おめでとうな。ベルたん強いし、それに恩があるとはいえ、ああして裏切

りをさせるなんて本当に凄いなあ」

「ああ、ベルは自慢の眷属だ。私には勿体ないくらいいな」

声をかけてきたロキ、他にも勝利を讃えてきた神々に言葉を返すとミアハはバベルを出たのであった。

そうして『戦争遊戯』の戦場からオラリオへと戻ったベルはミアハ達の元へ戻った後、
【アポロン・ファミリア】の本拠へと行き……。

「願いは一個だけなんて言つて無いんでな。遠慮なく要求させてもらう」
ベルが勝利した場合、何でも言う事を聞いてもらうというその権利を行使し……。

- ・大勢の者たちが居た『豊穡の女主人』の場にて自分たちを侮辱した事を謝罪する事。
- ・今回、裏切りをした眷属を許し改宗や脱退を望むなら認める事。
- ・『青の薬舗』に対し、スポンサー契約など商売においての契約を結ぶ事。
- ・今後、無理な引き抜きなどそうした行為はしない事。

「ああ、ちゃんと君たちの要求を守らせてもらう。それと遅くなったが、私の子供たちの

窮地を助けてくれてありがとう。ベル君」

ベルからの要求をアポロンは受け入れながら、眷属を窮地から救った事に対する礼を眷属の親としてしつかりとした。

「困った時はお互い様だ」

ベルはそれを受け入れたのだった……そうして……。

「おいらは大した事は出来ないけど、精一杯、頑張るよ」

「これから、よろしく。ベル」

「よろしくお願ひします」

「ああ、よろしくな」

ルアンにダフネ、カサンドラなど以前、ベルによって窮地を助けられ『戦争遊戯』にてベルの味方をした十名とその十名に便乗した複数の者たちも【ミアハ・ファミア】に改宗し、ベル達の仲間となったのであった……。

三十話

オラリオ中の酒場は今日、「ミアハ・ファミアリア」と「アポロン・ファミアリア」による『戦争遊戯』で多くの客が観戦に利用したために早仕舞いしているところが多い。

そして、それはオラリオ中の酒場において一番人気である『豊穡の女主人』も同じで本来なら、本腰を入れて営業しているが今日はもう、営業を終了していた。

だからこそ……。

「それじゃあ、戦争遊戯の勝利と眷属が増えた心機一転として……乾杯」
『乾杯!!』

営業を終了した『豊穡の女主人』内でベルの音頭により、ミアハにナアーザ、リリルカ、戦争遊戯を経て「ミアハ・ファミアリア」の団員になった元「アポロン・ファミアリア」のルアンにダフネ、カサンドラ達十数名と実はベルが戦争遊戯前に『豊穡の女主人』で世話になっていた時、裏で色々と繋がっていて、ベルの勝利を祝いに来たヘステイアにローズ、ローリエにヘイズ、そして祝勝会の場を設けたミアにシルとリユー、ルノアにアーニヤとクロエらが飲物の入ったグラスを上げながら、応じた。

「(やつぱり、良いな……皆と時間を過ごすってのは)」

元はオラリオより離れた村で育ての親となってくれた祖父との二人暮らしであり、生まれつき母親と父親が居なかったベルは実のところ、多くの者との交流を求めていた。

それがこうして、念願叶っている。故に彼はこうして、至福を味わっていたのだ。

至福を感じながら美味しい料理と酒を楽しんでいたベルだが……。

「ベル、ちよつとこれ飲んでみて。心身癒すための栄養剤作ってみたんだ」
料理と酒が終わったベルにナーアザが声をかけながら、薬瓶を渡した。

「それはちよつといいな。ありがとう、ナーアザさん」

ベルはナーアザの心遣いも含めて感謝をしながら、手渡された薬を飲む。

「(んっ!?)」

ナーアザから渡された薬を飲んだ瞬間、確かに心身に効き疲れは癒されたが……。
「(ちよつと、これは効きすぎ……)」

疲れを癒すだけに収まらず、心地良さどころか快樂が更に更にと押し寄せ、脱力に身を任せる事すらも快樂の一種となる。

そう、ナーアザ新開発の栄養剤は飲んだ者の心身を癒すのが目的では無く、特に精神

を極限にリフレッシュユさせるものであったのだ。

「ふ、んん……あ、う………」

弛緩した様子で艶めかしく呼吸するベル。

『(可愛いいいっ!!)』

本来は沢山、可愛がり甘やかし、快樂を与える事で彼が表出させる甘え兔としての姿がナーザの薬によって出て来ていた。

そして、その姿に変わらない感想を女性陣は抱く。

「どう、ベル?」

「うん、とつても気持ち良いよ。ナーザ……お姉ちゃん」

「だったら、もつと気持ち良くしてあげるから、向こうに行こ。今日はベル、いっぱい頑張ったからね」

「うん」

そうして、ダフネにカサンドラを加えた女性陣はベルを『豊穣の女主人』内の空き部屋へと連れて行き、用意していた作戦を実行する。

「ほおら、マッサージしてあげる」

「いっぱい、甘やかして可愛がってあげますから、私達に任せてくださいね」

「やつぱり、こつちの方が好みだよ」

「えへへ、可愛いベルさん大好きです」

「だよねえ」

ナアーザにリリルカ、新しく団員となったダフネにカサンドラ、ヘステイアがベルに
対し、マツサージを施していく。

「んふふ、ふにやふにやのベルくんも良いなあ」

「改めて見ても普段とは全然、違うわね。こんなに愛嬌を振りまいてるなんて……」

「今日はいつも以上に癒してあげますからね、ベル」

ローリエにローズ、ヘイズもベルに触り、揉み、摩り、撫でながら彼が更に蕩けてい
くようにしていった。

「今日は頑張りましたね、ベルさん。格好良かったですよ」

「はい、ベル……貴方は格好良く、優しく、立派です」

「ベルのお陰で賭けに勝って儲かったよ。ありがとう、ベル。大好きだよ」

「でかしたニヤ、ベル。本当に良くやったニヤ」

「ベル、大好きニヤ」

シルにリユ、ルノアとアーニヤとクロエが愛や好意を伝えながら今までよりも更に

甘やかし、可愛がり、愛していく。

「ふああ……き、気持ち良いよお、お姉ちゃんたち」

『もつと気持ち良くなつて良いよ、ベル』

蕩けながらナーザ達から与えられる愛情と快楽に身を委ねるベル、その反応に気を良くし更にベルが満足するように励む女性陣であった……。

時系列 原作三巻と四巻&ソード三巻と四巻

三十一話

「アポロン・ファミリア」との『戦争遊戯』に勝利した事で「アポロン・ファミリア」のルアンにダフネ、カサンドラ他十数名の眷属たちがベルの所属する「ミアハ・ファミリア」へと「改宗」した。

そして、勝利の祝いに約束もあって『豊穣の女主人』にて宴をした。

その際、彼の勝利を讃えるためという建前の元、女神ヘステイアに「ヘルメス・ファミリア」のローリエ、「フレイヤ・ファミリア」のヘイズ・ベルベット、ギルド職員であり、ベルの冒険者としてのアドバイザーを務めるローズが宴に参加する。

そうして、ナーザが薬師としての腕を振るいに振るって創り出した身体に精神を癒しながらもリラックス状態にする薬を飲ませる事でベルが普段、抑制している甘え兔としてのそれを解放し、ナーザにリルルカ、ダフネとカサンドラ、ヘステイアにローリエ、ヘイズにローズ、シルにリユーとルノアとクロエにアーニヤらはベルを甘やかし、可愛がり、愛したのであった。

その後はローズは明日、仕事があるとしてローリエが護衛を務めるために一緒に店を出て、後はナーザにリリルカ、ダフネにカサンドラはベルと一緒にベツとで眠るようにし、ヘイズにヘステイアは部屋を借り、シル達も又、『豊穣の女主人』でそれぞれの部屋へと戻ったのであった。

「うあ……く、くそう……お、俺は……ぐううう」

昨日を思い出し、ベルは恥ずかしさに震えた。

『可愛かったよ、ベル』

そんなベルに女性陣はそう、満足した表情で告げたのであった。

気分を変えるためにベルはミアハにある事を頼み……。

「という訳でルアン達の入団登録と俺がL.V. 5に【ランクアップ】した登録よろしく頼むぜ」

『れ、L.V. 5おおおおおつ!?!』

瞬く間の間にベルが第一級冒険者として認識されるL.V. 5になったのもそうだが、昨日の戦い振りからしてそれが出来るだけの【経験値】を積んだのは『戦争遊戯』の結

果ではなく、その前からというのを理解したからこそ皆は驚く。

「やつぱり、ベルに限界は無いんだね」

「うんうん、ベルは本当に現代の英雄だよ」

「どこまでも規格外だな……」

「英雄譚を読んでるような気分になりましたよ」

「ほう、もう並ばれてしまうとはな」

「まったく、どこまでも疼かせてくれるよ」

「どれだけ、自分の体を苛めてきたんでしようね」

彼の勝利を祝うためにギルド本部で待っていた「ロキ・ファミリア」のアイズにティオナ、リヴェリアにレフィーヤと「ヘファイストス・ファミリア」の椿や「イシュタル・ファミリア」のアイシャ、「ディアンケヒト・ファミリア」のアミツドラがベルの頭や顔やら好き好きに弄っては声をかける。

「み、皆……打ち合わせでも……」

『いや、してない』

常々からの疑問を言ったのだが、即答されそのまま、すっかり身についてしまった習慣であり、甘え癖によって女性陣からのスキンシップに体を委ね、意識も蕩かせてい

たのであった……。

ともかく、今日はゆっくり体を休めていたベルであったが……夜になってきた頃に……。

「ま、前に遠慮なく頼ってくれって言ったよな。だから、頼らせてくれ……実は……」
本拠である店に必死な様子で幾人かの派閥さえバラバラな冒険者たちが訪れ、ベルへと用件を告げる。

それは24階層にてモンスターが異常な大量発生をしているから、解決して欲しいとの事であった。

無論、報酬も自分たち出来る範囲で払うとも誓う。

「分かった、任せろ」

自分を頼ってきた冒険者達からの依頼をベルは引き受けたのであった……。

三十二話

ベルが『怪物祭』が開催される前のダンジョン探索の時、ヘイズやリルルカにヴェルフ、まだ改宗する前のダフネにカサンドラ、ルアン達にアイシャ、アミッドと多くの者たちと探索した事で『中層域』の最後の階層である24階層まで探索範囲を広げた。

その24階層にて異常な規模のモンスターの大群が発生したという事を彼の力を頼りに派閥さえバラバラな冒険者の一団が『青の薬舗』までやってきて、説明をしそして、解決してくれるように依頼した。

「急を要するようだし、早く片付けた方が良いから俺一人で行ってくる」

「分かった、気を付けて」

「ベル様がそう言うなら……」

「邪魔になるなんて嫌だしな」

「ベルは只でさえ、L.V. 5の第一級冒険者でしかも英雄だものね」

「お帰りをお待ちしています、ベル様」

「気をつけてな」

ベルは単独で冒険者たちの依頼をこなす事にし、ナーザ達へ言うに彼女たちもそれを受け入れ、見送られながらバベルの中央へと幾つもの建物の屋根を超速で駆け跳ねながらバベルのある中央広場へと向かい、そのままバベルの中に入ると勢いそのままに進み、地下1階へと飛び降りてダンジョンの中に入る。

「ふっ、やはりLV. 5というのは違うな」

LV. 5に「ランクアップ」した自分の能力を実感しながらダンジョン内を加速し続けながら、いつもと違う最短ルートを駆け跳ねる事で残像すら残さない超速の物体となる。

そして、進行方向に居るモンスターの群れを感知も視認する事さえ出来ない剣閃乱舞にて斬殺していくと……。

「んっ」

「ぐるうう……」

中層域がある程度進んだところでライガーファングの一匹がモンスターの群れに襲われようとしているのを発見する。

纏めて斬殺しようとも思ったが、ライガーファングの一匹は普通のモンスターとは

違つて恐怖の感情、理知があるように思えた。

「しようがねえ」

ベルは助ける事を決め、そのままライガーファングの一匹を襲おうとしたモンスターの群れを全て肉片に一瞬で解体しきつた。

「急いでるんでな、後は向こうに行くの良い……そこで見てるやつ、後は任せただ」

驚きながら見ているライガーファングに呼びかけると、気配を探ればどうやら、ライガーファングを助けようとしていたらしい者が居たようでその者へと叫んで伝えると直ぐにその場から去つた。

「モンスターの中にも理性を持つてるやつが居たんだな」

ベルは情報収集や小休止のために18階層を目指して駆け跳ねながら、ライガーファングの事を思い返して呟く。

「……彼は一体……」

黒衣のローブであるのに加えてそれを纏っている姿自体が影がそのまま人になつたような者が、ベルが去つた方向を眺め呟いたのであつた……。

三十三話

ダンジョンの中層域において最後の24階層でモンスターが異常な規模の群れを成したので解決して欲しいと冒険者達から頼られたベルは早速、ダンジョンへと単身入り、進軍し続ける。

道中において普通のモンスターと違い、理知を持ったモンスターであるライガーファングを救出するという事態はあったが、その後は中層域を進んで中層域における『安全階層』にして冒険者がダンジョンを探索する上で重要な補給拠点となっている『リヴィラの街』へと寄った。

それは24階層に関しての情報を収集するためと24階層に向かう前の休憩を取るためである。

そして、『リヴィラの街』と言えば少し前に「ガネーシャ・ファミア」の団員であるハシャーナの殺害事件があり、更には謎の新種モンスターである食人花が大暴れし、あわや壊滅するところをベルが大活躍し、窮地から救ったという事があった上にその後の復興にもベルは関わり、そのため僅かな日数での復興に成功した。

そのため……。

「よう、久しぶりだなボールスさん」

「おう、ベルじゃねえか。見てたぜ、「アポロン・ファミリア」との戦争遊戯……圧倒的なまでの大勝利だったな。お前に賭けたお陰で大儲けできたし、感謝してるぜ」

『リヴィラの街』の大頭であるボールスの元へ行くと彼はベルに対し、友好的な笑みを浮かべながら友好的な態度で接してくる。

「それは良かった。なら、情報をくれ……24階層でモンスターが異常な規模の群れを成してるって聞いたが実際、どんな感じなんだ？」

「おお、それを聞くって事は解決してくれるんだな。よし、なら話してやるよ」

ベルの問いに困った事態という認識はあつたようでボールスは24階層で異常な規模の群れのモンスターと遭遇し、命からがら逃げてきた冒険者たちの話をした。

「本当にヤバい事態になっっているんだな。それじゃ、ちよつと休憩したらすぐに解決に向かう」

「ああ、頼んだぜベル。一応、他の連中にも話を通しておく。邪魔になられると困るだろ」

「配慮、どうも」

そうしてポールスから情報を得たベルは休憩のために以前、泊まった事のある『ヴィリーの宿』へと向かえば……。

「おお、リヴィラの英雄のあんたなら大歓迎だ。あの日から散々でな、サービスもするよ」

自分が経営する宿にて殺人事件が起こり、更にはあわや、街が壊滅する状況にまでなったために縁起が悪いと『ヴィリーの宿』は客足が無くなり、それに大層困り果てていたヴィリーはベルの利用を大変、喜んだ。

そうして、一旦仮眠を取って休憩し、起床すると準備を整えて18階層から下の階層へと次々に進み……。

「おお、これは随分と活気に溢れているな」

24階層内のある巨大な十字路、その広い通路内を『デッドリー・ホーネット』や『ソード・スタッグ』、『リザードマン』、『ダーク・ファンガス』、『ホブゴブリン』、希少種である『モス・ヒュージ』も含めて24階層にて生まれ出るモンスターの群れが行列を作って進軍していた。

「とつとと片付けるか。【轟け^{ビート}】!!」

超短文詠唱と共に魔法を発動すると雷霆のオーラを纏い、瞬間、正しく一筋の雷霆と

なってモンスターへと光速で突撃する。

『グオアアアアアツ!!』

超速としか言えない圧倒的速度とそれが故に実現可能な縦横無尽な軌道で駆け跳ねる閃光がモンスターへと激突する度に閃光の中へと呑み込んでいく。

幾つもの刹那に瞬く斬閃の軌跡はモンスターが斬殺されたという証だった。

「後は原因の調査だな。あいつら、どっかから移動したようだったが……」

そうして、モンスターを数秒で斬滅し尽くしたベルはモンスターが向かってきた方向を調査し……。

緑色の肉壁がある場所を見つけ、その中心に花の花弁が折り重なったような『門』、あるいは『口』のような器官を発見する。

「まさか、あの新種のモンスターの生産地か？」

食人花と関係があると予想しつつ、これこそモンスター大量発生の原因だと察した。

「【楽園の鐘よ、福音を鳴らせ】——【アルカディア・ベル】」

そして、鐘の轟音による砲撃で『門』であり、『口』のような器官を破壊して中へと入ったのであった……。

三十四話

ダンジョンには初層である1、2階層を除いて各階層に二つ三つ存在するモンスターのための広間が存在する。その広間の名は『食糧庫』パントリーという給養の間だ。

大空洞の奥に石英クォーツの大主柱が存在し、そこから栄養価の高い液体が滲みだすために腹の空かせたモンスターが集まり、液体を摂取するというわけである。

ベルが入ったのは本来は24階層の『食糧庫』だった。門の役割を果たしていた『口』を破壊し、中に入れば広がるのは壁も天井も地面も全て緑色の空間、まるで生物の中に入ったかのようなようだった。

「全部、ぶち壊せばそれで済む話だ」

ベルは言いながら、この奥に異変が起こった大本があると予測しながら駆け跳ねる。
『オオオオッ!!』

すると至る所から食人花のモンスターが現れ、更に先へとベルを行かせないために天井より次々と巨大な柱が放たれて道を防ごうとする。

「何かありますよって言っているようなもんだぜ」「楽園の鐘よ、至高の音を世界に鳴り響かせろ」

ベルはこれ以上の妨害を受けないようにするために、も鐘の音によって時間の流れを狂わせ、自分以外の全ての動きを緩慢にすると超速で駆け抜けながら食人花の群れを斬滅していく。

「あそこか」

そして駆け抜けていく中で血の色のような赤い光が漏れ出しているのを確認すると魔法を解除し、ホルスターに納めているナアーザが元は『戦争遊戯』に挑むベルのために新開発した体力と魔力を回復出来る『高等二属性回復薬』ハイ・デュアルポーションを二つ飲み干して全回復する事で赤い光の中へと行く。

赤い光の元である石英の大支柱は三体の巨大な食人花によって寄生されており、それぞれが柱に絡みつかせた蔦のような触手から栄養のある液体を吸い出し、大空洞の一面に伸ばしている触手や根に送る事で緑色の壁の面積を拡大させているし、その肉壁からは食人花が間欠的に生まれている。

そして、何より超巨大な食人花が巻き付いた大支柱の根元には怪物の雌の胎児を内包

した緑色の球体を取り付いていた。

だが、それだけでなくモンスター白骨を利用して作られた鎧兜を被った長身の男に以前、18階層にてハシャーナを殺し、アイズを襲ったという赤い髪の女性、ローブで顔や体を隠した集団も居る。

「良し、滅ぼすか……【楽園の鐘よ、鳴り響け】」

即滅を決めたベルは詠唱を開始し、段々と輝きを増す強烈な白い光を魔法円に収束しながら、それと共に大きくなっていく荘厳なる大鐘楼の音を鳴り響かせながら超速による驀進を開始した。

「っ、奴に魔法を使わせるなあっ!!」

ベルの魔法を知る赤い髪の女性は叫んで指示を出すも……。

『んなっ!!』

【激動白兎】の効果によってまず、体力の大半を燃料に大加速する事で一気に雌の胎児の元へと向かい、赤い髪の女性と鎧兜の男たちの機先を制して、斬滅するとそのまま、止まらずに巨大な食人花へと駆け跳ね、防衛のために幾つもの触手で攻撃してくるそれを回避しながら、斬閃乱舞を繰り返して切り刻んでゆく。

「殺せえええ、なんとしてもやつを始末しろおおおっ!!」

鎧兜の男もベルを危険な者だと判断、自分も赤い髪の女性も他の集団も食人花も皆がベルを排除すべき対象だと判断し、襲い掛かる。

「悪いがそれは無理だ。勝つのは俺だからな」

窮地となったベルだが、しかし彼は窮地に陥った時にその真価を発揮する。全能力が跳ね上がり、しかも激戦となれば激戦となる程に体力と魔力の自動回復の速度が跳ね上がるのだ。

つまりは更なる大加速を果たし続け、更に加速すればする程に攻撃力も上がる。

よって、ベルは圧倒的な速度のままに地も空も己の庭だと言わんばかりに駆け跳ねながら、速度域によって攻撃力を上昇させ続けての斬閃を敵へと放ち続けた。

「ぐううっ!？」

「ば、馬鹿な。速っ!？」

『グオオオオツ!!』

赤い髪の女の斬撃も鎧兜の男の手足による攻撃も食人花の触手も、そして集団の自爆攻撃ですらも何も通じずに斬閃を喰らい続け……。

「それじゃあな……【アルカディア・ベル】!!」

遙か頭上を指し示しながら、魔法を完成。

発動までに三分間の大畜力をした事で以前よりも遙かに純白にして荘厳な鐘が顕現

すると一度揺らぎ、超絶なる破壊の音撃が放たれ全てを呑み込んだ。

「くっ!!」

「んなっ!？」

赤い髪の女性はベルの魔法が発動する数秒の間に鎧兜の男の背中から胸を右手で貫き、魔石を取り出すと食べつつ、その場から全速力で逃亡を開始しつつも……。

「ぐあああああああつ!!」

音撃によってその身を蹂躪されながら凄まじい距離を吹っ飛ばされたのであった。

広間の全てを破壊し、残るは凄まじく深いクレーターだけの場所でベルは断っていたが……。

「来るか?」

二腕二足に四Mはある尾、鎧を纏った恐竜の化石のような怪物が天井より産み落とされ、ベルが視認すると同時に壁を蹴って超速でベルへと突撃するも……。

「勝つのは俺だ」

対して怪物へとベルも突撃していて交錯するままに怪物に一閃を炸裂させており、そうして消滅しゆく怪物を見ずに歩きながら勝利を告げるのだった……。

三十五話

24階層の『食糧庫』にて今までにオラリオでの怪物祭、リヴィラにて出現した食人花のモンスターにリヴィラにてハシャーナを殺し、アイズにも襲い掛かったという女の調教師、宝玉の中に内包されたという怪物の『雌』の胎児と今までの異変に関係のあるものたちが集まり、更に謎の集団たちが暗躍しているのを発見したベルはすぐさま、それらを排除した。

そうして、モンスターの異常な大量発生を解決した事を報告するために一度、24階層から18階層の『リヴィラの街』に戻ると……。

「よう、わざわざ待っていてくれたのか」

24階層にてモンスター大量発生の変が起きているのをベルに伝え、解決を依頼した冒険者達が居るベルの呼びかけに頭を下げた。

「安心してくれ、モンスターの大量発生の際は片付いた。ダンジョンには『異常事態』が尽きないから今後の事は分からないが、とりあえずは平穏な探索が出来ると思う」

『っ、ありがとうベル・クラネル。依頼に見合う以上の報酬は必ず用意させてもらいま

す』

「それじゃあ、俺は皆に伝えてくるぜ」

ベルの報告に彼へと依頼した冒険者たちは安堵の息を吐き、今までベルの邪魔にならないよう、リヴィラの街を利用していた冒険者達を止めていた街の大頭であるポールスは早速、異変解決した事を伝えに言ったのだった。

そして、24階層での異変のためにその階層への探索を留めていた冒険者達もベルに感謝を伝えたのだった。

その後、ベルはすぐにギルド本部でも24階層の異変が解決したことを伝えに行こうと18階層から「ケラウノス・エナジー」をも使った全速力で疾走し、一階層へと瞬間に上がり、そのままバベル地下一階に上がれば……。

「はあい、ベル。お疲れ様です」

「ヘイズさん……出迎えありがとう」

ヘイズが地下一階にてベルを待っていたようである。ベルの姿を見ると手を上げて出迎えた。

「いえいえ、ナーアザさん達に聞きましたよ。ベルは相変わらず、皆のために頑張ってるって。ふふ、本当にベルは優しくして良い子ですね」

ヘイズはベルに近づくと優しく微笑みながら、頭を撫でる。

「ありがとう、ヘイズさん。でも、俺は英雄になる者として人助けをするのが好きなのだよ」

「だからこそですよ。そして、いつも頑張っているベルを今日、労うために私の主神が会いたいと言ってるんですよ。あ、ナーザーさん達には許可を取っているのでご安心を……」

「随分と根回しの良い事で……お気遣いどうも」

「いえいえ、当然の事ですよ」

そうして、ベルはヘイズと共にバベルの最上階の部屋へと行き……。

「ようこそ、ベル……こうして直々に会えて嬉しいわ」

「どうも、ベルさん」

バベルの最上階の部屋はオラリオの頂点に君臨する「ファミリア」の主神に許された部屋であり、都市の景色を一望できる継ぎ目のない巨大な窓硝子に壁の一面を埋め尽くす高級な本棚、足が沈む込む絨毯や月と太陽の絵画、林檎の果樹を象ったミニテーブル。顕示欲の強い富者の部屋と比べれば調度品の数こそ少ないものの、匠の技をつくされた品々は部屋の主の品位が分かるものである。

そして、そんな品位の高い部屋に居る主神とは美しい銀の長髪に銀の瞳、成熟した美

を体現した女神であり、「フレイヤ・ファミア」の眷属であるヘイズの主神であるフレイヤが居て、更に『豊穡の女主人』の店員であるシル・フローヴァまでいた。

「……まあ、良いか」初めまして、フレイヤ様……オラリオでも最高位の派閥で神としても名高い女神である貴女様に会えて光榮です。シルさんもうも」

フレイヤとシルに何か違和感を感じながらも指摘はせずにフレイヤに対しては礼儀を取った。

「ふふ、それじゃあ早速労わせてもらおうわね」

「見たところ、大変だったようですね」

「今日も可愛い所、いっぱい見せてもらいますよベル」

「お、お手柔らかに……」

そうして、ベルはフレイヤにシル、ヘイズらに近づかれて腕を引かれてまずは浴室へと向かう事になったのだった……。

三十六話

ダンジョンへの唯一の出入り口となる『穴』を地下一階に保有する白亜の巨塔であり、多くの施設や店舗がある摩天楼施設のバベル。

そして、このオラリオで頂点に君臨する派閥の主神のみが使用を許される最上階の部屋に24階層でのモンスター大量発生の変異を片付けたベル・クラネルは招待されたのだが……。

「う、うああ……くふ、あく……も、もう止めてえ」

「んふふ、いつも話で聞いている事やあの戦争遊戯での活躍ぶりが嘘のような愛嬌ね」

「はい、フレイヤ様。ベルさんは普段、男として見栄を張ったり恰好付けているだけで本当は可愛らしい子なんですよ」

「そ、そんな言い方……あむ、ううううっ」

「ベル、この部屋には私達だけですし、こういうときぐらいは気を抜いてくれて構いませんよ。だから、もっと私達に甘えてください。思う存分、癒してあげますから」

「んひゃあああ、う、ああああっ!!」

ベルは先ず、浴室にてフレイヤにシルとヘイズから性的な奉仕をされながら体を洗われたり、浴槽の中でも抱き締められつつ、口づけや撫で回しや搾り、揉み解しに掻く刺激と弄られつつ、散々甘い言葉を与えられ続けた。

それにより、ベルの理性に体は今まで以上の快楽によつて溶かされ、腑抜けのようになってしまい現在、寝台の上でフレイヤとシル、ヘイズからの甘やかすと可愛がり、更に性的な奉仕を受け入れ、彼女たちに自分の身を委ねてしまっている。

「そうよ、ベル。私達は貴方を癒してあげたいの。自分や自分の派閥だけでなくこのオラリオや下界のために全力で頑張っている貴方をね」

「そうされるだけの事をベルさんはしてくれていますから」

「だから、さあ……」

「は、はい。よろしくお願いします」

そうして、最後には自分からフレイヤ達に完全に身を委ねて愛情と快楽の虜となった。

時間は経過し、ベルが目覚めた後……。

「それでほかに何か望みはある？　出来る限り、叶えてあげるわ」

「それじゃあ、フレイヤ様の本拠で行われている『洗礼』に参加させてもらいたいです」
「まあ、貴方ならそう言うと思つたわ。でも、私の眷属はきつと張り切つて、貴方を真つ先に倒そうとしてくるわよ?」

「望む所です」

「……いつもより、しんどくなる事確定ですがベルのために頑張りますよ」

フレイヤとベルのやり取りにヘイズは溜息を吐きながら、言うのであつた。

二

バベルの頂上の部屋でフレイヤ達から愛と快楽を与えられたベルはその後、24階層での異変を片付けた事をギルド本部で報告しようとしたのだが……。

『ベル・クラネル。こちらへ来い……ロイマン、彼を通せ』

「ウラノス様!!? し、しかし……」

『通せと言っている』

「わ、分かりました。ベル・クラネル……ウラノス様に失礼の無いようにな」

ギルド本部内にて出入りを限定されている地下階段の奥から声が響き、顔つきこそエ

ルフであるが、肥満体形な男でギルドの長であるロイマンはその声に従いベルを誘った。

ギルドの地下階段にはダンジョンへと祈祷を捧げる事でダンジョンを抑え込み、モンスターの大進出を防いでいるという老神ウラノスが居る事で有名である。

「分かった。ウラノス様は神の中でも偉大な方と聞いているから気を付けるよ」

そうして、心配そうに見てくるローズに軽く苦笑の笑みを浮かべて頷くと地下階段へと向かう。そうして、階段を降りた先には長い年月を感じさせる石造りの広間であり、祭壇があった。

大きな石板が床を覆い、隠された神殿の地下を彷彿させた。暗闇に包まれる周囲を照らすは四炬の松明による赤い炎のみである。

その炎に囲まれる祭壇の中心に大きな石の玉座があり、二Mを超す長身にして逞しい身体をローブに包み、容姿端麗だが白髪に顎にも白髭、そして静謐な表情と長い年月を生きてきたからこそその風格を有している老神、ウラノスが座っていた。

「お呼びいただき光栄です。ウラノス様……まずは自己紹介させていただきたい。俺は「ミアハ・ファミリア」のベル・クラネルです。是非、お見知りおきを……そつちで俺を

見ている貴方も、最も会うのは二度目ですわね」

「っ!? 噂以上の人物のようだな。私はフェルズだ」

ベルはウラノスに頭を下げて自己紹介すると隅の方へと顔を向け、暗闇に紛れていた影の化身のようなローブ姿の者へと声をかけ、フェルズは驚きながらも自己紹介をした。

「用件は24階層での事ですか？」

「ああ、それもある。何があったのか、聞かせてくれないか」

「俺は商業系派閥の者だから本当なら、情報も商品にしなきゃならないんですが……ウラノス様はこのオラリオでも偉大な方。友好の証という事で応じましょう」

「感謝する」

そうしてベルは24階層の『食糧庫』での事を話した。

「では、あれが生まれたのはそれが原因か」

ウラノスはベルの報告を聞いて納得したように呟く。

「あれ? ああ、食糧庫ごと周囲を根こそぎ、魔法で破壊した時に出てきた奴の事ですね」

「ジャガーノートという。ダンジョンの再生を超えた破壊が行われた時に防衛本能とし

て生み出される存在だ」

「なんともまあ……どうりで異様な感じがした訳です。ダンジョンの特性上、もつと深い階層で生まれる程に能力は高まりそうですね」

「……ベル・クラネル。これは頼みだ。どうかジャガーノートの事は口外しないで欲しい」

「少なくとも今は聞きましよう。しかし、場合と状況次第では……」

「ああ、それで良い」

そうして、ベルとウラノスは話を成立させたところで……。

「ベル・クラネル。私からも良いだろうか？ どうしてあのライガーファングを助けた」

「あのライガーファングには恐怖……感情があつたからです。何か違うと感じたから助けました。ああいうモンスターもいるんだと今になって驚きですが」

「あれはダンジョンの神秘だ……『異端児』^{ゼノス}という。他にも喋ることが出来る者もいるよ。ベル・クラネル、君は人と怪物が共存出来ると思うか？」

「散々、皆はモンスターの脅威に脅かされているから果てしなく困難でしょうね。だが、どんな事にも絶対は無い。本気で共存しようと願ひ、行動すればいつかはやり遂げられ

るかもしれませんが。まあ、俺は変わり者だからモンスターが手を差し出して来たならそれを受け入れます。敵意には敵意で応じるが、善意には善意で返す主義なので」

「君のような者が居てくれて良かった」

そうして、話し合いを終らせるとベルは必要があれば、勿論報酬などを貰ったりはするが、ウラノスとフェルズたちとの協力関係を結んだのであった……。

三十七話

ギルド本部の地下室にて座し、祈祷をする事で生きている地下世界ことダンジョンの活動を必要最低限に抑え、モンスターの上進を防いでいる役割を持つている神の中でも超重要な神物であるウラノスとその協力者であるという魔導士のフェルズとベルは協力関係を結んだ。

そうして、地下室から出ると……。

「ベル、あんたウラノス様に失礼な事とかしてないでしょうね」

「するわけ無いだろ。ローズさん……これからもオラリオのために頑張ってくれって応援されたくらいだ」

「なら、良かったわ。今回もお疲れ様」

ローズに心配されつつ、暖かく優しい言葉をかけられながら、頭を撫で回された。

「っ、んん……」

「うん、今日も可愛いわね。ベル」

「可愛いってのは男としては言われたくない言葉なんだが」

顔中を揉まれ、擦られ、撫でられてたつぷりと甘やかすと愛を与えられてベルは言葉とは違い、心地良さげにし、浸っていた。

「良いじゃない。私にとつてはまだまだ可愛い男の子なんだから、ベルは」

最後にもう一度、頭を撫でられた事で終わり、ベルはナーザ達の元へと戻るために『青の薬舗』へと戻る。

『お帰り』

するとベルはナーザにリルルカ、ルアンにダフネにカサンドラたちやミアハにヘスティアから暖かく、出迎えられた。

「ああ、ただいま。こっちは無事、異変は片付いたぞ。そっちは何かあったのか？」

「うむ、会ったぞベルよ。いよいよ新店舗が建てられる事となった」

「その時はボクも店員として働くからよろしく頼むよ、ベル君」

ベルに対し、ミアハは「ゴブニュ・ファミリア」と前から相談していた新店舗が建造される事が決まり、もう始まっている事を言い、そしてヘスティアが新たに店員になる事も決まったと言った。

更に戦争遊戯で勝利した事で決まった「アポロン・ファミリア」が「ミアハ・ファミリア」に対しての出資者化やスポンサーなど商売関係においてあらゆる関係の成立、こ

れには「フレイヤ・ファミリア」も加わっている。

「(どんだけだよ)」

ベルは「フレイヤ・ファミリア」の手回しの良さに驚きを通り越して呆れもした。

「ミアハー、邪魔するでえってなんでドチビもおるんやあつ!!」

「それはこつちの台詞だよ、ロキイイイ」

「ンー、いきなり混沌とした状況になるなんて……これは読めなかった」

少しするとロキと彼女の眷属にして派閥の団長であるフィンが訪れたのだが、ヘステイアの姿を見た事でロキはヘステイアといがみ合いを始めた。

これにフィンは苦笑して、呟く。

「よう、フィンさん。なんとなく用件は予想付くよ。24階層の事が聞きたいんだろ?」

「その通りだよベル。ここ最近、異変続きだからどうしても気になるんだ」

「話すのは良いが、情報は五万ヴァリスだ」

「はあ!?! 吹っかけ過ぎやろ。勘弁してやベルたん」

「俺は商業系派閥の人間だからな。だから、俺の持つ情報だつてこの派閥では貴重な商

品なんだよ。それにまだ恩も返してもらって無いしな」

「……良いよ、払おう」

そうしてベルはフィンとロキに情報提供をするとベルが食糧庫で出会った自爆装置を使う連中は【闇派閥】^{イギリス}というかつてオラリオで非道の限りを尽くした犯罪系派閥の集まりの残党だろうとの事だった。

「どうやら、面倒な事態が起こってるようなな」

「こういう事に終わりは無いようだ。さて、価値のある情報をありがとう、ベル。ところで恩返しの話だけど、こういうのはどうだろう？」

フィンはベルに対し、一週間後に到達階層の更新を目指して【ロキ・ファミリア】が行う『遠征』に同行を持ち掛け、ベルは『ああ、良いぜ』と了承した事で話は纏まったのである。

そして、夜になると……。

「さて、またたつぷりと誰かがベルを癒し、愛してあげられるか心身に教え込んであげない」と

「フレイヤ様たちはたつぷりと愛してくれたそうじゃないですか、なら負けられません」

「ボクもこれからは此処の店員になるから、今までより癒してあげるし、愛してあげるよ」

「一つでもベルのためにやれることがあつて良かったよ」

「私もそう思う」

「ふあああ、や、やううう……」

ベルはナーザーにリリルカとヘスティアにダフネとカサンドラたちに身も心も可愛がられ、甘やかされ、愛され……暖かさで快樂によつて身も心も蕩かされ尽くした事で甘え兔へと変えられた。

そうして、更に甘え兔となつたベルは限界以上の甘やかすと愛と快樂を与えられ続けたのであつた……。

三十八話

ダンジョンの中層域の最後の階層である24階層で起きたモンスター的大量発生を解決した「ミアハ・ファミリア」のベルは自分の本拠である『青の薬舗』に戻ると新しい自分たちの店舗が出来た事を知った。

更に24階層での出来事を聞きに「ロキ・ファミリア」の主神であるロキと団長であるフィンが本拠を訪れた。そうして情報売り、話をする中でベルは「ロキ・ファミリア」の『遠征』に同行する事に決まった。

「ミアハ・ファミリア」の新店舗の完成と「ロキ・ファミリア」の遠征が始まるのはどちらも同じ1週間後である。

ともかく、自分の本拠へと戻った事でナーザにリルカ、ダフネにカサンドラとヘステイアらにたつぷりと可愛がられ、甘やかされつつ愛と快樂を与えられて一夜を過ごす事になり、その翌日……。

「朝早くからすまない。遠征に同行してもらおうとの事で挨拶させてもらいに来た」

「おはよう」

「おっはよー」

「おはようございませす」

【ロキ・ファミリア】の副団長であるリヴェリアと幹部のアイズにテイオナとレフィーヤが『青の薬舗』を訪れて挨拶しながら、回復薬を幾つか購入する。

「君が24階層で起こったモンスターの大量発生を解決したと聞いた。ありがとう、ベル」

「ベルは良い子だね」

「ありがとね、ベル」

「お疲れ様です、ベル」

「つ、ふ、うく、お、お前ら本当はこっちがメインだろ……う、ぐうう」

商品を購入したリヴェリア達はそのまま、ベルに対して頭を撫でたり、頬を撫でたり、顔を揉むなどベルを可愛がり、愛でていく。

「さあ、それはどうかな？」

「喜んでるベル、可愛い」

「本当、可愛いベルの姿は良いよね。ほらほら、素直になって」

「身を委ねてくれて良いんですよ」

言葉でこそ、ベルは不満げであるが体の反応としては蕩けているし、喜んでいるのを見て、リヴェリア達は続ける。

「や、ふ、止めろおお……」

ベルはせめてもの抵抗で言葉での拒絶しか出来ないのだった。

「少ししたら、遠征の打ち合わせに来させてもらおうからまたよろしく頼む」

「は、はいいい……」

そうして、満足したリヴェリア達はそう言って『青の薬舗』を去っていく。

「ふふ、相変わらず皆に好かれてるね」

「ちよ、い、今は……んやああああッ!!」

蕩けて脱力状態になっているベルを更にナーザ達が愛と快楽で蕩けさせていった。

その後はベルは自分の剣と鎧を自分の契約鍛冶師であるヴェルフの工房へと手入れ

に出しに行つたのだが……。

「奇遇だな、ベルよ。という訳で愛でさせてくれ」

「ど、どういう訳……んむううう」

ヴェルフの工房に遊びに来ていた椿により、胸の中へと抱き締められつつ、頭や顔を弄りに弄られる。

「実力としては勇敢な英雄だが、こうすれば可愛がり甲斐がある兔だな」

「うあああ……」

椿はベルの蕩け具合を楽しみ、ベルは只々されるがままとなっていた。

その後はヴェルフから代剣と代用の鎧を貰うと工房を去り、新店舗に向けての準備を手伝い……。

「ベル、アイシャさんに会ってあげて」

「い、良いのか？」

「うん、話はしているから」

ベルが24階層へと行っている間にアイシャは堂々と相談しにいったようだ。『敵わなねえな』と思いながら、ベルはアイシャの居る『歓楽街』へと行き……。

「この時を待ちかねたよ……散々、焦らされたんだ。今夜はたつぷりと付き合ってもら
うからね」

「ああ、うぐ……んなあッ!!」

アイシャは歓楽街に現れたベルを自分が情事に使う秘密の拠点へと連れて行き、まずは頭を撫で、頬を擦り、口づけをするなどして優しく脱力させると性的な奉仕で一氣に蕩かせながら、搾り尽くしていくのだった……。

三十九話

オラリオの第四区画、南東のメインストリートは地理的に隣接する繁華街とは打って変わって、淫靡な雰囲気が漂う『夜の街』。つまりは『歓楽街』となっている。

『世界の中心』とあって、この区画にある娼館は様々な世界様式のものとなっており、そこで働く娼婦たちも又、同じ。

そして、この『夜の街』を支配している「ファミリア」こそ「イシユタル・ファミリア」である。

そんな「イシユタル・ファミリア」の眷属にしてアマゾネスの『戦闘娼婦』であるアイシャとダンジョンで初めて出会い、手合わせしたのを切っ掛けにベルは彼女と男女の関係を築いた。

「ふふ、こーうやって男を甘やかしながら交わるつても悪くないねえ……」
「う、んうう……」

彼女が普段いる場所が場所なのでアイシャには会いに行きずらかったのだが、彼女はベルが24階層での異変を解決しに行っている間にナーザたちと話をし、ナーザを

会長にリリルカ、ダフネにカサンドラ、ローズにローリエ、ヘステシアにヘイズにシルにリユーとルノアとクロエにアーニヤ、ヘステシアにフレイヤ達によつて結成された『ベルを愛する女同盟』の一員となつたらしい。

「ふふ、あんたは本当に凄いいねえ。普通は揉め事が起こるのに刺されたりとかせず、皆に愛されてるんだからさ」

「うく、んふ、あうう……完全に尻に敷かれてる気もするけどな」

いつの間にそんなものを作つていたのとか、男としては完全に管理されてるとか思ひ、自分は一生、ナアーザ達には勝てないと確信している。いや、逆らつたりはしないし、彼女たちの愛にはちゃんと応える覚悟をしているが……。

そして、現在ベルはアイシャの娼婦としての熟練したテクニクによつて、たつぷりと甘い快樂で蕩かされ尽くしている。

「まあ、女の愛には男は勝てないもんさ……ところで次は是非ともあんたに抱いて欲しい子がいるから、よろしく頼むよ。因みに処女だ」

「新人つて事か？」

「まあ、そういう事だね。名前は春姫つて狐人キツネの子なんだけど、娼婦としては駄目な子だね。男の首元や胸元見ただけで勝手に昂ぶつて気を失つちまうのさ」

「随分と難易度高いな、おいつ?!」

アイシャからの説明にベルはツツコんだ。

「そして、良くその春姫つてのは気絶したままやられないもんだ。まあ、気絶したのに驚いたり、萎えたり、「イシユタル・ファミリア」と変な波風立てたくないとかあるんだろうが」

「そして、本人は既に娼婦として抱かれてるって思いこんでるけどねえ……安心しな、その春姫の件についてもちゃんとナアーザには話は通してあるよ」

「……そうか、まあ上手い事やるよ。それとL.V. 4の「ランクアップ」おめでとう」

「ありがとう、あんたの方こそL.V. 5への「ランクアップ」おめでとう……って事でもう一回、やろうか」

「いったい、どういう……うあああああつ!!」

アイシャは戦争遊戯のでベルの勇姿によって感情を高め、そのままダンジョンへ行き、L.V. 4に「ランクアップ」した。

お互いの「ランクアップ」を讃え合うとベルはそのまま、アイシャに獲物の如く、貪られたのだった……。

アイシャと昨夜と早朝、甘やかされ蕩かされながら食られたベルは『それじゃあ、ダンジョンに行こうか』と探索に誘われたので一旦、『青の薬舗』へ……。

「やあ、ベル君。また大活躍したそうだな。本当に君は素晴らしいヒューマンだ」
「どうも、ローリエさん。お褒めの言葉、ありがとう」

するとダンジョン探索に誘いに来たローリエが居て、そうして彼女も加えてベルはリルカにダフネとカサンドラ、アイシャらと共にダンジョン探索する事が決まった。

因みにベルが24階層の異変を解決した事で彼にそれを依頼した冒険者の一団、そして彼らと同じく困り果てていた冒険者たちがお礼とばかりに『青の薬舗』には大量の回復薬や様々な効能を有する薬を作れる原料がタダで贈与されていたりする。

「それじゃあ、行つてくるぜ」

「うん、行つてらっしゃい」

そうして、ベルはダンジョン探索に向かうために本拠を出たのだが……。

「ベルさーん、また少しでも良いので店に寄ってくださいね」

「シルだけ、狡いですよベル」

「そうだよ、ベル」

「私達だつてずっと愛でてあげたいのよ……」

「いつでも、甘やかしたり、可愛がってあげるニヤ」

「うふあ……わ、分かったから……や、止めろお……」

『豊穰の女主人』の近くを通った事でシルに抱き着かれ、更にリユーヤルノアにクロエとアーニヤらにもそれぞれ、寄り添われ頭や顔を弄りに弄られ、心地良くなるツボを徹底的に刺激されてしまい、蕩けるのだった。

そうして、ダンジョン探索する前に依頼でも受けるかとギルド本部に行けば……。

「エイナちゃんが迷惑してるだろ、さっさと退け、下賤なドワーフめ」

「そつちこそ、エイナちゃんに気障な事して困らせてるだろ。いけ好かないエルフめ」

「あ、あの……」

ローズの同僚にして、セミロングのブラウンにエメラルド色の瞳を有する容姿は端麗だがかどの取れた風貌をしているハーフェルフの受付嬢、エイナ・チュールの前でドワーフとエルフの男の冒険者が醜い争いをしていた。

「どつちもどつちどころか、この場の全員にとってお前らは大迷惑だ。「アルカディア・ベル」!!」

『ぐばあっ!!』

ベルはそんな二人へと近づき、両掌を向けて無詠唱の音撃魔法を炸裂させて二人を昏倒させた。

「そこで転がってろ」

そして、二人の身体を掴むと引きずり、本部を行き来する者たちの邪魔にならないよう敷地内の端へと転がした。なお、この後は「ガネーシャ・ファミア」の団員によってドワーフのドルムルとエルフのルヴィスは本拠の『反省牢』まで連行された。

「手荒なものを見せてすまなかった」

「いえ、二人の争いを止めてくれてありがとうございます。ベル・クラネル氏……えつと、ここうかな？」

「親友を助けてくれてありがとう」

「やっぱり、優しいわねベル」

「ちよ、だ、だからなんで皆……」

エイナと彼女とは親友である短い桃色の髪に愛嬌のある顔つきのヒューマンの受付嬢であるミイシャ・フロットとローズはそれぞれ、ベルの頭や顔をやはり、弄り尽くして蕩けさせる。

「では、私もついでに……」

「あ、アミッドさ……ふ、くうう……」

更に治療師としてダンジョンへと赴くための格好に装備をしたアミッドが近づき、彼女も又、ベルを蕩けさせる。

彼女以外にも「ディアンケヒト・ファミリア」の治療師や薬師が居て、なんでもミアハが「アポロン・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」と商売関係を築いたことに業を煮やしたディアンケヒトにより、リヴィラで試しに行っている『臨時治療院』でも本格的な営業形態へと変えるように言われたとの事だった。

「そういう事で18階層までの護衛、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、良いぞ。断る理由が無いしな」

「ありがとうございます」

そうして、18階層にあるリヴィラまでの護衛をベルは頼まれ、引き受けたのだった……。

四十話

ベル・クラネルは今日、自分と同じ派閥の団員であるリリルカにダフネとカサンドラに「ヘルメス・ファミリア」のローリエ、「イシュタル・ファミリア」のアイシャと共に冒険者としてダンジョン探索をしようとしていた。

すると定期的にダンジョンの18階層にある宿場街にして中継拠点である『リヴィラの街』で開いている臨時治療院の本格的な開業（因みに順次、本拠からリヴィラに、リヴィラから本拠へという風に交代制との事）を行うという「ディアンケヒト・ファミリア」の団長であるアミッド他、彼女たちの派閥が誇る治療師達の護衛を引き受けた。

とりあえず、上層を進みながらもベル達は危機に陥っていた冒険者たちがいれぱすぐに助け、怪我を負った者がいれぱアミッドたちによる治療を行う人命救助をしていく。

そして、『リヴィラの街』に到着すると……。

「護衛を引き受けて頂き、ありがとうございます。ベルさん……とりあえず、ここまで報酬です」

「んむ……ふ……ああ、確かに頂いた」

臨時治療院としてベルが前に利用したものの、今だ客足が乏しい『ヴィリーの宿』が選ばれ、その中まで行くとアミッドはベルに礼を言いつつ、彼に深い口づけをししながら、頭を撫でた。

そうして、ベル達は『大樹の迷宮』へと向かうと……。

「ふっ!!」

「はあっ!!」

押し寄せるモンスター達を相手に自分の可能性や応用性を広げる意味もあって、あえて今回は「スキル」による加速能力や「ケラウノス・エナジー」は使用せずにしかし、それでも十分に超速の速度でダンジョンを縦横無尽に駆け跳ねながら、長剣や手足による打撃にて殲滅。

或いは無詠唱や超短文詠唱による鐘音の砲撃にて粉碎、攻撃や魔法にチャージを織り交せて次々とモンスターを滅しながら、魔石やドロップアイテムを回収する。

「負けられないねえっ!!」

アイシャもベルの勇姿にアマゾネスとして昂ぶりながら、荒々しく舞いながら斬撃と蹴撃をモンスターへと炸裂させては屠っていく。

「私ももつと頑張らないと」

「出来る範囲だけでもね」

ローリエとダフネもベルたちほどではないが、それでも今後は役に立てるように経験を積むためというのもあって、積極的にモンスターと戦い、奮戦する。

「リリも支援を頑張ります」

「勿論、私も」

リリルカとカサンドラはそれぞれ、サポーターとヒーラーという立場のために後方支援に励んでいた。

そうして、ベルの『幸運』のアビリティ故か大量の魔石と『ドロップアイテム』を獲得すると……。

「相変わらず、すっげえすね」

「オラリオの冒険者たちの『ランクアップ』記録を更新しまくってるからねえ」

「見た目は兎人わたくしより、兎っぽくて可愛らしいんですけどね」

【ロキ・ファミリア】に所属するLV・4の第二級冒険者であり、尖った黒髪に凡庸な風貌で中肉中背のヒューマンの男であるラウル・ノールドや黒い毛並みの美しい猫人の女性にしてLV・4のアナキティ・オータム。

L.V. 3 になってまだ短く、短い緑髪に緑色の兎耳の女性であるラクタらがベルの戦い振りを見て、そう感想を言っていた。

「お、あんたたちは確か【ロキ・ファミリー】の……遠征の時はよろしくな」

「こちらこそつす」

「頼りにさせてもらおうわね」

「お互い頑張りましょう」

アイズがL.V. 6 になった事で向上心に火がついたとの事で【ロキ・ファミリー】では特訓ブームが訪れているなどの話をしつつ、そう最後に言葉を交わして彼らと別れた。

そして、ダンジョンからオラリオへと帰還し、ギルド本部にて換金や山分けを済ませて『豊穡の女主人』へと向かい……。

「んふああ、お、お姉ちゃんたちい……いじめないでえ……」

『いじめてないよ、可愛がってあげてるのよ』

ベルを愛する女子勢との相談によって決めた事により、ベルはナーザが開発した薬で腑抜け兎状態となったベルは前に『豊穡の女主人』で宿泊したときと同じ部屋にてシ

ルにリユ一、ルノアにクロエにアーニヤたちによつて口だけでなく、体中に口づけされ、愛撫され、奉仕されながら溶けていると錯覚する程の愛と快楽を与えられたのであつた……。

四十一話

数日後にダンジョンへと『遠征』に向かう〔ロキ・ファミリア〕のそれに同行する事となったベル・クラネルだが丁度、遠征当日に自信が所属する〔ミアハ・ファミリア〕の新店舗が完成する日でもあった。

なのでその準備の方を手伝いつつ、冒険者としての活動をしながら日々を過ごしていたが……。

「とりあえず、手入れは終わらせといたぞ。それに新しい剣と鎧も造った。こっちは遠征の時に渡すので良いよな？」

「ああ、ありがたいなヴェルフ」

手入れを頼んだ時に二日ほどかかると言われたので手入れを頼んだ二日後にヴェルフの工房へと向かえば、ヴェルフが剣と鎧を渡しながら言ってきた事に対し頷きながら返事をした。

「で、今日の予定は何するんだ？」

「ちよつと、とある派閥と鍛錬をな」

「ん、遠征に同行するっていう【ロキ・ファミリア】じゃないのか?」

「ああ、そつちじゃない」

「別に何しようとかやかくは言わないが、手入れしたばかりのそれを壊したりするなよ」

「善処する」

ヴェルフからの質問に答えながら、彼が結構真剣な様子で言ってきた事にベルも又、真剣に答えた。

そうして、手入れが終わった長剣と鎧を装備してヴェルフの工房を出るとオラリオの市内を建物の屋根から屋根へと超速で跳躍する事で移動する。

ベルの目的地とはオラリオの南方、第五区画。

そこには見上げる程に高い門、塀と呼ぶにはあまりにも堅牢な四壁で覆われた建物があつた。

南方は繁華街であり、その建物は中心にありながら、その風景とは隔絶した雰囲気も放っている。

此処こそは主神がオラリオに聳え立つ巨塔、バベルの頂上の部屋の使用を許される程の権威を有する派閥、【フレイヤ・ファミリア】の本拠こと『フオールククヴァンク戦いの野』である。

ベルはヘイズの話で聞いた【フレイヤ・ファミリア】で行われている殺し合いそのも

のな『洗礼』を受けに来たのだ。

話自体はバベルの頂上の部屋へとフレイヤに言われた時にしており、更には二日前、『豊穡の女主人』へと行った際にシルに今日、『フレイヤ・ファミア』に行く事は言っていた。

そして……。

「ようこそ、ベル……私達の『ファミア』へ」

「暖かい歓迎、ありがとよヘイズさん。悪いな何度も出迎えてもらって」

「いえいえ、ベルなら喜んで出迎えますよ」

自分の本拠の前で待っていたヘイズがベルを出迎え、微笑んだ。

「では、早速開けますね」

「ああ、頼んだ」

そうして、ヘイズにより、門は開かれ……。

「うお、す、凄え光景だな。おいっ!!」

そして、目撃した『戦いの野』が全貌にベルは驚愕の声を上げた。

白や黄の小輪が揺れる美しい原野が広がり、敷地の中央の丘には『神殿』あるいは『宮殿』と見紛う巨大な屋敷が建っていて都市の中にあつて世俗から切り離された雄大な光景は一枚の絵画のようですらあつたからだ。

「驚いてくれたならなにより。ほら、お相手が待っていますよ」

ヘイズがベルに微笑み、指差した方向には……。

「まさか、自分から僕たちの洗礼を受けようとするとは」

「あの方の寵愛に応えようとするのは良い心がけだ」

「『^{エインヘリヤル}強靱な勇士』に相応しいかどうか証明しろ」

「さあ、やるぞ」

四人の小人の兄弟にして「^{フレイヤ・ファミリア}フレイヤ・ファミリア」の幹部が長男をアルフリツグにドヴァリン、ベーリング、グレールらガリバー四兄弟。

冒険者としての「^{ステイタス}ステイタス」は四人全員、L.V. 5である。

二つ名も四人としてのものであり、「^{ブアリオンガール}炎金の四戦士」。

そんな彼らが砂色の兜に砂色の鎧は同じだが、武器はそれぞれ長槍に大槌、大斧、大

剣を持っているフル装備で待機していた。

「ああ、よろしくお願いするぜえっ!!」

ベルは本気の戦意をぶつけてくるガリバー四兄弟に対し、同じく戦意を全開にして返しながら強者が相手してくれることに対し、喜びの笑みを浮かべる。

そして、今から始まるベルとガリバー四兄弟の戦いを屋敷にある神室、その謁見室で胸を高鳴らせながら注視する者が居た。

「さあ、私をあの時以上に見惚れさせてちょうだい……」

フレイヤはベルが見せてくれるだろう勇姿への期待、そして現時点で輝きを増している魂に興奮しながら艶を感じさせる表情を浮かべ、艶のある声で呟いたのであった……。

四十二話

『迷宮都市オラリオ』において頂上の権威と勢力を有している最大派閥の一つ、「フレイヤ・ファミリア」。

その本拠である『戦いの野』では毎日、朝から日暮れまで自派閥の眷属同士による殺し合いの如き鍛錬である『洗礼』が行われている。

しかし、実力的にも余波が本拠から外へと伝わる程に超絶的な激闘を繰り広げることが必要な第一級冒険者であるLV・5にLV・6、そしてオラリオ唯一のLV・7の「ステイタス」を有している幹部に団長たちは本拠内での『洗礼』は禁じられていたが……。「おおおっ!!」

「スキル」の効果もあつて本来のLV・5の「ステイタス」による『敏捷』を超えた超速の存在として駆け跳ねながら、長剣による閃舞にてベル・クラネルは空間に軌跡を刻み続けていく。

しかし……。

「甘い」

「温い」

「未熟」

「そんな程度か」

四人の小人族の兄弟であり、全員ブリキのような印象を与える砂色の兜と全身鎧を纏った「炎金の四戦士」が長槍に大斧、大剣に大槌を携え兎の如き、剣士であるベルを狩り尽くすための狩猟者として対処に映る。

「ぐ、づう、ぬ……がああああっ!!」

四方からベルの移動進路を狭めるように包围し囲みつつ、それぞれ異なる武器が同士討ちすることなくベルへと同時に、あるいは多少の時間差を持ってベルへと襲い掛かり、傷を刻んでいく。

対してベルの反撃は四人がそれぞれ彼の意識を誘導する事でタイミングや剣閃を鈍らせ、無力化する。

それは声はおろか目すら合わせず、四男であるグレールは観察能力に秀で、三男であるベーリングは索敵能力に秀で、次男ドヴァリンは魔力察知能力に長け、長男アルフ

リッグは計算能力が高いとそれぞれの分析を一つに纏めながら、『意思疎通』と『意志共有』を果たす事でお互いの行動を補完し合い、それぞれの能力を相乗的に激高させる【炎金の四戦士】の真骨頂、類まれなる連携技術によるものだ。

更にはベルより当然、戦闘経験は豊富であるし彼らの派閥にはオラリオの中でも最強と呼ばれる団長にそして何より、そんなオツタルより最速として知られる副団長がいる。

故に速度を活かした戦法を取るベルのそれには慣れ切っている。故に後は只、ベルを一方的に狩り取るだけ……とはいかなかった。

「良いねえ、それでこそだあつ!!」

『!?!』

自らの血肉を代償に捧げながらも反撃の乱閃を放ち、更には防御や回避を少しずつ上達させていく。

「おらあああつ!!」

『ちいっ!!』

そうして激烈なる轟閃にて四兄弟の包围を切り払ってみせる。

「ふう……ああ、やっぱりやるなら格上が一番だな。お陰で大事な事を学んだぜ。『背中だけが死角じゃない』、『四方に意識を向ける』、『あらゆる不視^{ふし}を殺せ』、『回避防御迎撃を同時に出来なければ話にならない』って事をな」

ベルは全身から血を流しながらも寧猛に笑って呟いた。

「ふん、俺たちが付き合ってやっているんだから気づくのは当たり前だな」

「だが、学ぶだけじゃ意味が無いぞ」

「実践しないと」

「出来るのか、ベル・クラネル」

ガリバー四兄弟はベルに対し、自分たちが相手するのに相応しい存在だと認識する。

「出来るかじゃなくてやるしかねえだろ。コツは掴んだ……後悔させねえから続きを始めようぜ、勝つのは俺だけだなあっ!!」

『やってみろおっ!!』

そうしてベルとガリバー四兄弟は続きを開始した。そんなベルとガリバー四兄弟の魂はベルの強烈に熱く輝く魂のそれに呼応するようにガリバー四兄弟の魂が熱くなり、

輝きを増していく。

「ああ、本当に貴方は素敵よ。ベル」

フレイヤは激闘を繰り広げるベルの一つ一つに興奮し、悦びの声を上げていたが更に
快楽を感じながら、身を震わせつつ、口からは艶声やそうした息を吐くのであった……。

四十三話

『戦いの野』で行われている「フレイヤ・ファミリア」において主力陣を担っている四人兄弟のパルウムである「炎金の四戦士」と「ミアハ・ファミリア」のベル・クラネルという全員がL.V. 5の第一級冒険者同士の手合わせによる武威の衝突は加速度的にボルテージを上昇させ続けていった。

「うおおおおおっ!!」

『はあああああつ!!』

常に四人による連携の極技を持ってそれぞれの方向から包囲しつつ、惑わしながら仕留めようとするガリバー四兄弟とそれに抗うベルは縦横無尽に自分たちの戦場を駆け跳ねながら、武威を込めた武器を踊らせては空間中に轟閃の軌跡を刻んでいく。

恐ろしいのは誰もかれもが移動に攻撃と回避に防御と反撃というあらゆる戦闘行動をすべて同時に行っている事だ。

そう、最初こそベルはガリバー四兄弟に圧されていたというのに今では殆ど互角に渡り合っていた……。

「ち、苦境であればあるほど能力を上げる〔スキル〕持ちだな」

「（それにどうやら、体力と精神力を回復するものも持っているようだな）」

「（この戦いを通して成長してもいるしな）」

「（戦うために生まれたような存在だな）」

ベルとの戦いを通してガリバー四兄弟は彼の「スキル」を把握しながら……。

『（だから、どうしたっ!!）』

ベルが戦いにおいて有利になる「スキル」をいくら持っていようと自分たちが負ける理由にはならないし、勝利は揺るがないと咆哮する。

何故なら彼らは絶対の女神の眷属たる『強靱なる勇士』。偉大なる女神に相応しい戦士となるために今までに多くの理不尽を経験し、不条理の場数を踏む事で自分の限界を超え続けてきた。

それに腹立たしいにも程があるが、自分たちに並ぶ戦士が自派閥内の主力陣にはまだ三人いるし、現段階では自分たちより強い存在である団長もいる。

自派閥内だけでも強者や難敵と何度もぶつかり合ってきている。ベルとの手合わせなどガリバー四兄弟にとっては屁でもないのだ。

「くく、ははは……あははははははは。本当に、本当に最高だなあっ!! このままどんど

ん、アゲていこうぜえっ!!」

格上であるガリバー四兄弟との手合わせに満足しながら、勝利を掴むべく戦意を爆発的に燃烧させて動くベルはそう、宣言しながら……。

「ビート轟け——【ケラウノス・エナジー】!!」

ベルの内部にて雷霆の燃料が生成され、動力源として注がれる事で彼の身体は雷霆の輝きを纏ったっ!!

『なっ?!』

「逃がすかよおっ!!」

超絶的に能力を強化したのを勘で悟り、動くガリバー四兄弟を超絶なる雷霆の如き、轟閃剣舞によって襲撃するベル。

『ぐああああっ!!』

そうしてガリバー四兄弟を吹っ飛ばしながら地面に倒す。

「ぐふ、へへ………本当に最高だなあ」

全身傷だらけで衣服もボロボロなベルは吐血しながらも笑みを浮かべる。そして……。

「ゼオ・グルヴェイグ!!」

ヘイズによる治癒魔法が発動し、ベルとガリバー四兄弟に黄金の魔力光が浴びせられる。

「ふふふふ、まだまだ終わりじゃないとはなあ」

「ああ、これが『洗礼』だ」

「一度、不覚を取ったからと言って気を抜くんじゃないぞ」

「直ぐに逆転してやる」

「どこまで楽しんでいられるかな」

そうしてまだまだ格上との手合わせを楽しめる事に笑みを浮かべるベルに対し、立ち上がるガリバー四兄弟が声を上げた。

そう、『戦いの野』では毎日、日没まで「フレイヤ・ファミア」の勇士たちによる殺し合いの如き手合わせは行われるし、その間、倒れても治癒士や薬師によって蘇生されて再戦を余儀なくされるのである。

『おおおおおおおっ!!』

こうして際限なく、ベルとガリバー四兄弟との激闘はその勢いを増していき……。

「はあ、はあ、はあ、はあ……俺の勝ちだ」

日没の時間帯……倒れ伏したガリバー四兄弟を焦点が合わないながら見下ろしつつ、ベルは『戦いの野』に勝者として立っていたのであった。

「はああ……やっぱり、貴方は素敵よベル」

何度となく絶頂し、艶と色気の籠った息を吐きながらフレイヤはベルを讃えるのであった……。